

の任と爲す」とある。【六】 冥猿 闇夜に啼く猿。

【題義】 別れた其人は、山僧といふだけで、何といふ名か、一切分らぬ。

【詩意】 何處に住んで居る名僧か知らぬが、水西寺に來りしに因り、一所に舟に乘じ、月を弄び、夜もすがら、涇溪に宿して居た。かくて夜あけになると、われに別れて、山に登つて去り、手に錫杖を執り、雲梯の如き磴道を踏んで往つたが、身を跳らせば、三天の近きを覺ゆべく、足を擧ぐれば、萬壑の低きを見るべく、恰も天地の中間に居るやうなもので、その危険も、亦た甚しい。この僧の戯れふざけることは、支公の下に在らざるべく、その風流は、慧遠と同じである。この度、ここに別れた上は、何日また逢へることやら、かくて、相思の情自ら堪へず、かくて、夜もすがら猿の聲の悲しきを聞いて、愈よ斷腸の想を増した。

【餘論】 この詩は十句で、七言排律の體を爲しては居るが、第三第四の兩句が對偶を爲して居らぬ。唐詩品彙に「七言排律、唐人多く見ず、太白の別山僧、高適の宿田家等の作の如き、聯對精密と雖も、しかも、律調未だ純ならず、終に是れ古詩の體段」とあつて、如何にも、其通りである。

贈別王山人歸布山

王山人の布山に歸るに贈別す

王子析道論。微言破秋毫。

王子、道を析して論じ、微言、秋毫を破る。

還歸布山隱。興入天雲高。

還た歸つて布山に隱れ、興は天雲に入つて高し。

爾去安可遲。瑤草恐衰歇。

爾去る、安んぞ遅かるべけむや、瑤草、衰歇を恐る。

我心亦懷歸。屢夢松上月。

我が心、亦た歸るを懷ひ、屢ば夢む松上の月。

傲然遂獨往。長嘯開巖扉。

傲然として、遂に獨往、長嘯、巖扉を開く。

林壑久已蕪。石道生薔薇。

林壑、久しく已に蕪し、石道、薔薇を生ず。

願言弄笙鶴。歲晚來相依。

願はくは言に笙鶴を弄せよ、歲晚、來つて相依らむ。

【字解】 【一】 破秋毫 三國志の註に「管輅別傳に曰く、何尙書、神明精微、言皆巧妙、巧妙の至、殆んど秋毫を破る」とあり、孫綽の太尉庚亮碑に「微言、秋毫に散じ、玄風、德音に暢ぶ」とある。微妙の言辭が極めて細かい處まで行き互るといふ義。

【題義】 この詩は、王山人が布山に歸る時、別に際して贈つたのである。しかし、王山人の閱歷等は分らない。

【詩意】 王山人が宇宙の本體たる道を解析して論ずるを聞けば、いかにも微妙で、極めて細かい處まで行き互り、さすがに、その修養の深いことが分かる。君は、今、ここより還つて、布山に隱れむとし、歸興は、高く天上の雲に入るばかり。汝、去ること、決して遅かるべからず、今しも秋で、瑤草は衰歇せむとして居る。われも、客土に飄零すること既に久しく、仍つて、歸るを懷うて、夢に故山

の松に懸れる月の景色を見る程である。君は、傲然獨り往いて、長嘯し、舊居の巖扉を開いて、その中に住まはれるであらう。しかし、久しい間、誰も居なかつた爲に、林壑も荒れはてて仕舞ひ、石かどかどしき細道には、野薔薇が生ひ茂つて、往來も六つかしい程であらう。君は此に在つて、笙を吹き、鶴を伴うて、心のどかに浮世の事を忘れて居れば善いので、われも亦た晩年に成つたらば、世事を謝して、そこへ往つて、君と一所に住むことに致さう。

【餘論】 王山人の人物は、起首四句に盡きて居る。それから、我心亦懷歸の二句は、突出に類するが、結二句の針線となつて居て、結構を緊密にし、且つ平板の弊に陥らぬ様にしたものである。

江夏別宋之悌

江夏にて宋之悌に別る

楚水清若空。遙將碧海通。

楚水清きこと空の若く、遙に碧海と通ず。

人分千里外。興在一杯中。

人は分つ千里の外、興は一杯の中に在り。

谷鳥吟晴日。江猿嘯晚風。

谷鳥、晴日に吟じ、江猿、晚風に嘯く。

平生不下淚。於此泣無窮。

平生、涙を下さず、此に於て、泣くこと窮まりなし。

【字解】 一 清若空 劉楨の詩に煙峰晦如畫、寒水清若空とあり、陸放翁の入蜀記に「鸚鵡洲より以南を漢水となす、水色澄

澈、鑑すべし、太白云ふ、楚水清若空と、蓋し此を言ふなり」とある。

【題義】 これは、江夏に於て、宋之悌に別れる時に作つたのである。

【詩意】 漢水は、澄み切つて、その色は、青天と一般、しかも、大江に入つて、遙に碧海と通じて居る。今や、われ等兩人、故郷を去る千里の外に在つて、將に相別れむとし、一杯を傾け、強ひて興を縦にして居る。さきには、谷を出た鳥が晴日に歌つて居たが、やがて、黄昏ならむとすれば、江邊の樹樹に栖む猿は、晚風に嘯いて居る。われは、剛健以て性と爲し、平生涙を落したことはないが、今日は、この地、この景に對し、とめどなく涙の下るを禁じ得ない。

【餘論】 胡震亨は「項聯、達夫の功名萬里外、心事一杯中と、皆庾抱之の悲生萬里外、恨在一杯中より來る。而して、達夫は較や厚く、太白は較や逸、並に未だ軒輕し易からず」といひ、胡應麟は「高は渾厚と雖も到り易し、李は超逸、神に入る」といひ、乾隆御批には「高きに登つて呼ぶ、衆山皆響く」とある。

李太白集 卷十五

送

送とは、人の遠別を餞すること、その作は、即ち送別の詩である。

南陽送客

南陽に客を送る

斗酒勿爲薄。寸心貴不忘。斗酒、薄しと爲す勿れ、寸心、忘れざるを貴ぶ。

坐惜故人去。偏令遊子傷。坐に故人の去るを惜み、偏に遊子をして傷ましむ。

離顔怨芳草。春思結垂楊。離顔、芳草を怨み、春思、垂楊を結ぶ。

揮手再三別。臨歧空斷腸。手を揮つて再三別る、歧に臨んで、空しく斷腸。

【字解】 斗酒、一斗の酒、今の一升ばかりの量である。古詩に斗酒相娛樂、聊厚不爲薄とあるに本づく。 揮手、劉鑠の詩に揮手從此辭とあつて、張銑の註に「揮手とは、手を舉げ辭別するなり」とある。

【題義】 この詩は、南陽に於て、客の遠行を贈つたのである。

【詩意】この一斗の酒を薄しといふ勿れ、わが寸心は、どうぞ忘れて呉れるな。今や客中に客を送り、故人の此を去るを惜んで、偏に遊子の此心を傷ましめる。別れの顔は、芳草の時を得たるを怨めしと眺め、春の思は、しだれかかる柳を結び、それで君の行を送るのである。かくて、手を舉げて、再三、辭別の言葉述べ、路の歧れる處に佇んで、空しく斷腸するばかりである。

【餘論】鍾伯敬は「項聯、是れ客中客を送るの語、説き得て渾然として覺らず」といひ、乾隆御批には、「古詩十九首より脱化して出で、詞意俱に古、詠じて五六に至れば、蘊藉風流といふべし」とある。

送張舍人之江東

張舍人の江東に之くを送る

張翰江東去。正值秋風時。

張翰江東に去らむとし、正に秋風の時に値ふ。

天清一雁遠。海濶孤帆遲。

天は清くして一雁遠く、海は濶くして孤帆遅し。

白日行欲暮。滄波杳難期。

白日、行く暮れむと欲す、滄波、杳として期し難し。

吳洲如見月。千里幸相思。

吳洲もし月を見れば、千里幸に相思へ。

【字解】(一)張翰、晉書に「張翰、大司馬東曹掾となる、秋風の起るに因つて、乃ち吳中の菰菜蓴羹、鱸魚の膾を思つて曰く、人生、適意を得るを貴ぶ、何ぞ能く羈宦數千里、以て名爵を要せむや」と、遂に駕を命じて歸る」とある。(二)千里、楊素の詩に「千里悲無駕、一見杳難期」とある。

【題義】この詩は、張舍人の江東に之くを送つたのである、舍人の名字閱歷等は分らぬ。

【詩意】君は、古しへの張翰の如く、正に秋風の時に値うて、遽に江東に赴かれる。時しも秋、天は清くして、一雁遠く去り、海は濶くして、孤帆は行くこと遅いやうに見える。白日は、行くゆく暮れむとするも、海上の滄波は、杳然として、いつ又逢へるか分らない。かくて、愈よ其地に著せし後、吳洲に於て明月を見たならば、千里を隔てて我あるを懐ひ、幸に相思の情を寄せて貰ひたい。

【餘論】送られる人が張舍人であるから、同姓の因で、張翰を引き出したので、常套の故事を活用したものである。三四は、まことに名句で、嚴滄浪は「三四情境曠逸、望むべく思ふべし」といひ、方虛谷は「一雁孤帆の句、亦た以て吾が道不遇の歎を寓す、下旬、白日滄波を引き、行欲暮杳難期といふ、意、見るべきなり」といつた。なほ、一本には五六兩句を白日行已晚、欲暮杳難期に作つてある。

送王屋山人魏萬還王屋并序

王屋山人魏萬の王屋に還るを送る、并に序

王屋山人魏萬云。自嵩宋沿吳。相訪數千里不遇。乘興遊台越。經永嘉。觀謝公石門。後於廣陵相見。美其愛文好古。浪跡方外。因述其行。

送 送張舍人之江東・送王屋山人魏萬還王屋并序

而贈是詩。

【訓讀】王屋山人魏萬云、嵩宋より、吳に沿ひ、相訪ふ數千里、遇はず。興に乗じて、台越に遊び、永嘉を經、謝公の石門を觀、後、廣陵に於て相見る。其の文を愛し、古しへを好み、方外に浪跡するを美し、因つて、其行を述べて、是詩を贈る。

僊人東方生。浩蕩弄雲海。

僊人の東方生、浩蕩、雲海を弄す。

沛然乘天遊。獨往失所在。

沛然、天に乗じて遊び、獨往、所在を失ふ。

魏侯繼大名。本家聊攝城。

魏侯、大名を繼ぎ、本家は聊攝城。

卷舒入元化。跡與古賢并。

卷舒、元化に入り、跡は古賢と并す。

十三弄文史。揮筆如振綺。

十三、文史を弄し、筆を揮ふこと、綺を振ふが如し。

辯折田巴生。心齊魯連子。

辯は田巴生を折き、心は魯連子に齊し。

西涉清洛源。頗驚人世喧。

西、清洛の源を涉り、頗る人世の喧に驚く。

采秀臥王屋。因窺洞天門。

采秀、王屋に臥し、因つて洞天の門を窺ふ。

竭來遊嵩峰。羽客何雙雙。

竭來、嵩峰に遊び、羽客、何ぞ雙雙たる。

朝攜月光子。暮宿玉女牕。

朝に月光子を攜へ、暮に玉女牕に宿す。

鬼谷上窈窕。龍潭下奔淥。

鬼谷、上に窈窕、龍潭、下に奔淥。

東浮汴河水。訪我三千里。

東、汴河の水に浮び、我を訪ふ三千里。

逸興滿吳雲。飄颻浙江汜。

逸興、吳雲に滿ち、飄颻、浙江の汜。

揮手杭越間。樟亭望潮還。

手を揮ふ杭越の間、樟亭、潮を望んで還る。

濤卷海門石。雲橫天際山。

濤は海門の石を卷き、雲は天際の山に横ふ。

白馬走素車。雷奔駭心顏。

白馬、素車を走らし、雷奔、心顔を駭かす。

遙聞會稽美。且度耶溪水。

遙に會稽の美を聞き、且つ耶溪の水を度る。

萬壑與千巖。崢嶸鏡湖裏。

萬壑と千巖と、崢嶸たり鏡湖の裏。

秀色不可名。清輝滿江城。

秀色、名づくべからず、清輝、江城に滿つ。

人遊月邊去。舟在空中行。

人は月邊に遊んで去り、舟は空中に在つて行く。

此中久延佇。入剡尋王許。

此中久しく延佇、剡に入つて王許を尋ぬ。

笑讀曹娥碑。沈吟黃絹語。

笑つて、曹娥の碑を讀み、沈吟す黃絹の語。

天台連四明。日入向國清。

天台は四明に連り、日入つて國清に向ふ。

五峰轉月色。百里行松聲。

五峰、月色を轉じ、百里、松聲を行る。

靈溪恣沿越。華頂殊超忽。

靈溪恣に沿越、華頂殊に超忽。

石梁橫青天。側足履半月。

石梁、青天に横はり、足を側て半月を履む。

眷然思永嘉。不憚海路賒。

眷然として永嘉を思ひ、海路の賒なるを憚らず。

挂席歷海嶠。廻瞻赤城霞。

席を掛けて海嶠を歷、廻瞻す赤城の霞。

赤城漸微沒。孤嶼前曉兀。

赤城、漸く微沒、孤嶼、前に曉兀。

水續萬古流。亭空千霜月。

水は萬古の流を續ぎ、亭は千霜の月を空しうす。

縉雲川谷難。石門最可觀。

縉雲、川谷難く、石門、最も觀るべし。

瀑布挂北斗。莫窮此水端。

瀑布、北斗を掛け、此水の端を窮むるなし。

噴壁灑素雪。空濛生晝寒。

壁に噴いて素雪を灑ぎ、空濛、晝寒を生ず。『れむや。』

却思惡溪去。寧懼惡溪惡。

却つて、惡溪に去らむことを思ふ、寧ろ惡溪の惡を懼

咆哮七十灘。水石相噴薄。

咆哮七十灘、水石相噴薄。

路創李北海。巖開謝康樂。

路は創す李北海、巖は開く謝康樂。

松風和猿聲。搜索連洞壑。

松風、猿聲に和し、搜索、洞壑に連る。

徑出梅花橋。雙溪納歸潮。

徑は出づ梅花橋、雙溪、歸潮を納る。

落帆金華岸。赤松若可招。

落帆、金華の岸、赤松招くべきが若し。

沈約八詠樓。城西孤岩巖。

沈約の八詠樓、城西孤り岩巖。

岩巖四荒外。曠望羣川會。

岩巖、四荒の外、曠望す羣川の會するを。

雲卷天地開。波連浙西大。

雲は卷いて天地開け、波は連つて浙西大なり。

亂流新安口。北指嚴光瀨。

亂流、新安口、北に指す嚴光瀨。

釣臺碧雲中。邈與蒼嶺對。

釣臺、碧雲の中、邈として蒼嶺と對す。

稍稍來吳都。徘徊上姑蘇。

稍稍、吳都に來り、徘徊、姑蘇に上る。

煙綿橫九疑。漭蕩見五湖。

煙綿、九疑に横はり、漭蕩、五湖を見る。

目極心更遠。悲歌但長吁。

目極まつて、心更に遠く、悲歌但だ長吁す。

廻(六四)繞楚江濱。揮策揚子津。

繞(六四)を廻らす楚江の濱、策を揮ふ揚子の津。

身著日本裘。昂藏出風塵。

身(六四)には日本の裘を著け、昂藏、風塵を出づ。

五月造我語。知非佞人。

五月、我に造つて語る、知る佞の人に非ざるを。

相逢樂無限。水石日在眼。

相逢(六五)うて、樂限りなし、水石、日に眼に在り。

徒干五諸侯。不致百金産。

徒(六五)に五諸侯を干して、百金の産を致さず。

吾友楊子雲。絃歌播清芬。

吾が友楊子雲、絃歌、清芬を播く。

雖爲江寧宰。好與山公羣。

江寧の宰たりと雖も、好し山公と羣す。

乘興但一行。且知我愛君。

興に乗じて、但だ一たび行き、且我が君を愛するを知る。

君來幾何時。僊臺應有期。

君來る幾ばく時ぞ、僊臺應に期あるべし。

東窓綠玉樹。定長三五枝。

東窓の綠玉樹、定めて三五枝を長せむ。

至今天壇人。當笑爾歸遲。

今に至るまで、天壇の人、當に爾の歸る遲きを笑ふべし。

我苦惜遠別。茫然使心悲。

我苦に遠別を惜み、茫然、心をして悲ましむ。

黃河若不斷。白首長相思。

黃河もし斷えずんば、白首長く相思はむ。

【字解】

【一】東方生 漢武内傳に「東方朔、一旦、龍に乗じて飛び去る、同時の衆人、西北より上つて冉冉たるを見る。仰望良久、大霧、これを覆うて、之くところを知らず」とある。

【二】魏侯 左傳に「晉侯、畢萬に魏を賜うて大夫となす」とある。

【三】聊攝城 左傳に「聊攝以東、姑尤以西」とあつて、一統志に「聊城は東昌府城の西北十五里に在り、攝城は博平縣の西南二十里に在り」と記してある。

【四】田巴魯連 太平御覽に「魯連子曰く、齊の辯士田巴、徂邱に辯じ、稷下に議し、五帝を毀り、三王を罪し、五伯を譽り、堅白を離し、同異を合し、一日にして千人を服す。魯連年十二、往いて見て曰く、臣、聞く、堂上の養除かず、郊草芸らず、白刃前に交はれば流矢を救はずと、何となれば、急者救はず、緩者務に非ず。今、楚、南陽に軍し、趙、高唐を伐ち、燕人、十萬の衆、聊城に在つて去らず、國の亡ぶる、且憂に在り、先生將に奈何せむとす。田巴曰く、奈何ともすべきなし。魯連曰く、危は安を爲す能はず、亡は存を爲す能はざれば、學士を責ぶなし。今、臣、將に南陽の師を罷め、高唐の兵を還し、聊城の衆を却けむとす。談説に責ぶところのものは、此の若きが爲めなり。若し能はざるもの、先生の言の如くならば、鼻鳴いて聲を出して、人皆之を惡むに似たるなり。願はくば、先生復た談する勿れ。田巴曰く、謹んで教を受く、と。明日、徐劫を見て曰く、先生の胸は、乃ち飛兎駭駭なり、豈に時に千里のみならむや、と。ここに於て、口を杜ぎ、業を易へ、終身、復た談せず」とある。

【五】王屋 題義の下に詳し。

【六】却來 通雅に「猶ほ何來のごときなり」とある。

【七】嵩峰 即ち嵩山、前に見ゆ。

【八】月光子 藝文類聚に「仙經に云ふ、嵩高山の東南大巖の下、石孔方圓、一丈四方、北に入ること五六里、大室あり、高さ三十餘丈、周圍三百步、自然明燭、相見る、日月の如く、異なるなし、中に十六仙人ありといふ。月光童子、常に天台に在り、時に亦た往來す。この中の人、道あるに非ざれば、望見するを得ず」とある。

【九】玉女窓 五色線に「圖經に云ふ、嵩山に玉女窓あり、漢の武帝、窓中に於て玉女を見ると。謝綽の嵩山に遊ぶ書に云ふ、進んで玉女窓、搗衣石を窺ふ、石誠に異なり、窓は亡し、これ玉女窓、宋時に在つて、已に無し」とある。

【一〇】鬼谷 元和郡縣志に「鬼谷、河南府告成縣の北五里に在り、即ち六國の時、鬼谷先生の居るところ」とある。

【一一】龍潭 一統志に「龍潭は、登封縣東二十五里、嵩頂の東に在り、九潭相接し、その深き測るなし」とあり、登封縣志に「九龍潭は、太室東巖の山巔に在り、水あり、流下し、激衝、潭を成し、盈坎して出で、復た一潭を作す、ともに九潭あり、遞に相灌輸し、水色洞黒、その深き際なし、崖巒險峻、波濤

怒激、登臨するもの、此に至れば、輒ち凜然として畏を生ず。石あり、記す、人の龍潭に遊ぶものを戒め、語笑して以て龍神を贖す勿れ、神怒れば雷恐あり」とある。【三】奔淶。毛萇の詩傳に「淶、水、會するなり」とあり、説文に「小水、大水に入るを淶といふ」とある。【四】汴河。一統志に「汴河は、源、滎陽縣大周山に出で、東溱須鄆の四水を合し、東南、中牟縣に至り、北、黄河に入る」とある。【五】浙江。即ち錢塘江、錢塘縣志に「虞喜云ふ、潮水、浙江に投じ、下折して曲る、一に云ふ、江に反濤あり、水勢折歸、故に浙江といふ。盧肇曰く、浙は折なり、蓋し、その潮、海を出で、屈折して倒流するに取るなり、一名折河」とある。【六】江岸。【七】揮手。手を以て指畫すること。【八】杭越。杭は杭州餘杭郡をいふ、古時越國の西境たり。越は越州會稽郡をいふ、古時越國の都城たり。二郡、中に浙江を隔て、江の北を杭州となし、江の南を越州となす。【九】樟亭。錢塘縣舊治の南五里に在りて、後に浙江亭といふ。【一〇】海門。西溪叢話に「浙江の夾岸、山あり、南を龜といひ、北を楮といふ、二山相對し、これを海門といふ」とある。【一一】耶溪。即ち若耶溪、前に見ゆ。【一二】萬壑與千巖。世説に「顧長康、會稽より還る、人、山川の美を問ふ、顧云ふ、千巖、秀を競ひ、萬壑、流を争ひ、草木、その上に蒙籠し、雲興り霞蔚するが若し」とある。【一三】鏡湖。前に見ゆ。【一四】剡。即ち剡溪、前に見ゆ。【一五】王許。晉書に「會稽に住山水あり、名士多く之に居る、孫綽、李充、許詢、支遁等、皆文義を以て世に冠たり、竝に室を東土に築き、王羲之と同好」とある。王許は、王羲之と許詢。【一六】曹娥碑。黃絹語。太平寰宇記に「地志に云ふ、餘姚に孝女曹娥あり、父、濤に溺つて死す、娥、年十四、號痛して水に入り、因つて、父の屍を抱き、出でて死す。縣令度尙、門生邯鄲子禮をして、碑文を爲らしむ。後に蔡邕過ぎて、碑を讀み、乃ち八字を題して曰く、黃絹幼婦、外孫護白と。魏武、かつて碑下を過ぎ、楊修に謂つて曰く、解するや否や。曰く、解す。魏武曰く、卿、未だ言ふべからず、我が之を思ふを待て、と。行くこと三十里、魏武乃ち曰く、吾、すでに得たり、と。修をして、別に知るところを記せしむ、修曰く、黃絹は色絲なり、字に於て絶たり。幼婦は少女なり、字に於て妙たり、外孫は女子なり、字に於て好たり。護白は受辛なり、字に於て辭たり。謂はゆる絶妙好辭なり、と。魏武、亦た之を記す、修と同じ」とある。【一七】天台。前に見ゆ。【一八】四明。寧波府志に「四明山は天台より發し、郡治の坤隅に屹峙す、上に二百八十峰あり、明越台三州の境に綿互す、三十六洞天の一たり」とある。【一九】國清。天台山志に「國清寺は、

天台縣北十里に在り、舊名天台寺」となる。【二〇】五峰。府志に「その峰五あり、正北を八柱といひ、東北を靈禽といひ、東南を祥雲といひ、西南を靈芝といひ、西北を映霞といふ」とある。【二一】百里行松聲。府志に「鑿字巖は縣北三里に在り、巖上に萬松徑の三字あり、相傳ふ、昔時巖より國清寺に至るまで、大松、列を成す、今無し」とある。【二二】靈溪。天台山志に「縣北十五里福聖觀前に在り、今縣東三十里、亦た靈溪あり、蓋し其名適類するなり」とある。【二三】沿越。溪流に沿うて溯る。【二四】華頂。峰名、山志に「華頂峰は、縣の東北六十里にあり、乃ち天台八重の最高處、高さ一萬八千丈、周圍一百里、晴少くして晦多し、夏、積雪あり、中に黃金洞あり、石色光明、降魔塔に登つて、東、滄海を望めば、瀾漫際なく、望海尖と號す、日の出沒を見るべし、下、衆山を瞰れば、龍虎蟠踞、旗鼓布列の狀の如く、草木蕉郁、殆んど人世に非ず」とある。【二五】超忽。遠き貌。【二六】石梁。即ち石橋、前に見ゆ。【二七】側足。石橋險狹、わづかに足を側てて行くべきをいふ。【二八】半月。石橋彎環の狀に喩ふ。【二九】永嘉。題義の下に見ゆ。【三〇】赤城。前に見ゆ。【三一】孤嶼。浙江通志に「永嘉縣北を孤嶼山といふ、永寧江中に在り、東西兩峰相峙つ」とある。【三二】縉雲。太平寰宇記に「處州縉雲縣に縉雲山あり」とある。【三三】石門。瀑布。題義の下に見ゆ。【三四】空濛。濛は微雨の貌。【三五】惡溪。元和郡縣志に「處州麗水縣に麗水あり、本と惡溪と名づく。その湍流咀險なるを以て、九十里間、五十九灘、名づけて大惡といふ。開皇中、改めて麗水となす、皇朝、これに因つて縣名となす」とある。【三六】七十灘。諸書に五十九灘とあつて、その理由未詳。【三七】李北海。李白の自註に「李公邕、むかし、括州となり、この嶺路を開く」とあり、唐書の本傳に「開元二十三年、起つて、括州刺史となり、後、淄滑二州の刺史を經、京師に上計し、出でて汲郡北海太守となり、時に李北海と稱す」とある。【三八】謝康樂。李白の自註に「惡溪に謝康樂題詩の處あり」とあり、方輿勝覽に「謝公巖、亦た好溪の上に在り、亦た康樂巖と名づく」とある。【三九】梅花橋。未詳。浙江通志に「金華縣東、石碕巖、高さ十餘丈、俯して大溪を瞰る、巖下に洞あり、梅花洞といひ、又梅花溪と名づく」とあるから、橋もいづれ其の邊であらう。【四〇】雙溪。通志に「雙溪は、金華縣南に在り、一に東港といひ、一に南港といふ。東港の源は、東陽の大盆山に出で、義烏を過ぎ、衆流を合し、西行、縣境に入り、又杭慈溪、白溪、東溪、西溪、坦溪、玉泉溪、赤松溪の水を合せ、馬鋪嶺石碕巖下を經、南港と會す。南港の源は、縉雲の黃碧山を出で、永康武義を過ぎて縣境に入り、又松

溪梅溪の水を合し、屏山を經、西北行して東港と城下に會す、故に雙溪といひ、又灑溪と名づく」とある。【五】金華 山名、元和郡縣志に「金華は婺州金華縣北二十里に在り、赤松子得道の處」とある。【五二】赤松 浙江通志に「金華縣北に赤松山あり、相傳ふ、黃初平、石を叱して羊と成す處、と。初平、赤松と號す、故に山、これを以て名づく。後人、これが爲に祠を立て、赤松宮と號す」とある。【五三】八詠樓 一統志に「八詠樓は、金華府治の西南隅に在り、舊名玄暢樓、南齊の太守沈約建つ、登臺望三秋月、會園臨三春風。秋至愍三衰草。寒來悲三落桐。夕行聞三夜鶴。晨征聽三曉鴻。解珮去三朝市。被褐守三山東。の八詠詩あり」とあり、因つて樓の名となつた。しかし、王琦の説に「太白の詩より外、崔顥の沈隱侯の八詠樓に題するの詩、及び嚴維の明月雙溪水、清風八詠樓の句あり、八詠の名、蓋し宋に始まらず」とある。【五四】新安口 浙江通志に「新安江、一名清溪、徽州に出て、歙より淳安縣界を經、嚴州府城の南に至り、婺港を合せ、東、浙江に入る」とある。【五五】嚴光瀨 通志に「富春山は、嚴州桐廬縣西三十五里に在り、一名嚴陵山、清麗奇絶、錦峰繡嶺と號す、前は大江に望む、乃ち漢の嚴子陵の釣處なり」とある。【五六】蒼嶺 通志に「蒼嶺は、台州仙居縣の西北九十里に在り、高さ五千丈、周廻八十里、縉雲に界し、重岡複徑、勢に隨つて高下、その險峭峻絶、東浙の最たり、行者病む」とある。【五七】吳都 即ち蘇州。【五八】姑蘇 吳地記に「吳王闔閭、十一年、臺を姑蘇山に起し、山に因つて名と爲す、西南國を去ること三十五里、春夏遊ぶ、後、夫差高うして之を飾る、越、吳を伐ち、遂に焚かる」とある。【五九】九疑 范至能の記に「客と蘇臺に登る、山頂正平、劫堂あり、蘇石、列坐すべし、相傳ふ、吳の故宮たりと。開臺別館、その前は、湖光、松陵に接し、獨り孤塔の尖を見る。少しく北すれば、點墨一螺、崑山と爲す。その後、西山秀を競ひ、橫青叢碧、洞庭林屋と相質す、大約目力、百里を踰え、登高臨遠の勝を具ふ」とある。しかし、王琦は、疑を挾んで「姑蘇に登り、以て五湖を望む、自らは是れ實景。もし九疑は遠く湖廣の南垂に在り、相去ること數千里、豈に目力の能く及ぶところならむや。或は是れ想像の辭を設爲するのみ。しからざれば、その望見するところの山、その時、亦た九疑の名を冒すものあり、因つて指して詠に入るも、亦た未だ知るべからず」といひ、ひよつとすると、九龍山を指したものでは無いかといつて居る。【六〇】五湖 前に見ゆ。【六一】橈 權の短きもの。【六二】楚江 揚子江。【六三】揚子津 江南通志に「揚子津

は揚州府城の南十五里に在り、一名揚子渡、唐の高宗永淳間の揚子縣なり、舊時建康に四津あり、横江を建康の西津となし、揚子を建康の東津となす」とある。【六四】日本表 李白の自註に「表は朝卿の贈るところ、日本布にて之を爲る」とある。朝卿は即ち安倍仲麻呂、なほ其詳は後に見ゆ。【六五】怡儼 廣韻に「怡儼は前まざるなり、怡儼は瘵の貌」とあり、韻會に「怡儼は固滯の貌」とあり、田汝成は「人の進退果ならざるを言うて怡儼といふ」といつた。【六六】楊子雲 楊利物を指す、李白に江寧宰楊利物畫贊といふ一文がある。【六七】山公 世説に「山季倫、荊州たり、時に出てて酣暢す、人、これが爲に歌つて曰く、山公時一醉、徑造高陽池、日暮倒載歸、酩酊無所知、復能乘駿馬、倒著三白接羅、舉手問葛疆、何如并州兒」とある。【六八】天壇 一統志に「天壇山は、懷慶府濟源縣の西一百二十里、王屋山の北に在り、山峰突兀、その東を日精といひ、西を月華といふ、絶頂に石壇あり、清虛小有洞天と名づく、且に五色影あり、夜、仙燈あり」とある。すると、天壇は王屋山中の一峰である。【六九】黃河若不斷 この二句は倒裝句法で、白首相思ふことは、黃河の水の若く、終に斷絶の時なしといふ意。

【題義】王屋は、元和郡縣志に「王屋山は、河南府王屋縣北十五里に在り、周圍一百三十里、高さ三十里、尙書禹貢に、底柱析城、王屋に至るとは是れなり」とあり、太平寰宇記に「王屋山は、澤州陽城縣南五十里に在り、仙經に云ふ、王屋山に仙宮洞天あり、廣さ三千里、小有清虛洞天と號す、山の高さ八千丈、廣さ數百里、太行析山、佐命たり、中條古鐘、輔翼たり、三十六洞、小有は羣洞の尊たり、四十九山、王屋、重山の最たり、實に不死の靈郷、真人の洞境なり」とあり、名山洞天福地記に「王屋洞は、周圍一萬里、小有清虛の天と名づく、東都に在り」と記してある。魏萬は、唐詩紀事に「魏萬、後の名は顥、上元の初登第、はじめて李白に廣陵に見ゆ。白曰く、爾、後、必ず大名を天下

に著さむ、老夫と明月奴とを忘るる無かれ、と。因つて、盡く其文を出し、顚に命じて之を集めしむとある。そこで、題義は、別號王屋山人、本名魏萬といふものが、王屋に歸らむとするを送つて、この詩を作つたといふのであるが、特に序を添へて、その由来を略記したのである。嵩宋の嵩は嵩山、古しへの宋の地に當るが故に、かく云つたのであらう。沿吳とは、汴河に浮んで、南方の吳地に下つたこと。台越の台は、天台山、古しへの越の地に當るが故に、かく云つたのであらう。永嘉は、唐の郡名、後の温州、江南東道に隸屬して居た。謝公石門は、薛方山の浙江通志に「處州青田縣に石門山あり、石蓋山の西十里に在り、兩峰對峙して、門の如く、中に洞あり、石門洞といふ、道書に謂はゆる元鶴洞天、乃ち三十六天の第三十なり。西南の高谷に瀑布あり、泉、上潭より奔流し、天壁に至る、三十餘丈、天壁より、下潭に至る、四十餘丈、舊と榛莽の間に在り、劉宋の時に至つて、永嘉守謝靈運、性遊覽を好み、はじめて此洞を覓む」とある。廣陵は揚州、すると、此序の大意は王屋山人魏萬が自ら云ふには、嵩宋より汴河を下り、必ず李白に逢はうといふので、相訪ふこと數千里にして、遂に相見るを得ず、しかし、旅興の催す儘に、台越に遊び、永嘉を経、縉雲に至つて、謝靈運の遊賞した石門の勝を觀、處處歴めぐつた揚句に、揚州に於て、はじめて相逢ふを得、仍つて、平生の渴想を慰めた。かういふ話である。予、すでに魏萬が文學を愛し、且つ古しへを好み、且つ衆人と殊にして、飄浪の身跡を方外に寄せ、全く浮世ばなれをして居ることを嘉し、仍つて、平生の行爲を

述べ、この詩を作つて、贈つたといふのである。

【詩意】漢代の東方朔は、もと天上の仙人が此世に墮謫したものであつて、この世を辭してからは、浩蕩として海なす雲を弄び、沛然として、天に乗じて遊び、獨りで何處へでも往くから、その蹤跡はとんと分らない。わが王屋山人は、全く之と相似たる一かどの人物である。魏君は、すでに東方朔の大名を繼ぎ、その本家は、春秋の時の魏氏で、初めて聊攝二城の間に封せられ、今でも、そこが郷貫になつて居る。魏君は、天晴の才を持つて居て、或は卷き、或は舒べ、すべて其時に従つて、玄妙化生の大道に參透せざることなく、その跡は、古しへの賢人と并せ傳ふべきものである。魏君は、年わづかに十三にして、すでに、文史を弄び、筆を揮つて文章を草すれば、さながら綺繡を振ふが如く、その心は、魯仲連に齊しく、その雄辯は、田巴を辟易させる程である。しかし、人世の餘りに囂しく騒しきに驚いて、西の方、清き洛水の源を涉つて、王屋山の奥に分け入り、そして、蘭の秀を摘みつつ、名だたる洞天の門を窺つて、人間未知の靈境に徘徊して居た。兎角する内、偶然にも、中岳の稱ある嵩山に遊び、羽客を友として翱翔し、朝に月光童子といふ仙人を攜へ、暮に玉女窓と稱する洞中に宿し、仰ぎ見れば、名だたる鬼谷は、上の方に奥深くして何處とも知らず、俯して窺へば、名さへ恐ろしき龍潭は、下の方に會流し、水聲鞺鞳と鳴り響いて居る。かくて、山中に在つて、稍や時を移したる後、東して、汴河の水に舟を浮べて、はるばると南方に下り、三千里の長路を辭せずして、わ

れを訪はむとし、逸興騰つて、吳雲に満たむとした。そして、不幸にして予に逢はざりしものから、
 とてもの序に處處遊覽しやうといふので、飄飄として、浙江の岸を過ぎ、手を以て指畫しつつ、杭州
 に至り、樟亭に上つて、名だたる錢塘の潮を見物した。これは、まことに壯觀であつて、濤は海門の
 石を巻くべく、雲は天際の山に横はり、さながら、白馬に乗つて素車を走らすかと疑はれ、その勢の
 凄じきことは、雷の狂奔するが如く、心顔爲に駭くばかり。次に、會稽の山水の美を聞くや、是非これ
 をも見物しやうといふので、やがて、若耶溪邊に往つた。抑も、會稽の山水は、萬壑流を争ひ、千巖
 秀を競ふといはれた位、羣山の峰嶸たるは、名にしおふ鏡湖に齊しく其影を涵して居る。その秀麗な
 る風物は、到底、名状すべからず、四山の積翠は、清く輝いて、江城の中に満ち、人は月邊に遊んで
 去るかと思まれ、舟は空中に在つて行くやうである。そこで、此間に久しく滯留して居たが、やがて
 剡溪に入つて、當年の王羲之、許詢に比すべき名流を尋ねて、之と唱和し、かの曹娥の碑を讀んでは、
 黄絹幼婦などいふ謎めいた語を心中に思案し、しばしは、去りがてにして居た。天台山は、四明山に
 連り、一帶の地域、殊に靈秀を以て知られる處で、夕陽西に没する頃、國清寺に向つて歩を移せば、
 溪山忽ち夜に入り、五峰の頂には、月色を轉じ、百里の間、松竝木ばかりで、瑟瑟たる松聲を耳にし
 つつ、その間をたどつて行くと、靈溪は岸に沿うて溯るべく、華頂の山は、殊に遠くに聳えて居る。
 そして、天然の石橋の青天に横はるを望み、やがて、巖を攀ちて、半月の形を成す其橋を渡ると、如

何にも危険であつて、おもはず足を側てる。それから、永嘉の風景が面白いと聞くと、今は一刻も、
 こらへて居ることが出来ず、海路の遠きを厭はずして、舟を乗り出し、帆を掛けて海嶠を歴めぐつて
 行く間、夕やけの間に隱見する赤城山を回望すると、やがて、次第に見えなくなり、前には孤嶼と稱
 する山が、永寧江中に聳えて居る。そして、水は萬古の末までも續いて流れるが、人工に成れる亭榭
 は、千年の歲月を経ぬ間に、跡方もなく成つて仕舞つた。それから、縉雲縣は、川谷艱阻な處である
 が、中にも、石門は、最も觀るべく、瀑布は高く北斗の處から挂つて居るやうで、その水源は、到底
 探險することが出来ず、飛沫は、石壁に吹きかかつて、白雪を灑ぐが如く、四邊は空濛の中に鎖され、
 晝ながら、寒氣を生ずる。それから惡溪の方へ往かうと思ひ、惡溪といふ名は、如何にもいやらしく恐
 ろしく聞こえるが、そんなことには頓著せず、さて愈よ往つて見ると、七十灘の水は、咆え哮つて、水
 石互に噴薄し、その壯絶快絶なるは、譬へやうも無い位。このあたりの路は、近ごろ、李北海が始め
 て創設したのであるが、謝康樂が其名を留めた巖などもあつて、さすがに、昔なつかしく覺える。そ
 の間、颯颯たる松風は、悲しげに叫ぶ猿聲に和し、極めて、幽邃な景色。そこを繩に絶つて、幾多の
 洞壑を次第に過ぎ行くと、梅花橋といふ處に出る。ここには、雙溪の水が、浙江の一派を爲して、歸
 潮を入れ、もとより舟楫を通じ、金華山の下に往つて帆を卸す。その金華は、黄初平の故蹟であつて、
 この仙人は、なほ招き還すべきやうである。それから、沈約が詩を作つた八詠樓といふのが、金華の

城西に獨り時つて居て、岩臺の勢は、四方荒漠の外に抜き、羣川の會流するを曠望することが出来る。試に樓上に立つて眺めやれば、雲巻くとき、天地豁然として開け、波は遙に連つて、浙西に至れば、河幅が愈々大きくなる。そして、亂流は相聚まつて、新安江口に注ぎ、北の方には、嚴子陵の釣をした早瀬が、彼處かとはかり指點せられる。子陵の釣臺は、晴天の碧雲の中に彷彿として見え、はるかに、蒼嶺と相對して居る。南方會稽の遊も、これで一先づ濟んだ處から、次第に、古しへの吳都たる蘇州の方に來り、やがて、姑蘇の遺墟に上つた。すると、煙の棚引く間に、羣山の影ほの見え、五湖の水は、潏蕩として、さながら際涯なきが如く、目を極むれば、心愈々遠く、まして、今古を俯仰すれば、興亡の感に堪へず、悲歌して長嘆するばかりである。かくて、楚江の濱に楫を廻らして、愈々上陸したる後、鞭を揮つて、揚州に遣つて來たが、身には、珍らしい日本の裘を著し、その丰貌は、昂然不羣、はるかに風塵を脱出して居る。時しも五月で、この廣陵に於て、予を訪問して呉れたので、色話をした。魏君は、愚圖愚圖した人ではなく、まことに、明快直截、逢つて見ると、まことに愉快で、日ごとに、水石の間に一所に遊んだ。その間唯だ五諸侯に遊説はしたが、百金の産をだに致さなかつた。わが友の楊利物といふものは、絃歌を以て民を治め、甚だ清名があつて、江寧宰といふ微官に居るが、その高情逸思は、古しへの山季倫と羣すべき人物である。その人は興に乗じて一たび來たことがあるが、予が君を愛するを知つて、少からず敬服して居た。君は、何時又ここに來

るか、仙人の居る樓臺に往くといふ約束もあらうし、その東窓に翳せる綠玉の樹も、君の不在の間に、三五條の枝を生じたであらう。又天壇山下の人人は、汝の歸ること甚だ遅きを笑つて、浮世に墮落したと言ひ嘸して居るかも知れぬ。それにつけても、早く歸る方が善いが、予は、遠別を爲すを惜み、茫然として心に悲むを禁じ得ず、今より後、白髪頭を抱へて、君を思ふことは、黄河の水の決して斷絶せぬが如くであらう。

【餘論】この詩も、集中有数の長篇である處から、王琦は、特に段落を分ち、一一大意を標出して居る。即ち起首より因窺洞天門に至るまでは、魏萬の文を愛し、古を好み、しかも、王屋に隱居することを美し、竭來遊嵩峰より雷奔駭心顔に至るまでは、その嵩宋より吳に沿うて相訪ふの事を敘し、眷然思永嘉より邈與蒼嶺對に至るまでは、その台州より海に泛んで、永嘉に至り、徧ねく縉雲・金華の諸名勝に遊ぶの事を敘し、稍稍來吳都より且知我愛君に至るまでは、その姑蘇より廣陵に至つて相見の事を敘し、君來幾何時より白首長相思に至るまでは、その山に還つて相別るるを敘したので、段落は、截然として、決して紊れて居ない。嚴滄浪は、「一篇記遊の文、勝情飛動す」といひ、乾隆御批には「彼の述ぶるところに就いて、鋪敘文を成し、その曲折に因り、緯するに佳句を以てし、大に、帆、湘に隨つて轉じ、水到り、渠成るの概あり」といつて居る。篇中の山水自然の風景を敘した處は、李白獨特の擅場で、殆んど、他に比類なく、且つ他人の話を敘して、必ずしも、境地と分毫の差なきを

要せざるに因つて、筆端、窘束するところなく、愈よ其勝を擅にして居る。この詩にも、ちよいちよい異同があるが、就中、路創李北海、巖開謝康樂を、一本には嶺路始北海、巖詩題康樂に作り、揚升菴は、この詩を引いて、遠尋惡溪去、不憚惡溪惡、途傳李北海、灘開謝康樂に作り、巖の字を以て誤として居るが、矢張、本文に掲出したのが一番善いやうである。それから、李白の此詩に對して、魏萬の和作があるので、それは、金陵酬翰林謫仙子と題し、即ち左の通りである。

君抱碧海珠。我懷藍田玉。各稱希代寶。萬里遙相燭。長卿慕蘭久。子猷意已深。平生風雲人。暗合江海心。去秋忽乘輿。命駕來東土。謫仙遊梁園。愛子在鄒魯。二處一不見。拂衣向江東。五兩挂淮月。扁舟隨海風。南遊吳越徧。高揖二千石。雪上天台山。春逢翰林伯。宣父敬項橐。林宗重黃生。一長復一少。相看如弟兄。惕然意不盡。更逐西南去。同舟入秦淮。建業龍蟠處。楚歌對吳酒。借問承恩初。宮買長門賦。天迎駟馬車。才高世難容。道廢可推命。安石重攜妓。子房空謝病。金陵百萬戶。六代帝王都。虎石踞西江。鍾山臨北湖。湖山信爲美。王屋人相待。應爲歧路多。不知歲寒在。君遊早晚還。勿久風塵間。此別未遠別。秋期到仙山。これを本詩と同じく解釋すると善いが、大に紙數を増加するから、止むを得ず、ここには見合せ。しかし、兩詩を併觀すると、二人の交情及び當時行旅の次第などが、すつかり分るから、決して、輕しく看過してはならぬ。

送當塗趙少府赴長蘆

當塗趙少府の長蘆に赴くを送る

我來揚都市。送客回輕舸。我は揚都市に來り、客を送つて輕舸を回す。

因誇楚太子。便觀廣陵濤。因つて楚の太子に誇り、便ち廣陵の濤を觀る。

仙尉趙家玉。英風凌四豪。仙尉、趙家の玉、英風、四豪を凌ぐ。

維舟至長蘆。目送煙雲高。舟を維いで長蘆に至り、目送す煙雲の高きを。

搖扇對酒樓。持袂把蟹螯。扇を搖かして酒樓に對し、袂を持して蟹螯を把る。

前途儻相思。登嶽一長謠。前途儻し相思はば、登嶽一長謠せよ。

【字解】一 揚都 即ち揚州。二 輕舸 廣韻に「舸は小船なり」とある。三 便觀廣陵濤 枚乘の七發に「楚の太子、疾あり、吳客、往いて之を問ふ。客曰く、將に八月の望を以て、諸侯遠方の交遊兄弟と竝に往き、濤を廣陵の曲江に觀むとす」とある。

四 仙尉 陶弘景の瘞鶴銘に「丹陽の仙尉、江陰の眞宰」とある。漢の梅福、南昌の尉となり、人傳へて以て仙去と爲す。尉を稱して仙尉といふは、これに本づく。五 四豪 信陵、平原、孟嘗、春申、戰國の末、客を好んだ人人達をいふ。六 把蟹螯 世説に「畢茂世云ふ、一手に蟹螯を持て、一手に酒杯を持し、酒池の中に拍遊すれば、便ち一生を了るに足る」とある。七 長謠 王琦の解に「趙景眞の稽茂齊に與ふる書に、むかし、李叟、秦に入り、關に及びて嘆じ、梁生、越に適き、岳に登つて長謠す。夫れ嘉遁の擧を以て、猶ほ戀恨を懷く、況んや、已むを得ざるものをや。李善の註、老子の嘆、秦に入るが爲ならず、梁鴻の長謠、越に適くに由らず、且つ復た郊に至るを以て關に及ぶとなし、邨に升るを岳に登ると爲す、斯れ、蓋し、意を取つて文を略するなり、太白、

引用して義を取る、又此に異なり、古人用事の法を窺ふべし」とある。

【題義】王琦の解に「唐時、二の長蘆あり。一は是れ長蘆縣、河北道の滄州に隸す。一は是れ長蘆鎮、淮南道、揚州の六合縣南二十五里に在り、陸放翁の入蜀記に曰く、眞州を發し、瓜步山を過ぎ、長蘆寺を望む、樓塔重複、江面渺瀰際なく、殊に畏るべし。李太白の詩に云ふ、維舟至長蘆、目送煙雲高、是れなりと。すなはち、これ六合の長蘆を謂ふなり」とある。この詩は、當塗縣尉たりし趙某の長蘆に轉任するを送つたのである。

【詩意】われ今揚州の市に來た處が、客を送るが爲に、小舟を漕ぎ戻した。客は、昔人が楚の太子に向つて誇つたやうに、これから、廣陵の濤を觀むが爲に、遠く南方へ往くとの事である。客は、縣尉の職に居る。その才藻の美は、名だたる趙氏連城の壁に比すべく、その英風は、四君を凌ぐばかり。かくて、舟行日を送り、やがて、長蘆に到着して、舟を維ぐとき、回顧すれば、空に高く煙雲の立ちこめたるを目送する。かくて、扇を搖かしつつ酒樓に對し、袂を捲くつて蟹を手に入れば、定めて逸興限りなきことであらう。しかし、行く先先に於て、ひよつと予を思ひ出たならば、山に登つて、一たび長謠を試みるが善からう。

【餘論】この詩は、傑作を以て稱すべきものではないが、後半、維舟至長蘆以下は、極めて餘情あつて、さすがに凡手ではない。

送友人尋越中山水

友人の越中の山水を尋ぬるを送る

聞道稽山去。偏宜謝客才。聞くならく、稽山に去ると、偏に謝客の才に宜し。

千巖泉灑落。萬壑樹縈廻。千巖、泉、灑落、萬壑、樹、縈廻。

東海橫秦望。西陵繞越臺。東海、秦望横はり、西陵、越臺を繞る。

湖清霜鏡曉。濤白雪山來。湖は清し雙鏡の曉、濤は白く雪山來る。

八月枚乘筆。三吳張翰杯。八月枚乘の筆、三吳張翰の杯。

此中多逸興。早晚向天台。此中逸興多し、早晚、天台に向はむ。

【字解】一 稽山、謝客。鍾嶸の詩品に「錢塘の杜明師、夜、東南に人あり、來つて其館に入ると夢む、この夕、謝靈運、會稽に生まる。旬日にして謝玄亡ぶ、家、子孫得難きを以て、靈運を杜の治所に送つて、之を養はしめ、十五、方に都に還る。故に客兒と名づく」とある。二 千巖萬壑。前に見ゆ。三 秦望。水經註に「秦望山は、州城の正南に在り、衆峰の傑たり、境を陟つて便ち見はる」といひ、史記に「秦の始皇、これに登り、以て南海を望み、平地より以て山頂を取る七里、懸磴孤危、徑路險絶、蘿を攀ち、葛を捫し、然る後、能く山に升る。上に草木なし、當に地迴に風多きの致すところに由るべし」とある。四 西陵。水經註に「浙江又固陵城北を徑す。むかし、范蠡、城を浙江の濱に築き、以て固守すべしと言ひ、これを固陵といふ、今の西陵なり」とあり、方輿勝覽に「西興渡は、蕭山縣西十二里に在り、本名西陵、吳越武肅王、吉語に非ざるを以て、改めて西興といふ」とある。五 越臺。述異記に「勾踐、四方の士を延き、臺を外に作つて之に館す、今會稽山に越王臺あり」とあり、一統志に「越王臺は、舊と種山の東北に在り、越王勾踐登眺の所、宋の汪綱復た建つ、山の西麓に在り」とある。六 霜鏡。太平御覽に「王羲之云ふ、山陰道上を行く毎に、鏡中に遊ぶ

が如しと。王獻之、鏡湖澄澈、清流瀉注するを望んで、乃ち云ふ、山川の美、人をして應接に暇あらざらしむ」とある。【七】八月、枚乗筆、七發中、觀濤の事を用ふ、すでに前に見ゆ。【八】三吳張翰杯、晉書に「張翰は、吳郡吳の人なり、心に任かせて自適し、當世に求めず、曰く、我をして身後の名を有せしむるも、即時一杯の酒に如かず」とある。

【題義】この詩は、友人が南の方越中の山水を尋ねむが爲に出發するのを送つたのである。

【詩意】承はれば、君は稽山の方へ往かれるさうで、その地は、元と謝靈運に緣故のある處、彼と同じき才ある君にも、亦た大に宜しかるべき筈である。抑も、會稽山水の美は、千巖秀を競ひ、萬壑流を争ふといつた通りで、その千巖の間には、清泉が注ぎ落ち、萬壑の底には、樹が茂つて、そこを水が榮り流れる。それから、東海は秦望山を隔てて横はり、西陵は越王臺を繞り、いづれも、好位置を占めて居るから、そこへ登れば、格別の眺望が出来る。湖水は、澄み切つて、霜鏡の曉に開くが如く、濤は白くして、雪山が押し寄せ來るかと思はれる。むかし、枚乗は、八月の頃、ここで潮を觀て、賦を作つたといふが、さもあるべきことで、君も其先蹤を繼ぐべく、張翰は、又故國なる吳に歸つて、即時一杯の酒を樂んだといふが、君の豪情も、亦た其通りである。何は兎もあれ、會稽山水の間に於ては、逸興多かるべく、そして、名だたる天台山も、程遠からぬ處に在るが、何時そこに往かれるか、これも、亦た決して閉却しては成らぬ。

【餘論】會稽の山水は、前に魏萬を送る詩中に詳しく述べ立ててあつたが、ここのは、わづかに六句、しかも、それで景勝を盡して居るのは、まことに簡切の極で、前詩と併觀して、各その妙を味ふべく、これは、もとより大家の手段で、尋常庸流の庶幾すべきところではない。桂臨川の評に「太白天才飄逸、長律法度整嚴と雖も、しかも清骨泥びず」とある。

送族弟凝之滁求婚崔氏

族弟凝之滁に之きて婚を崔氏に求むるを送る

與爾情不淺。忘筌已得魚。爾と情淺からず、筌を忘れて、すでに魚を得たり。

玉臺挂寶鏡。持此意何如。玉臺、寶鏡を挂く、此を持して意何如。

坦腹東牀下。由來志氣疎。坦腹、東牀の下、由來、志氣疎なり。

遙知向前路。擲果定盈車。遙に知る、向前の路、果を擲つて、定めて、車に盈たむ。

【字解】【一】忘筌 莊子に「筌は魚に在る所以、魚を得て筌を忘る。蹄は兔に在る所以、兔を得て蹄を忘る。言ふは、意に在る所以、意を得て言を忘る、吾、安んそ夫の忘言の人を得て之と言はむや」とあつて、陸徳明の註に「筌、香草なり、以て魚に餌すべし。或は云ふ、柴を水中に積み、魚をして依つて食はしむ。一に云ふ魚筍なり」とある。

【二】玉臺 世説に「溫公、婦を喪ふ。從姑劉氏の家、亂に值うて離散す、唯だ一女あり、甚だ姿慧あり、姑、以て公に屬して婚を覓む。公、密に自ら婚するの意あり、答へて曰く、佳婿得難し、但だ嶠の比の如き何と云ふと。姑、これを諾す。後、公、姑に報じて曰く、已に婚を得る處を覓めたりと。因つて、玉鏡臺一枚を下す、姑、大に喜ぶ。すでに、婚して、禮を交ふるや、女、手を以て、紗扇を披き、掌を拊つて笑つて曰く、

送族弟凝之滁求婚崔氏

我、もとより是れ老奴の玉鏡臺なるを疑ふ、と。これ、公が劉越石の長史となり、北、劉聰を征して得るところ」とある。【三】坦腹、東牀。王羲之の故事、前に見ゆ。【四】擲果。世説註に「語林に曰く、潘安仁、至つて美、行く毎に、老嫗、果を以て之に擲ち、車に滿つ」とある。

【題義】この詩は、從弟の李凝といふものが、崔氏と結婚する爲に、滁州に之のを送つたので、唐時の滁州は、淮南道に屬して居た。

【詩意】汝も亦た生來情の深い者である。そこで、今度は、旅行の爲の旅行ではなく、全く婚娶の爲に出かけるので、魚を得れば、もとより筈を忘れても善い。むかし、温嶠は、玉鏡臺一枚を以て、望の通り、從姑の女を娶つたといふが、汝も亦た玉臺に寶鏡を掛け、態態それを持つて往つて、どうしやうと思つて居るのか。それから、王羲之は、坦腹して、東牀の下に臥し、志氣疎放なる處から、太尉郗鑒に見立てられて、その女を娶つたといふが、汝の人物を以てすれば、先方でも、屹度これを鑒識して、容易に話が運ぶであらう。但し、これより往く先方、かの潘岳の如く、老婆までが、その容貌の美なるに看はれて、果を擲つて車に盈つることもあらうが、そんな事には、頓著せず、早く、彼の地に往くが善からう。

【餘論】起二句は、この行、婚娶を主とすることを暗寫し、三四の二句は、温嶠の故事で、此方より意あることを言ひ、五六の二句は、王羲之の故事で、先方より話を進ませるといふことを言ひ、表裏相得て、この行の目的が容易に遂げられるといふ、極めて御目出たい結構である。七八二句は、聊か諛意を帯びて、その餘波としたのである。大體、あつさりして居る割合に、故事の運旋が面白く、一寸氣が利いた作である。

送友人遊梅湖

友人の梅湖に遊ぶを送る

送君遊梅湖。應見梅花發。君が梅湖に遊ぶを送る。應に梅花の發くを見るなるべし。
有使寄我來。無令紅芳歇。使あり、我に寄せて來る、紅芳をして歇ましむる無かれ。
暫行新林浦。定醉金陵月。暫く行く新林浦、定めて酔はむ金陵の月。
莫惜一雁書。音塵坐胡越。一雁の書を惜んで、音塵、胡越に坐せしむる莫れ。

【字解】【一】有使寄我來。太平御覽に「荊州記に曰く、陸凱、范曄と友とし善し、江南より梅花一枝を寄せ、長安に詣らしめて曄に與へ、并せて詩を贈つて曰く、折梅逢驛使、寄與隴頭人、江南無所有、聊贈一枝春」とある。【三】新林浦。胡三省の通鑑註に「新林浦は、今の建康城を去る二十里、西、白鷺洲に値る」とある。【四】胡越。胡は北に在り、越は南に在り、以て間隔して相聞せざるの意に喩ふ。

【題義】王琦の解に「初學記、始興に梅湖あり。北堂書鈔に、地理志に云ふ、梅湖は、むかし梅筏あり

り、この湖に沈み、時あつて浮び出で、春に至れば、花を開いて滿湖に流ると、詩内、新林浦、金陵月の句を玩べば、この地は、當に、金陵と相近かるべし」とあり。この詩は、友人某の梅湖に遊ぶを送つて作つたのである。

【詩意】君は、これから梅湖へ行くさうで、ここに其行を送るのであるが、やがて、彼地に著したならば、處の名にし負ふ梅花の開くを見るであらう。その時は、使に託して、われに一枝を贈らるべく、愚圖愚圖して居て、折角の紅芳を散らして仕舞つてはならぬ。かくて、暫らく新林浦を過ぎ、定めて、金陵の月に酔ふであらうが、その時も、亦た雁に託する一封の書を惜んで、われをして、音信絶ゆること、さながら胡越のやうだといふ様な想を爲さしめぬやうにして貰ひたい。

【餘論】前段、梅湖に至るときは、一枝を寄せて紅芳をして歇ましむる無かれといふ。後段、金陵に至りては、一雁の書を惜んで、胡越の想を爲さしむる勿れといふので、連續して類似せる二つの事を聯結して、一首に敲き上げたのである。

送崔十二遊天竺寺

崔十二の天竺寺に遊ぶを送る

還聞天竺寺。夢想懷東越。

還た聞く天竺寺、夢想、東越を懷ふ。

每年海樹霜。桂子落秋月。

毎年、海樹の霜、桂子、秋月に落つ。

送君遊此地。已屬流芳歇。

君が此地に遊ぶを送る、すでに流芳の歌むに屬す。

待我來歲行。相隨浮溟渤。

待て我が來歲行き、相隨つて、溟渤に浮ぶを。

【字解】(一) 天竺寺 題義の條に見ゆ。(二) 東越 杭州は春秋の時、越に屬し、そして、東方に當るが故に東越といつたので、

史漢に東甌を稱して東越といへるとは、異なつて居るから、混同してはならぬ。(三) 桂子落秋月 咸淳臨安志に「舊俗、傳ふるところ、墜桂子、唯だ天竺素より之あり、唐の天寶中、寺前の一子、樹を成す、今月桂峰あり。刺史白居易の詩に云ふ、宿因二月桂、落、醉爲海榴開、註に云ふ、天竺、かつて、月中に桂子あつて落つ、と。又東城桂の詩に云ふ、子墮本從天竺寺、根盤今在闔閭城、註に云ふ、舊説、杭州天竺寺、每歲秋中月桂子あつて墜つと。又刺史盧公輔の詩に云ふ、遠客偏求月桂子、老僧不説石蓮花」とある。

【題義】咸淳臨安志に「天竺寺は、餘杭の勝利なり、飛來峰は武林の奇巖なり。晉時、梵僧慧理、この山を指し、乃ち靈鷲の一小嶺、知らず、何の年か飛び來つて、此に至るといひ、錫を掛け、院を置き、初め翻經といふ。隋の開皇中、法師眞觀、これを廣め、改めて天竺寺となす」とある。王琦の説に「按ずるに、杭州天竺寺に三あり、上天竺寺は、石晉の天福間より創し、道翊禪師、異木を得、刻して以て大士像と爲し、吳越の忠懿王、その地に即き、佛廬を創して之を奉じ、天竺觀音看經院と號するもの、是れなり。中天竺寺は、宋の太平興國元年より創し、吳越王、寶掌禪師の道場舊址に即いて改建し、崇壽院と號するもの、是れなり。下天竺寺は、隋の開皇中より創し、眞觀法師、慧理、翻經院に即いて改建し、南天竺寺と號するもの、是れなり。上中二寺は、皆唐以後建つるところ、その始、

亦また天竺寺てんぢくじの名ななし、唐たうの天竺寺てんぢくじは、乃すなはち今いまの下天竺かてんぢくなり」とある。この詩は、崔十二さいじふにの天竺寺てんぢくじに遊あそぶを送おくつて作つくつたのである。

【詩意】又またしても、天竺寺てんぢくじといふ名なを聞きけば、夢寐むびの間みだにも東越とうえつの地ちを懐おもふので、その地ちは、幽邃いゆうすいを極きまめて、まことに佛ぶつ寺じたるにふさはしい。その寺てらに於おては、毎年まいねん、海邊かいへんの木きに霜しもの降ふる頃ころ、桂かつらの實みが月つきの中なかから降ふるといふことである。唯ただ君きみが此地このちに遊あそぶのには、稍やや時節じせつが悪わるく、流芳りうほうすでに凋しぼみ、秋あきも末すえに成なつて、格別かくべつの風景ふうけいもないと思おもはれるのが遺憾いかんである。しかし、予よは、來年らいねん、その地ちに往いつて、君きみとともに、大海たいかいに乘のり出だす豫定よていであるから、君きみも、其積そのつりて、しばらく逗留たうりうして待つて居かて貰もらひたい。

【餘論】この詩は、淺薄せんぱくではあるが、一氣呵成いきかせいに、其胸臆そのきょうおくを抒のべた處ところに、作者さくしやの本色ほんしよくが瞥見べつけんされる。

送楊山人歸天台

楊山人やうざんじんの天台てんたいに歸かへるを送おくる

客有思天台かくてんたい東行路超忽とうかうみちうこつ

客かくに天台てんたいを思おもふあり、東行とうかう、路超忽みちうこつ

濤落浙江秋たうらくせいかう沙明浦陽月さめいほやうつき

濤たうは落おつ浙江せつかうの秋あき、沙さは明あかに浦陽ほやうの月つき

今遊方厭楚こんいうまさそ昨夢先歸越さくむまづえつ

今遊こんいう、方まさに楚そを厭いとひ、昨夢さくむ、先まづ越えつに歸かへる。

且盡秉燭かづへいしよく歡くわん無辭凌晨發じするな無かれ凌晨に發するを

且かつ秉燭へいしよくの歡くわんを盡つくす、辭じする無なかれ凌晨りやうしんに發はつするを。

我家小阮賢わがいえせうげん剖竹赤城邊たけをさきせきじやうほとり

我わが家いえ、小阮せうげんの賢けん、竹たけを剖さき、赤城せきじやうの邊ほとり

詩人多見重しじんおほ官燭未曾然くわんしよくまかつ

詩人しじん多おほく重おもんぜらる。官燭くわんしよく未まだ曾かつて然もやさず。

興引登山展きようひきとせん情催泛海船じやうはんかいふね

興きようは登山とせんの展げんを引ひき、情じやうは泛海はんかいの船ふねを催もよほす。

石橋如可度せききやう攜手弄雲煙せききやうもしわたるべくんば、手を攜へて、雲煙を弄せよ

石橋せききやうもし度わたるべくんば、手てを攜たづへて、雲煙うんえんを弄ろうせよ。

【字解】一 趙忽 遠き貌。二 浙江 元和郡縣志に「浙江は、杭州錢塘縣の南十二里に在り。莊子に浙河といふ、蓋し、その曲折に取つて名と爲す。江濤、毎日、晝夜再び上り、常に月の十日、二十五日を以て最小とし、月の三日、十八日を最大とす。小なれば、水、漸く漲ること、數尺に過ぎず。大なれば、濤湧いて、高さ數丈に至る。毎年八月十八日、數百里の士女、ともに舟人漁子の濤に浜り浪に觸るるを見る、これを弄濤といふ」とある。三 浦陽 會稽志に「浦陽江は、源、婺州の浦陽に出で、北流一百二十里、諸暨縣溪に入り、又東北流し、峽山より直に臨浦灣に入り、以て海に至る、俗、小江と名づけ、一名錢清江」とある。四 秉燭 古詩十九首に晝短苦夜長、何不秉燭遊」とある。五 小阮 阮籍の姪阮咸、後人仍つて姪を小阮といふ。王琦の説に「文獻通考、唐の李嘉祐、別名從一、趙州の人、天寶七年の進士、祕書正字袁台二州刺史となる、善く詩を爲り、綺靡婉麗、齊梁の風あり、時に以て均何遜に比すと云ふ。唐詩記事、李嘉祐は、上元中、かつて台州刺史となり、大曆の間、袁州に刺とし、嚴維、劉長卿、冷朝陽と友とし善し。嘉祐、從叔陽冰を送り、從弟紆及び姪端に寄するの詩あり、蓋し三子の族なり」とある。すると、この小阮は李嘉祐であらう。六 剖竹 剖符を裂いて刺史となること。七 赤城 前に見ゆ。八 官燭 官より給せらるる蠟燭。九 登山展 謝靈運の用ひたもので、前に見ゆ。一〇 泛海 晉書に「謝安、かつて孫綽等と海に泛ぶ。風起り、浪湧き、諸人竝に懼る、安、吟嘯自如たり、舟人、安を以て悦ぶとなし、猶ほ去つて止まず、風、轉た急なり。安、徐に曰く、かくの如きは、將に何にか歸らむとすと。」

舟人、言を承けて、即ち回る、衆、その雅量に服す」とある。「二」石橋、法苑珠林に「天台、石橋ありて、澗に跨ると雖も、しかも横石人を斷ち、且つ莓苔青滑、終古より以來、至るを得るものなし」とある。

【題義】この詩は、楊山人の天台に歸るを送つたのである。楊は、如何なる人か分らぬが、山人といふ上は、終に仕官せず、山中に隱居して居た高節の士であらう。

【詩意】楊山人は、今や故郷の天台を思ひ出で、一刻も猶豫せず。東行して遠路をたどり、愈よ其地に歸るとのことであるが、その途すがら、浙江、秋、正に關にして、觀濤の壯觀もあらうし、又浦陽浦口、沙白き處に月が映じて、清絶なる眺もあらう。君は、今まで、この楚國に遊んで居たが、あまり久しきに互つた爲に、自然あきが來て、前夜の夢には、その故國なる越に歸り、さめての後に、俄に思ひ定めて、今次歸國の旅を爲すものと見えた。しかし、今夜だけは、せめて燭を秉つて、十分に歡を盡し、あしたの朝は、すこし眠いかも知れぬが、凌晨の頃に早く出立するが善からう。わが姪は、恰も其地に太守となつて、赤城山の邊に居るが、性來、詩を能くするを以て、人に重んぜられ、又清廉以て性と爲し、決して、官物を濫費することなどは無く、まことに、天晴の人物。その上、風流の心がけもあつて、興至れば、古しへの謝靈運を學んで、登山の屐を著け、逸情に催されては、海上に舟を泛べて、波などは、少しも恐れない。かういふ人物であるから、君も、交際されたら善いので、音に聞く天台の石橋が、もし渡れるものならば、手を攜へて、これを渡り、心しづかに、溪山の

雲煙を弄して、物外の樂を縦にしたら善からう。

【餘論】前半は送別の本意、後半は小姪を紹介したので、相得て、自然の好結構を爲して居る。

送温處士歸黄山白鵝峰舊居 温處士の黄山白鵝峰の舊居に歸るを送る

黄山四千仞、三十二蓮峰。 黄山四千仞、三十二の蓮峰。

丹崖夾石柱、菡萏金芙蓉。 丹崖、石柱を夾む、菡萏、金芙蓉。

伊昔昇絕頂、下窺天目松。 伊れ昔絶頂に昇り、下、天目の松を窺ふ。

仙人鍊玉處、羽化留餘蹤。 仙人玉を鍊るの處、羽化、餘蹤を留む。

亦聞温伯雪、獨往今相逢。 亦た聞く温伯雪、獨往今相逢ふ。

採秀辭五嶽、攀巖歷萬重。 秀を採つて五嶽を辭し、巖を攀ちて萬重を歷たり。

歸休白鵝嶺、渴飲丹砂井。 歸休す白鵝嶺、渴しては飲む丹砂井。

鳳吹我時來、雲車爾當整。 鳳吹、我、時に來る。雲車、爾、當に整ふべし。

去去陵陽東、行行芳桂叢。 去去陵陽の東、行行芳桂の叢。

送 送温處士歸黄山白鵝峰舊居

廻溪十六度。碧嶂盡晴空。

溪を廻ること十六度、碧嶂盡く晴空。

他日還相訪。乘橋躡彩虹。

他日、還た相訪はば、橋に乗じて、彩虹を躡まむ。

【字解】

【一】四千仞、三十二峰。題義の條に見ゆ。【二】菌菴。説文に「未だ發かざるを菌菴となし、すでに發くを芙蓉と名づる」とある。【三】天目。太平寰宇記に「杭州於潛縣に天目山あり、上に兩湖あり、左右の目の若し。故に天目と名づくるなり。山極めて高峻、上に美石泉水名茶多し」とある。【四】鍊玉處。山志に「鍊丹峰、高さ八百七十仞、相傳ふ。浮邱公、丹を峰頂に鍊り、八甲子を経て、丹はじめて成る。黄帝、七粒を服し、雲煙を藉らず、空に昇つて游戲す」とある。【五】羽化。仙人の形を解いて去るをいふ。【六】溫伯雪。莊子に「溫伯雪、齊に適き、反つて魯に舍る。仲尼、これを見れども言はず。子路曰く、吾子、溫伯雪子を見むと欲すること久し、これを見れども言はざるは何ぞや。仲尼曰く、夫の人の若きものは、目撃して道存す、亦た以て聲を容るべからず」とある。王琦は「太白、その名を借り、以て溫處士に喩ふ、謂はゆる河東郭有道、吾友揚子雲、洛陽蘇季子、笑對劉公榮の如きの類、集中甚だ多し、皆古人の名を借り、以て今人を謂ふ」とある。【七】探秀。秀は芝草。【八】白鵝嶺。題義の下に見ゆ。【九】丹砂井。江南通志に「黃山の硃砂泉、硃砂峰より來り、巖に依つて二小池に連る、上池は瑩澈、廣さ七尺ばかり、深さ之に半す、豪髮墜すべし。泉、石底より出で、壘壘貫珠の如くして絶えず、氣鬱醇、湯の若く、これを酌めば甘芳、蓋し他の硫黃泉の比に非ざるなり。浴者、折旋ち流出し、纖塵留めず、人をして、心境清廓、氣爽に體舒びしむ。相傳ふ、沈疴の者、澡雪すれば立どころに差ゆ」とある。【一〇】風吹。笙の聲をいふ。【一一】雲車。水經註に「中山の衛叔卿、華山の中に居り、常に雲車に乗じ、白鹿に駕して、漢の武帝に見ゆ」とある。【一二】陵陽。元和郡縣志に「陵陽山は、宣州涇縣の西南百三十里に在り、陵陽子明、仙を得る處」とある。【一三】廻溪。曲澗に同じ。【一四】乘橋。山志に「天橋は鍊丹臺に在り、一名仙人橋、黃山の最險たり。兩峰絶ゆる處、各峭石を出し、彼此相抵り、筍の接するが若きあり、接して合はず、纒くに似て斷ゆるが若く、登るもの、嘆じて奇絶と爲さざるなし」とある。王琦は「圖經に載するが若きは、唐の開元中、鍊丹峰側に見はる。長さ三十餘丈と。近代謂ふ、蓮花峰の西南に見はると。又謂ふ、藥を採る人あり、橋下に宿し、乘躡すべきものと爲す、又一説なり」とある。

橋上笙歌の聲を聞き、天明、橋を覓むれども見えず。皆虛誕信ならず、石橋、固より眞境、幻境に非ざるなり。方拱乾の遊黃山記に、獅子峰を過ぎ、清涼臺に登り、天橋を躡る、長虹の如く、巖の上に互る、下りて、親ら橋側に至れば、三石合成、兩石、橋柱の如く、一石これを覆ひ、柱下著くるところなく、繩を以て度るべし、上脊、五寸に盈たず、下大に開しく、都城圍の如く、俯して鳴絃泉を視る、恰も之を覆ふ、こを去る四十里なるを知らざるなりと。乘橋躡彩虹は、蓋し天橋彩虹の如きを指すのみ。又武夷山記に、武夷君、八月十五日に於て、大に村人を武夷山上に會し、幔亭を置き、虹橋に化し、以て山下に通すと。これ彩虹を以て、橋の以て乘躡すべきものと爲す、又一説なり」とある。

【題義】

方輿勝覽に「黃山、舊名は黟山、徽州歙縣の西北一百二十八里に在り、高さ一千一百八十仞」とあり、郡志に「その山、天を摩し日を憂するの高さあり、宣歙池饒江等の州の山、竝に是れ此山の支脈。諸峰削成するが如きあり、煙嵐際なく、雷雨下に在り。その霞城洞室巖竇瀑泉は、峰としてあらざるなく、信に靈仙の窟宅。山勢西北中坳、これを望めば、太華山に類す。峰三十六あり、その水源亦た三十六、溪二十四、洞十有二、巖八、水流れ下り、揚の水を合せて浙江の源となる。第四峰に泉あり、沸いて湯の如く、常に硃砂を湧かす。世傳ふ、黄帝、かつて駕を命じ、容成子浮邱と同じく遊び、丹を此に合す、その後、又仙人曹元の屬あり」とある。それから、王琦の説に「黃山圖を按ずるに、白鵝峰は石門峰烏泥嶺の間に在り。志に云ふ、吟嘯橋は、白鵝嶺下に在り、名最も著はると。錢牧齋曰く、李白に送溫處士歸黃山白鵝峰の詩あり、今白鵝峰は三十六峰の列に在らず、蓋し三十六峰は、皆高さ七百仞以上、その外、諸峰高さ二三百仞なるものは與からず、白鵝峰も亦た諸峰の

一なり」とある。それから、此詩の起首に黄山四千仞、三十二蓮峰とあるが、それに就いても、王琦は説を爲し「黄山志、江以南の諸山、黄山を最とす、その高さ四千仞と。按ずるに、黄山の諸峰、最も高きもの、志に九百仞と稱す、四千仞とは、大抵山麓の平地よりして、之を准擬す。諸書皆言ふ、黄山の峰三十有六と。而して、白の詩、只だ三十有二といふ。蓋し四峰は唐以前未だ名あらざるなり」とある。この詩は、温處士が黄山なる白鵝峰の舊居に歸るのを送つたのである。但し、處士の閱歷人物等は、例の如く、一切分らぬ。

【詩意】黄山は、南方の名山であつて、平地より高きこと四千仞、そして、その山麓中には、蓮花の形せる峰が、三十二の多きを算する位。赤色の斷崖は、石柱を夾み、そして、蓮の蒼の簇る間から、金色の芙蓉が咲き出でた様に見える。予も、かつて其絶頂に登つたが、はるか下の方に天目山頂の松が、ちらほら見えた。そして、浮邱公が仙丹を鍊つた處は、儼然として存し、その羽化昇天せし名残を留め、併せて、懷古の想を生せしめる。温處士は、獨りて其處へ往かうといふので、予は、ここで、其人に遇つた。聞けば、五嶽に分け入つて、芝草を探り、巖を攀ちて萬重の險を歴めつたといふが、今度は、白鵝峰下の舊居に歸休することと、渴しては、硃砂を吹き出す彼の靈泉を飲み、心のどかに、仙術の修行をすることであらう。予は、笙を吹いて鳳吹を學び、時時その地に往くこともあらうから、汝は、雲車を用意して置くが善い。試に、古しへの子明が仙去した處と稱する陵陽山に入

り、行く行く芳桂の叢をなせる處を過ぎ行くと、一道の溪流、しきりに屈曲し、これを徒渉すること十六回、仰ぎ見れば、碧嶂は、簇簇然として、晴空に羅列し、まことに奇絶壯絶の風景を見ることが出来る。そこで、他日、君を訪うた時には、これ等の處を行き過ぎて、名だたる天橋に上り、脚下に彩虹を躍んで浩嘯しやう。どうか、その積りで、待つて居て呉れろ。

【餘論】起四句は黄山の概景、伊昔昇絶頂の四句は、李白の曾遊、亦聞温伯雪の六句は、温處士の歸休、鳳吹我時來の八句は、他日の相訪を約したので、結構緊健にして、よく纏まつて居る。かういふ題目は、李白の得意とするところで、不用意の間に於ても、筆致の雋絶を得、自然仙氣を帯びて居る。

送方士趙叟之東平

方士趙叟の東平に之くを送る

長桑晚洞視。五藏無全牛。

長桑晚に洞視、五藏に全牛なし。

趙叟得祕訣。還從方士遊。

趙叟、祕訣を得、還た方士に従つて遊ぶ。

西過獲麟臺。爲我弔孔丘。

西、獲麟臺を過ぎなば、我が爲に孔丘を弔へ。

念別復懷古。潸然空淚流。

別を念ひ復た古しへを懷へば、潸然として空しく涙流る。

【字解】長桑 隱者で扁鵲に方を授けた人。史記に「扁鵲、少時、人の舎長たり。舎客長桑君過ぐ、扁鵲、ひとり之を奇と

送 送方士趙叟之東平

し、常に謹んで之を遇す。長桑君、亦た扁鵲の常人に非ざるを知るなり。出入十餘年、乃ち扁鵲を呼んで、私に坐し、間に與に語つて曰く、われに禁方あり、年老いて、公に傳與せむと欲す、公泄らす毋れ。扁鵲曰く、敬んで諾す、と。乃ち懷中の藥を出し、扁鵲に與へて飲ましむ、是れ上池の水を以てす、三十日、當に物を知るべし、と。乃ち悉くその禁方の書を取つて、盡く扁鵲に與へ、忽然見えず、殆んど人に非ざるなり。扁鵲、その言を以て、藥を飲み、三十日、垣を視るや、一方人を見、これを以て病を視、盡く五臟癥結を見、特に診脈を以て名と爲すのみ」とある。【二】五藏 心肝脾肺腎を併稱す。【三】全牛 莊子に「庖丁曰く、はじめ、臣、牛を解くの時、見るところ、牛に非ざるものなし、三年の後、未だ嘗て全牛を見ざるなり、今の時に方り、臣、神を以て遇うて、目を以て視す」とある。【四】獲麟臺 左傳に「西、大野に狩す、叔孫氏の車子鉏商、麟を得たり、以て不祥となし、以て虞人に賜ふ。仲尼、これを觀て曰く、麟なり」とあり、史記正義に「括地志に云ふ、獲麟堆は、鄆州鉅野縣東十二里に在り。國都城記に云ふ、鉅野故城の東十里、澤中に土臺あり、廣輪四五十步、俗に獲麟堆といふ、魯城を去ること三百餘里ばかり」とあり、一統志に「獲麟臺は、鉅野縣東南五十里に在り、即ち西狩獲麟の所、後人、ここに於て臺を築く」とある。

【題義】方士は方術の人、史記の封禪書に「燕齊海上の方士、その術を傳ふ」とある。すると、神仙の術を修むるものを指したのが、本義であるが、後には、方技、即ち醫術を修むる人をも言つたのである。勿論、醫術と神仙鍊丹の法とは、當初、緊接なる關係があつたのである。唐書地理志に「河南道に鄆州東平郡あり」と記してある。この詩は、醫家の趙叟といふものが東平に往くのを送つたので、叟の名字經歷等は、例の如く、一切分らない。

【詩意】長桑といふ人は、扁鵲の先生で、醫術の開祖と稱すべき人、その人は、老年になると、愈よ其技に達し、すべて病源を洞視し、人の五臟でも、すつかり個個に見分けることが丁度、庖丁が三年

の後、未だ嘗て全牛を見ざるなりといつた様である。今趙叟といふ人は、長桑の秘訣を悉く傳へた上に、これから、方士に従つて、愈よ其技を研磨せむが爲に、東平の方へ往くことである。かくて、西の方、獲麟臺を過ぎたならば、そこは、魯の哀公の時、麟を獲た處で、その爲に、孔子が感憤して春秋を作つたといふ位であるから、わが爲に、是非、孔子を弔つて呉れる。ここ祖席の筵上、別を念ひ、兼ねて古しへの事を思ふと、潸然として、涙が空しく流れる。

【餘論】前四句は、方士に切實であるが、後四句は、誰にでも流用が出来るので、さばかり、面白くもない。全體に於て、あまりの氣乗りがせぬやうで、いはば、通り一べんの挨拶に過ぎぬものであらう。

送韓準・裴政・孔巢父還山。

韓準・裴政・孔巢父の山に還るを送る

獵客張兔罝。不能挂龍虎。

所以青雲人。高歌在巖戶。

韓生信英彥。裴子含清真。

孔侯復秀出。俱與雲霞親。

峻節凌遠松。同衾臥盤石。

峻節、遠松を凌ぎ、同衾、盤石に臥す。

斧冰嗽寒泉。三子同二屐。

氷に斧して寒泉に嗽ぎ、三子、二屐を同じくす。

時時或乘興。往往雲無心。

時時或は興に乗じ、往往、雲に心なし。

出山揖牧伯。長嘯輕衣簪。

山を出でて、牧伯に揖し、長嘯、衣簪を輕んず。

昨宵夢裏還。云弄竹溪月。

昨宵、夢裏に還り、云ふ竹溪の月を弄すと。

今晨魯東門。帳飲與君別。

今晨魯の東門、帳飲君と別る。

雪崖滑去馬。蘿徑迷歸人。

雪崖、去馬滑に、蘿徑、歸人を迷はしむ。

相思若煙草。歷亂無冬春。

相思、煙草の若く、歷亂、冬春なし。

【字解】

【一】兎置 詩の國風に見ゆ。兎網。【二】盤 文選李善註に「盤類に云ふ、盤は大石なり」とある。【三】斧氷 魏武帝の苦寒行に擔囊行取薪、斧氷持作糜とあるに本づき、氷を斧で打破ること。【四】牧伯 尚書正義に「曲禮に曰く、九州の長を牧といふ。王制に曰く、千里の外、方伯を設く、八州八伯と。然らば、牧伯は一で、伯は一州の長といふこと、牧は下民を牧養するといふ義」鄭玄は「殷の州牧を伯といひ、虞夏及び周には牧といふ」とあつて、後人が太守を稱して牧伯といふは、これに本づく。【五】帳飲 曠地に帳を張つて飲むこと。【六】雪崖 雪の降り積れる崖壁。【七】歷亂 整はざる貌。

【題義】

舊唐書に「孔巢父は、冀州の人、字は羽翁、早く文史を勤め、少時、韓準・裴政・李白・張叔明・陶沔とともに徂徠山に隠れ、時に竹溪の六逸と號す。永王璘の兵を江淮に起すや、その賢を聞き、従事を以て之を辟す。巢父、その必ず敗るるを知り、身を側て潜に遁る、これに由つて、名を知らる。徳宗の奉天に幸するや、給事中河中陝華等州招討使に遷り、尋いで、御史大夫を兼ね、魏博宣慰使に充てられ、害に遭ふ」とある。して見ると、韓準・裴政・孔巢父の三人は、李白の遊び仲間であつたのが、今次、三人打揃つて故國に歸山するに就いて、その行を送るが爲に、特に此詩を作つたのである。

【詩意】

獵人が兎網を張ると、無論、兎は取れるが、龍虎を其網に搦め取ることは出来ない。龍虎はもとより、兎などの居る様な處には住んで居らぬもので、それにつけても、住む處を擇ぶといふことは、第一に肝要である。されば、青雲の志があつて、神仙の道を學ばむと欲するものは、高歌して巖戸の間に隠るるを例として居る。ここに、我が友の韓準は、信に英雋の才士であるし、裴政は性情清真、孔巢父に至りては、更に傑出し、ともに、雲霞と親んで居る。三人の峻節は、遠山の松をも凌ぐべく、そして、交際は、極めて親密であつて、衾を同じうして大石の上に臥し、斧で氷を敲き破つて、寒泉に嗽ぎ、又三人で二人分の木屐を共用して居る位。時としては、興に乗じて、その住居から出て來ることもあるが、さながら、雲の岫を出づると同じく、もとより、無心である。それで、山を出ると、州牧に長揖し、しかも、浩嘯して、衣簪を輕んじ、人間の爵祿などは、何とも思はない。予は、

昨夜、夢中に於て、彼等の舊居に歸るに遇つたが、ともに竹溪の月を弄んだとのことであつた。聞けば、各、その故國に歸山することと、今朝、魯の東門外に於て、祖道の宴を設け、愈よ君と別れることに成つた。今しも、寒い盛りで、雪を帯びたる崖路は、馬も滑り易く、甚だ危険であるから、よくよく注意するが善いし、舊山も、久しく荒蕪に任せてあつたから、定めて、徑路には蔦蘿が生ひ茂つて、歸人を迷はすことであらう。別後、諸君に對する相思の情は、さながら煙れる草の如く、冬といはず、春といはず、四時ともに、離離として亂れて居る。

【餘論】起首より長嘯輕衣簪に至るまでは、三人の人物交誼を合敘したので、簡略ではあるが、略ぼ之を彷彿せしめる。次に、昨宵夢裏還以下八句が、送別の本意である。嚴滄浪は「相思、狀を爲し難し、これ獨り寫し得て極めて眞、極めて現、李詩結語、かくの如きは亦た甚だ少し」といつて、その收束の餘情あるを激賞して居る。

送楊少府赴選

楊少府の選に赴くを送る

大國置衡鏡。準平天地心。
大國に衡鏡を置き、天地の心を準平す。
羣賢無邪人。朗鑒窮情深。
羣賢に邪人なく、朗鑒、情深を窮む。

吾君詠南風。袞冕彈鳴琴。
吾が君、南風を詠じ、袞冕、鳴琴を彈す。
時泰多美士。京國會纓簪。
時泰にして美士多く、京國、纓簪を會す。
山苗落磻底。幽松出高岑。
山苗、磻底に落ち、幽松、高岑に出づ。
夫子有盛才。主司得球琳。
夫子、盛才あり、主司、球琳を得たり。
流水非鄭曲。前行遇知音。
流水、鄭曲に非ず、前行、知音に遇ふ。
衣工剪綺繡。一誤傷千金。
衣工、綺繡を剪り、一誤、千金を傷む。
何惜刀尺餘。不裁寒女衾。
何ぞ惜まむ刀尺の餘、寒女の衾を裁せず。
我非彈冠者。感別但開襟。
我は彈冠の者に非ず、別に感じて但だ襟を開く。
空谷無白駒。賢人豈悲吟。
空谷に白駒なし、賢人豈に悲吟せむや。
大道安棄物。時來或招尋。
大道、棄物を安んじ、時來つて或は招尋せる。
爾見山吏部。當應無陸沈。
爾見よ、山吏部、當に陸沈なかるべし。

【字解】【一】衡鏡。庾信の代人を致仕表に出擁三千旆、入參三衡鏡とあつて、人を選衡する時の評議。【二】朗鑒。陸機の詩に朗鑒豈遠假とあつて、朗は明、鑒は鏡、矢張明鏡の鏡、その鑒識の誤らざること。【三】詠南風。淮南子に「舜、天子となり、

五絃の琴を弾じ、南風の詩を歌うて、天下治まる」とある。【四】袞冕 儀禮に「天子は袞冕、斧依を負ふ」とあり、左傳に「袞冕蔽珽とあつて、杜預の註に「袞は畫衣なり、冕は冠なり」孔穎達の正義に「畫衣とは、龍を衣に畫くを謂ふなり」毛萇詩傳に「袞冕は君の上服なり」とある。【五】纓髻 公卿に同じ。【六】山苗落洞底 左思の詠史に「鬱鬱洞底松、離離山上苗とあつて、以て世胄、高位を躡み、英俊、下僚に沈むの意を興起す、そして、太白は之を反用して、以て才器に因つて、高下各、その宜しきを得せしむべきに喩へたのである。【七】球琳 淮南子に「西北方の美なるもの、崑崙の球琳琅玕あり」とあつて、高誘の註に「球琳琅玕は皆美玉なり」とある。【八】流水 呂氏春秋に「伯牙琴を鼓し、鍾子期、これを聴く。志、流水に在り。子期曰く、善いかな、琴を鼓する、湯湯乎として流水の若し」とある。【九】鄭曲 史記に「鄭衛の曲、動いて心淫」とある。【一〇】彈冠 漢書に「王吉、貢禹と友たり、世に稱す、王陽位に在れば、貢禹冠を彈すと。その取舍同じきを言ふなり」とある。【一一】白駒 毛萇の詩傳に「白駒は、大夫、宣王を刺るなり。宣王の末、賢を用ふる能はず、賢人、白駒に乗じて去るものあり。その末章に云ふ、皎皎白駒、在彼空谷、生芻一束、其人如玉、金玉爾音、而有遐心」とある。【一二】山濤 東部尚書となり、前後選舉、内外に周徧して、竝に其才を得たり。濤の奏するところ、人物を甄拔して、各題目と爲す、時に山公の啓事と稱す」とある。【一三】陸沈 莊子に「是れ陸沈する者なり」とあつて、郭象の註に「人中の隱者、水なくして沈むに譬ふるなり」とある。

【題義】この詩は、縣尉楊某が選に赴いて上京するのを送つたので、選とは、能く其職に任へて、政績彰著なる處から、これを選んで都に上せ、そして、他の官職に榮遷せしめることである。

【詩意】大國には銓衡の職があつて、偏頗なく、天地の心に準平せしむることを務め、すべて、その官に稱ふものは、どしどしと登庸する。かくて、羣賢の中には奸佞の小人なく、その鑑別も、清深を極め、決して、濁亂淺薄のものではない。方今の天子は、古しへの虞舜の如く、南風の詩を歌うて、

天下自ら治まり、畫衣冠冕を召して、鳴琴を聞いて居られる。かくて、時平かにして、美才の士多く、京國には、公卿を會して、さすがに、衣冠の府たるに負かない。もとより、山苗は落ちて洞底に在るべく、幽松は高岑の上に植ゑらるべきもので、才器に従つて、高下、その宜しきに稱ふべき筈である。楊君は、盛才あるが故に、上司は、これを選擧し、天晴の美玉に比して、珍惜して措かず。かの伯牙の彈じたる流水の曲は、鄭衛淫猥の音ではなく、子期に非ざれば、これを賞する人もないが、君は、幸に知音の人に遇つて、今次選に赴くので、まことに、御目出たいことである。かの仕立屋が錦繡綺羅を裁つときに、一たび誤つて裁ち損ひをすれば、千金を臺なしにするので、刀尺の餘の裁ち屑では、如何に本質が尊くても、寒女の夜具にさへ成らない。これにつけても、人材を選擧するといふのも、容易な事ではなく、又選に當つた以上は、愈よ勉めねばならない。われは、固より、功名富貴に意なく、知人が如何に立身した處で、冠を彈じて相慶するといふ様なことはないが、ここに別を爲すに際し、襟を開いて、心に思ふことを十分に述べるのである。今しも、野に遺賢なく、従つて、白駒で空谷に乗り込むやうな人を見ざれば、賢人も悲吟する必要がない。世間に棄てられた不遇の者も大道に安んじ、やがて、時が來れば、招尋される。君を登庸した主司は、さながら、古しへの山濤の如く、かういふ人が居れば、水なくして沈む様に、無理に隱匿するものも無い筈である。君の才幹を以て、この盛世に遇つたのであるから、今後愈よ務めねばなるまい。

【餘論】 大國置二衡鏡の四句は選舉の眞精神を述べ、吾君詠二南風の六句は刻下の治世、夫子有盛才の八句は、楊少府の赴選、我非二彈冠者は送別の本意である。

對雪奉餞任城六父秩滿歸京

雪に對し、任城の六父、秩滿ちて京に歸るを餞し奉る

龍虎謝鞭策。鶴鸞不司晨。龍虎、鞭策を謝し、鶴鸞は晨を司らず。

君看海上鶴。何似籠中鶉。君看よ海上の鶴、籠中の鶉に何似。

獨用天地心。浮雲乃吾身。獨り天地の心を用ふれば、浮雲乃ち吾が身。

雖將簪組狎。若與煙霞親。簪組を將て狎ると雖も、煙霞と親むが若し。

季父有英風。白眉超常倫。季父、英風あり、白眉、常倫に超ゆ。

一官即夢寐。脫屣歸西秦。一官、即ち夢寐、屣を脱して西秦に歸る。

寶公做華筵。墨客盡來臻。寶公、華筵做たり、墨客盡く來り臻る。

燕歌落胡雁。郢曲廻陽春。燕歌、胡雁を落し、郢曲、陽春を廻す。

征馬百度嘶。遊車動行塵。征馬百度嘶き、遊車、行塵を動かす。

躊躇未忍去。戀此四座人。躊躇して未だ去るに忍びず、この四座の人を戀ふ。

餞離駐高駕。惜別空慙慙。離を餞して、高駕を駐め、別を惜んで、空しく慙慙。

何時竹林下。更與步兵鄰。何時竹林の下、更に歩兵と鄰らむ。

【字解】 【一】 鶴鸞不司晨 抱朴子に「鶴は守を吠えず、鳳は晨を司らず」とある。 【二】 浮雲乃吾身 維摩詰經に「是れ、身、浮雲の如し、須臾變滅す」とある。 【三】 白眉 蜀志に「馬良、字は季常、兄弟五人、竝に才名あり、郷里、これが諺を爲して曰く、馬氏の五常、白眉最も良し」と。良の眉中に白毛あり、故に以て之を稱す」とある。 【四】 脫屣 魏志に「崔林、幽州刺史となる、曰く、刺史の此州を去るを視る、屣を脱するが如し、寧ろ當に相累はすべきか」とあつて、胡三省の解に「屣の跟を躡まざるを屣といふ、脱するの易きを言ふのみ」とある。 【五】 寶公 その人不詳。 【六】 做 開く。 【七】 燕歌 古樂府に燕歌行といふがあつて、李善の文選註に「歌録に曰く、燕は地名、猶ほ楚宛の類のごとしと。樂府古題要解、燕歌行、晉樂奏、魏の文帝、秋風蕭瑟天氣涼、別日何易會日難の二篇、時序遷換、しかも、行役歸らず、佳人怨曠、訴ふるところなきをいふなり」とある。 【八】 落胡雁 その聲の精妙、能く飛鳥をして、これを感じて、下集せしむるをいふ。 【九】 郢曲 客に郢中に歌ふものあり、その曲彌ま高く、その和彌ま寡し、すでに前に見ゆ。 【一〇】 廻陽春 その音の美、能く陽氣をして之に應じて潛動せしむるをいふ。 【一一】 征馬 江淹の別賦に「驅征馬而不顧、見行塵之時起」とある。 【一二】 何時竹林下 晉書に「阮咸、任達拘はらず、叔父籍に従つて竹林の遊を爲す」とある。ここでは阮籍を以て六父に、阮咸を以て自ら比したのである。

【題義】 鄭康成の毛詩箋に「餞は、行を送つて酒を飲むなり」とある。任城六父といふは、李白の叔父で、排行第六に當り、そして、任城の縣令であつた人と見える。秩滿は、任期の満つること。この詩は、雪に對して、任城縣令たりし叔父の某が任期満ちた爲に、上京するを送つたのである。

【詩意】龍虎は、もとより神靈あつて、馬の如く鞭策を受くべきものではなく、鸞鳳は雞の様に晨を司つて鳴くものではない。されば、海上の鶴は、もとより籠中の鶉と比すべきものでない。つまり、人にして高情あるものは、區區として、俸祿の爲に仕官して、窮屈な想を爲すべきものではない。われは獨り天地の成りに任せ、この身を視ること、浮雲の如く、たとひ、公卿輩と交際した處で、その本心は、煙霞と親み、出世間的願望を有して居る。わが叔父は、英風あつて、兄弟中、殊にすぐれたものとして知られ、久しく、牧民の官に居たが、さながら夢寐の如く、ここに任期が満ちたといふので、その職を去ること、屣を脱すると同じく、今次、愈よ、西、長安に歸られる。そこで、竇公といふ人が、爲に宴席を開かれ、風流の文人墨客どもは、盡く來會された。その席上、燕歌行を歌へば、その聲の精妙、胡雁を感じて、地に落ち來らしむべく、郢人の高調は、陽氣をして春に回さしむべく、愈よ以て座席の興を添へた。それから、愈よ出立せむとするに就いて、征馬は、百たびも嘶き、征車は、路上の塵を動かし、しきりに、催促する様な氣色であるが、君は、躊躇して、なほ去らず、この四座の人を戀うて、別るるに忍びないやうである。予は、君の行を餞して、ここに駕を駐め、別を惜んで、空しく、慇懃の情を盡した。予は、さながら、古しへの阮咸に比すべきもので、何の時か、竹林の下に至り、叔父の阮籍に従つて遊ぶことが出来るか、唯だ其日を待つのみである。

【餘論】龍虎謝鞭策の四句は高人の官累を受くべからざることを言ひ、獨用天地心の四句は自分の事、季父有英風の四句は六父の事、竇公徹華筵の四句は離筵の事、征馬百度嘶の四句は、六父の出立、餞離の四句は自己惜別の情を敘したので、竹林歩兵の一故事は、叔姪の關係に本づいたものであるから、この場合に極めて適切である。

魯郡堯祠送吳五之瑯琊

魯郡の堯祠にて吳五の瑯琊に之くを送る

堯没三千歲。青松古廟存。

堯没する三千歲、青松、古廟存す。

送行奠桂酒。拜舞清心魂。

行を送つて桂酒を奠し、舞を拜して心魂を清うす。

日色促歸人。連歌倒芳樽。

日色、歸人を促し、連歌、芳樽を倒す。

馬嘶俱醉起。分手更何言。

馬嘶いて、俱に醉起、手を分つ、更に何をか言はむ。

【字解】【一】奠桂酒 楚辭に奠桂酒兮椒漿とあつて、王逸註に「桂を切つて酒中に置くなり」とある。【二】心魂 江淹の詩、何用苦心魂に本づく。【三】芳樽 劉孝綽の芳樽散緒寒に本づく。【四】分手 謝瞻の分手東城關に本づく。

【題義】 通典に「魯郡は今の兗州、瑯琊郡は今の沂州」とあり、太平寰宇記に「堯祠は兗州瑕丘縣の東南七里に在り」とある。この詩は、魯郡の堯祠に於て、吳五といふ人の瑯琊に還るを送つたのであるが、吳五その人の事は、一切分らぬ。

【詩意】帝堯崩じて、すでに三千年、青松の間に古廟が儼然として存して居る。ここに、君の行を送る爲に、桂酒を薦め、次に、殿内に舞を奏するを見ると、肅穆莊重の容、まことに心魂を清うするばかりである。やがて、日色夕ならむとして、歸人を促すが如く、仍つて頻りに離歌を唱へて、芳樽を倒した。兎角する内に、馬が嘶いたから、ともに醉中より起ち、君は遽て馬に上り、愈よ手を分つに際しては、黯然として言葉なき有様である。

【餘論】嚴滄浪は、之を評して「別情抗壯、言なからむと欲するも、更に言を爲し難し」といつた。

魯郡堯祠送寶明府薄華還西京

魯郡の堯祠に寶明府薄華の西京に還るを送る

朝策犁眉驕

朝に犁眉の驕に策ち、

舉鞭力不堪

鞭を舉げて力堪へず。

強扶愁疾向何處

強ひて愁疾を扶けて、何の處にか向ふ。

角巾微服堯祠南

角巾微服、堯祠の南。

長楊掃地不見日

長楊、地を掃うて日を見ず。

【字解】【一】犁眉驕 十六國春秋に「姚襄、乘するところの駿馬を犁眉驕といふ、日に行くこと千里」とあり、説文に「驕は黃馬黑喙なり、鬣は黒なり」とあるから、犁眉驕といへば、黃馬にして黒眉なるもの、古しへ犁と驕と通用した。【二】角

石門噴作金沙潭

石門噴いて作る金沙の潭。

笑誇故人指絕境

笑つて誇る、故人の絶境を指すを、

山光水色青於藍

山光水色、藍よりも青し。

廟中往往來擊鼓

廟中、往往、來つて鼓を撃つ、

堯本無心爾何苦

堯、本と無心、爾、何ぞ苦む。

門前長跪雙石人

門前長跪す、雙石人、

有女如花日歌舞

女あり、花の如く、日に歌舞す。

銀鞍繡轂往復廻

銀鞍繡轂、往いて復た廻り、

簸林蹶石鳴風雷

林を簸ひ、石に蹶いて、風雷を鳴らす。

遠煙空翠時明滅

遠煙空翠、時に明滅、

白鷗歷亂長飛雪

白鷗歷亂、長く雪を飛ばす。

紅泥亭子赤欄干

紅泥の亭子赤欄干、

碧流環轉青錦湍

碧流環轉す青錦湍。

巾 胡三省の通鑑註に「幅巾は、横幅を以て之を爲す。角巾は巾の角なるもの、郭林宗、雨に遇うて、巾の一角整す。即ち角巾」とある。【三】

長楊掃地 梁の簡文帝の詩に長楊掃地桃花飛とある。【四】青於藍 荀子に「青は藍より出でて、藍より青し」とある。【五】銀鞍繡轂 王勃の詩に銀鞍繡轂繁華とある。

【六】簸林蹶石 西京賦に蕩三川瀆、簸三林薄とあつて、李周翰の註に「蕩簸は、搖動を謂ふ」とあり、張協の七命に簸林蹶石、扣拔幽叢とあつて、李善の註に「蹶は動搖の貌」とある。【七】綠珠潭水 洛陽伽藍記に「昭儀寺に池あり、京師の學徒、これを翟泉といふ、後、隱士趙逸云ふ、この地、是れ晉の侍中石崇の家池、池南に綠珠樓あり」と、ここに於

深沈百尺洞海底。深沈百尺、洞海の底、

那知不有蛟龍蟠。那んぞ知らむ、蛟龍の蟠るあらざるを。

君不見綠珠潭水。君見ずや、綠珠潭水、東海に流れ、

流東海

綠珠紅粉沈光彩。綠珠の紅粉、光彩を沈む。

綠珠樓下花滿園。綠珠樓下、花、園に滿つ、

今日曾無一枝在。今日曾て一枝の在るなし。

昨夜秋聲闐闐來。昨夜秋聲闐闐より來り、

洞庭木落騷人哀。洞庭木落ちて騷人哀む。

遂將三五少年輩。遂に三五少年輩と、

登高遠望形神開。登高遠望、形神開く。

生前一笑輕九鼎。生前一笑、九鼎を輕んじ、

魏武何悲銅雀臺。魏武、何ぞ悲む銅雀臺。

て、學徒、はじめて經過する者を悟り、綠珠の容を想見するなり」とあり、太平寰宇記に「洛陽縣石崇の宅に綠珠樓あり、今、これを狄泉といふ」とある。【八】秋聲闐闐來 孔穎達の春秋正義に「易緯通卦驗に云ふ、秋分に闐闐風至と、王叔齊の韻記に、闐闐風、一に曰く盲風、又曰く颼風、亦た曰く泰風、成天の闐闐門より起り、西方より來る」とある。【九】銅雀臺 魏志に「建安十五年冬、銅雀臺を作る、陸機の弔魏武帝文に、魏の武帝、遺令して曰く、吾が婕好妓人、皆銅雀臺に著き、臺の堂上に於て八尺の牀を施し、練帳を張り、朝晡に脯糲の屬を上り、月朝十五、輒ち帳に向つて伎を作し、汝等時時銅雀臺に登つて、わが西陵の墓田を望め」とある。【一〇】樂酣

我歌白雲倚牕牖。われ白雲を歌うて、牕牖に倚る、

爾聞其聲但揮手。爾、その聲を聞いて但た手を揮ふ。

長風吹月度海來。長風、月を吹いて、海を度つて來る。

遙勸僊人一杯酒。遙に僊人に勸む一杯の酒。

酒中樂酣宵向分。酒中樂酣にして、宵、分に向ふ、

舉觴酌堯堯可聞。觴を舉げて堯に酌す、堯聞くべし。

何不令臯繇擁篲。何ぞ臯繇をして篲を擁し、八極に横へ、

横八極

直上青天揮浮雲。直に青天に上つて浮雲を揮はしめざる。

高陽小飲眞瑣瑣。高陽の小飲、眞に瑣瑣、

山公酩酊何如我。山公酩酊、何ぞ我に如かむ。

竹林七子去道賒。竹林の七子、去道賒なり、

蘭亭雄筆安足誇。蘭亭の雄筆、安んぞ誇るに足らむ。

上林賦に於て是酒中樂酣とあつて、顔師古の註に「酒中とは、酒を飲んで中半なり。樂酣とは、樂を奏して洽れきなり」とある。【一】宵向分 夜半に垂んとする。【二】臯繇 即ち臯陶、字異なれども、音同じく、漢書人物表に本づく。【三】擁篲 漢書に「太公篲を擁す」とある、篲は、ははき。【四】八極 天のはて。【五】高陽 水經註に「襄陽侯習郁、范蠡の養魚法に依りて、大陂を作り、陂の長さ六十歩、廣さ四十歩、大池の水を宅北に返引し、小魚池を作る、池の長さ七十歩、廣さ十二歩、西、大道に枕み、東二邊、限るに高堤を以てし、楸竹夾植、蓮茨水を覆ふ、これ游宴の名處なり」とある。【六】山公 前文の續きに「山季倫の襄陽を鎮するや、毎に此池に臨み、未だ

堯祠笑殺五湖水。堯祠笑殺五湖水。

至今憔悴空荷花。今に至つて憔悴す空しく荷花。

爾向西秦我東越。爾は西秦に向ひ、我は東越、

暫向瀛洲訪金闕。暫く瀛洲に向つて金闕を訪ふ。

藍田太白若可期。藍田太白、もし期すべくんば、

爲余掃灑石上月。余が爲に掃灑せよ、石上の月。

の七賢と號した。【一八】蘭亭 何延之の蘭亭始末記に「蘭亭は、晉の右將軍會稽内史鄒郡の王羲之書するところの序なり。晉の穆帝永和九年暮春三月三日を以て、山陰に宣遊し、太原の孫統、孫綽、廣漢の王彬之、陳郡の謝安、高平の郗曇、太原の王蘊、釋支遁、并に其子凝之、徽之、操之等、四十有二人と祇禊の禮を山陰の蘭亭に修し、毫を揮うて序を製し、樂を興して書し、鸞蘭紙、鼠鬚筆を用ひ、造媚勁健、絶代更に無し」とある。【一九】五湖 太湖。【二〇】東越 會稽。【二一】瀛洲金闕 前に見ゆ。【二二】藍田太白 太平寰宇記に「藍田山は、藍田縣西三十里に在り、一名玉山、一名覆車山。郭緣生の述征記に云ふ、山形、覆車の象の如きなり、と。按ずるに、後魏風土記に云ふ、山嶺方二里、仙聖遊集の所、劉雄鳴、道を此に學ぶ、下に祠あり、甚だ嚴、瀑水の源、ここに出づ」とあり。圖書編に太白山は、鄜縣の東南に在り、關中の諸山、これより高きはなし、上に鐵鑄山神牌三あり、湫池あり、三伏と雖も亦た凝氷、山嶺常に積雪あつて消えず、盛夏、これを視れば、猶ほ爛然、故に太白を以て名づく。鬼谷あり、即ち、鬼谷子、蘇秦に捭闔の術を授くる處」とある。

【題義】この詩は、前と同じ場所なる魯郡の堯祠に於て、縣令寶華といふものの、長安に歸るを送つたのである。寶華は、前に任城六父を送る詩中にあつた寶公かとも思はれるが、その人の事は分らない。そして、この詩は、題下の自註に「時に久病初めて起つて作る」とある。

【詩意】朝に、古しへの犁眉驪にも比すべき名馬に鞭つて出かけやうと思ふが、何分、病氣の揚句である爲に、鞭を擧ぐるにも力が足らず、馬をかけさせることが出来ない。今しも、無理に、愁病を扶けて、何處へ往くかといへば、角巾を戴き、ことさらに微服して、堯祠の南に向ふので、そこには、寶明府の餞筵が開かれるからである。その堯祠の邊に於ては、柳の枝が長く枝垂れて、日光さへも見えぬ位、石門から流れる水は、噴き出でて、金沙潭と成つて居る。そこで、絶境を指して、故人に向ひ、なんと、この景色は、又格別では無いか、山光水色 相映じて、藍よりも青いといつた。堯祠の廟中に於ては、往往、參詣者が來て、鼓を敲く。元來、堯は、無心であるのに、參詣者は、何を苦んで、そんな眞似をするのであるか。その廟前には、二個の石人が跪いて居るし、そこら邊には、花の如き女が聚まつて、毎日、歌舞を爲し、まことに賑かである。貴人公子輩は、銀鞍に跨り、繡轂を轉じて、しきりに往來し、そして、その車馬は、林を簸ひ、石に蹶くやうな勢で、遙に聞けば、風雷の鳴るやうである。眺めやれば、遠くに棚引く煙や、空翠の色は、時時明滅し、水に泛んで居る白鷗が飛び起つ時は、さながら雪の飛んだやうに見える。それから、丹塗りの亭子は、赤い欄干を繞らし、其下には、碧流がぐるりと環轉し、早瀬は、青錦を展べたやうである。百尺の深き淵は、洞

嘗て大醉して歸らずんばあらず。恒に言ふ、これは是れ我が高陽池と。故に時人これが爲に歌うて曰く、山公去何去、往至高陽池、日暮倒載歸、酩酊無所知と。酩酊は醉の甚しきこと。【二七】竹林七子 阮籍、嵇康、山濤、劉伶、阮咸、向秀、王戎。魏の嘉平中、竝に河南山陽に居り、共に竹林の遊を爲し、世に竹林

海の底にも通ずるか怪まれ、そこには、蛟龍が潜んで、蟠まつて居るかも知れない。むかし、石崇が豪華を恣にした時、この宅の邊には、緑珠潭といふがあつて、その水は、東海に流れて居たが、やがて寵愛の緑珠は、禍の本を爲し、紅粉の妝も、いつしか消え、光彩は水に沈んで、見えなく成り、同じく緑珠てふ名を冠した樓の下には、花咲き亂れて、園中に満ちて居たが、それも今日では、一枝も残つて居ない。容華久しく駐まらず、はては、見る影も無いやうになるのは、すべて、この通り。時しも秋で、昨夜秋聲颯然として天門より吹き起れば、洞庭湖上、木葉亂れ落ちて、騷人は、悲哀の情に堪へない。そこで、少年輩を三人五人引き具し、高きに登つて遠望すれば、鬱懷直に散じて、形神ともに開くを覺える。九鼎の尊きも、物の數ではなく、生前には一笑に付し去るが善いので、魏の武帝など、區區として、名位に眷戀して居たから、臨終の際も、銅雀臺が氣にかかつて居たのである。われは、今、白雲に對して歌ひつつ、窓に倚つて居るので、汝は、其聲を聞いて、唯だ手を揮へば善い。眺めやれば、長風颯然、月を吹いて海上より來り、まことに、この上もない好い景色であるから、遙に仙人を呼び下して、一杯の酒を勧めやうと思ふ。かくて、酒半ばに、樂の聲方に酣にして、すでに夜中に近きをも意とせず、羽觴を舉げ、黃泉に向つて、此祠の祭神たる古しへの帝堯に酒を勧めるが、堯は、果して之を聞くであらうか。もし堯の魂魄、未だ死せずして、これを聞く位ならば、阜陶に命じ、ははきを執つて、八極を横絶し、直に青天に上つて、浮雲を掃ひ盡し、かの月をし

て、長しへに明かならしめ、以て我が興を添へたら善いのであるが、さうも成らぬを見ると、堯の魂魄は、何處へ往つたか分らないのであらう。むかし、山簡は、高陽なる習家の池上に於て痛飲したといふが、それは、まことに瑣瑣たる事で、山公が酔ひつづれたといつた處で、今日わが酒興を縱にするには、到底及ぶまい。竹林の七賢は、風流放誕の生涯を恣にしたが、今は何處へ往つて仕舞つたか、王羲之は、蘭亭に修禊し、雄筆を以て其序を書いて、千古に傳へて居るが、そんな事は、決して矜るに足らぬことである。ここに、堯祠に立つて、はるかに五湖を思ひ、古しへ范蠡が舟を泛べて遠く去つたことを笑ふので、今日、湖中には、憔悴したる蓮の花が残つて居るばかり、まことに、寂寥の有様であらう。ここに、汝が西秦に往くに際し、われは東越に向ひ、しばらく、瀛洲に仙人の金闕を尋ねやうと思ふ。汝すでに去りし後、藍田だの、太白だのいふ名山が氣に入つて、仙を學ぶに都合が善いと知つたならば、予が爲に、大石の面を月下に掃除して、いづれ其地に往くのを待つて居て貰ひたい。

【餘論】起首より那知不有蛟龍蟠に至るまでは、専ら堯祠の風景を述べ、君不見綠珠潭水流三東海より魏武何悲銅雀臺に至るまでは、浮生の榮華、決して恃むに足らざることを敘し、以下専ら送別の正意に及び、仙音縹緲として、浮世ばなれにして居る處は、まことに面白く、いくらか圓熟せぬ處もあるが、李白の手筆たることは、斷じて争はれない。

金郷送韋八之西京

金郷にて韋八の西京に之くを送る

客自長安來。還歸長安去。

客は長安より來り、還た長安に歸つて去る。

狂風吹我心。西挂咸陽樹。

狂風、わが心を吹いて、西、咸陽の樹に挂く。

此情不可道。此別何時遇。

この情、道ふべからず、この別、何時か遇はむ。

望望不見君。連山起煙霧。

望望、君を見ず、連山、煙霧を起す。

【字解】 一 還、またと訓す、循環する意。 二 咸陽、長安に同じ。 三 連山、鮑照の連山渺煙霧、長波迴難依の二句に本づく。

【題義】 金郷は縣名、唐書地理志に據れば、河南道兗州魯郡に屬して居る。韋八は、名字ともに不詳。

この詩は、魯郡の金郷に於て、韋八といふ人の長安に回るのを送つて作つたのである。

【詩意】 君は、先頃、長安から、この金郷の地に來たのであるが、所用も、すでに片付いたといふので、今しも、再び長安の方へ歸らうとして居る。折しも、狂風颯颯、わが心を西の方へ吹き飛ばし、君の行き著くよりも先に、これを咸陽の樹に挂けた。つまり、君が長安に歸ると聞いたから、わが心は、矢も楯も堪まらず、先づ其地へ飛んで往つたのである。この情思は、到底言説すべからず、そして、この別を爲した上は、何時又遇へるやら、もとより分らない。かくて、君が程に登りし後、望望

として眺めやれども、その影は、すべて見えす、そして、一帶の連山、夕ならむとして、煙霧を起し、いたづらに、悽愴の感を増すばかりである。

【餘論】 この詩は、簡単な割合に、面白く出来て居るので、句句、情真にして語摯、狂風の二句は、かの我寄愁心與明月、隨風直到夜郎西と異曲同工、以下四句も妙に人を動かす處がある。

送薛九被讒去魯

薛九の讒せられて魯を去るを送る

宋人不辨玉。魯賤東家丘。

宋人玉を辨せず、魯は東家の丘を賤む。

我笑薛夫子。胡爲兩地遊。

我は笑ふ薛夫子、胡爲れぞ兩地に遊ぶ。

黃金銷衆口。白璧竟難投。

黃金、衆口に銷し、白璧、竟に投じ難し。

梧桐生蒺藜。綠竹乏佳實。

梧桐、蒺藜を生じ、綠竹、佳實に乏し。

鳳皇宿誰家。遂與羣雞匹。

鳳皇、誰が家に宿し、遂に羣雞と匹す。

田家養老馬。窮士歸其門。

田家、老馬を養ひ、窮士、その門に歸す。

蛾眉笑蹙者。賓客去平原。

蛾眉、蹙者を笑ひ、賓客、平原を去る。

却斬美人首。三千還駿奔。

却つて、美人の首を斬り、三千、還た駿奔。

毛公一挺劍。楚趙兩相存。毛公、一たび劍を挺し、楚趙、兩つながら相存す。

孟嘗悅狡兔。三窟賴馮煖。孟嘗、狡兔を悦び、三窟、馮煖に賴る。

信陵奪兵符。爲用侯生言。信陵、兵符を奪ひ、爲に侯生の言を用ふ。

春申一何愚。刎首爲李園。春申、一に何ぞ愚なる、刎首、李園の爲めなり。

賢哉四公子。撫掌黃泉裏。賢なる哉、四公子、掌を撫す黃泉の裏。

借問笑何人。笑人不好士。借問す、何人を笑ふか、人の士を好まざるを笑ふ。

爾去且勿喧。桃李竟何言。爾、去つて、且つ喧しうする勿れ、桃李竟に何をか言ふ。

沙邱無漂母。誰肯飯王孫。沙邱に漂母なく、誰か肯て王孫に飯せむ。

【字解】一 宋人不辨玉 宋人が燕石を珍重したこと、すでに前に見ゆ。二 東家丘 文選五臣註に「魯人、孔子の聖人たるを知らず、乃ち曰く、彼の東家の丘なるもの、吾、これを知れりと。言ふは、孔子を輕んずるなり」とある。三 黃金銷衆口 國語に「衆口金を鑠す」とあつて、韋昭の註に「鑠は消なり。衆口の毀るところ、金石と雖も、猶ほ之を消すべきなり」とある。しかし、太平御覽には風俗通を引いて「衆口金を鑠す。俗説、ここに美金あり、衆人咸な共に詆訾して、その不純を言ふ、金を賣るもの、その售れむことを欲し、因つて、取り、煨焼し、以て眞を見はす、これを衆口金を鑠すといふ」とある。四 白璧竟難投 史記に「明月の珠、夜光の璧、暗を以て人に道路に投ずれば、人、劍を按じて相眈せざるものなし、何となれば、因なくして、前に至ればなり」とある。五 梧桐、絲竹 鄭康成の毛詩箋に「鳳凰の性、梧桐に非ざれば棲まず、竹實に非ざれば食はず」とある。六 田家養老馬 淮南子に

「田子方、老馬を道に見、喟然として志あり、以て其御に問うて曰く、これ何の馬ぞや。其御曰く、これ故の公家の畜なり、老罷して用を爲さず、出して之を鬻ぐ。曰く、少にして其力を食り、老いて其身を棄つ、仁者は爲さざるなりと。東帛以て之を贖ふ。罷武、これを聞いて心を歸するところを知る」とある。七 蛾眉笑覺者 史記に「平原君の家樓、民家に臨む。民家に覺者あり、盤散行いて汲む。平原君の美人、樓上に居り、望み見て、大に之を笑ふ。覺者、門に至り、笑ふ者の頭を得むことを請ふ。平原君、これを諾し、しかも終に殺さず。居ること歳餘、賓客門下舍人、引き去るもの過半。平原君、これを怪み、問うて其故を知り、覺者を笑ふ美人の頭を斬り、自ら門に造り、覺者に進めて因つて謝す、門下乃ち復た稍稍來る」とある。八 駿奔 駿は大、もしくは疾の義。九 毛公 史記に「秦、趙の邯鄲を圍む、平原君、救を楚に求め、門下、文武備具するもの二十人を擇んで、之と與にす。十九人を得たり。毛遂、自ら薦む。楚に至つて、從を定むれども、決せず。毛遂、歷階して升る。楚王、怒つて之を叱す。毛遂、劍を按じて前んで曰く、王の遂を叱する所以は、楚國の衆を以てなり。今、十歩の内、王、楚國の衆を恃むを得ず、王の命は、遂の手に懸れり。楚の強を以て、天下能く當るなし、白起は小豎子のみ、一戰して邯鄲を擧げ、再戰して夷陵を燒き、三戰して王の先人を辱しむ、これ百世の怨、趙の羞づるところ、合従は楚の爲にして趙の爲めに非ざるなり。王曰く、唯唯、まことに先生の言の如し、謹んで社稷を奉じて以て從はむ」と。平原君、すでに從を定めて歸る。楚、春申君を將として趙を救はしむ」とあり。一〇 孟嘗悦狡兔 戰國策に「馮煖、孟嘗君に謂つて曰く、狡兔に三窟あり、僅に其死を免るるを得るのみ。今一窟あり、未だ枕を高くして臥するを得ざるなり。請ふ、君の爲に復た二窟を鑿たむ」と。西、梁に遊んで、其王を説くや、梁王、使者をして、孟嘗君を聘せしめ、使三反す。齊王、これを聞き、太傅を遣して、君に謝せしむ。馮煖、孟嘗君に謂つて曰く、願はくは、先王の祭器を請ひ、宗廟を薛に立てよ、と。廟成るや、還つて君に報じて曰く、三窟、すでに成る、君、はじめて枕を高くして樂を爲せ、と。孟嘗君、相たること數十年、織芥の禍なきは、馮煖の計なり」とある。一一 信陵奪兵符 前に見ゆ。一二 春申一何愚 史記に「李園、妹を以て春申君に獻す、娠めりあり、而して後に、之を考烈王に納れ、幽王を生む。園、盜をして春申君を殺さしめ、以て口を滅し、楚の政を專にす」とある。一三 黃泉 左氏傳の註に「天玄地黃、泉は地中に在り、故に黃泉といふ」とあり、論衡に「その死するや、これを黃泉の下に葬る」とあり

【一四】桃李 史記に「桃李言はす、下、自ら蹊を成す」とある。【一五】沙邱 魯の地に在つて、その詳は、前に見ゆ。【一六】漂母 亦た前に見ゆ。

【題義】この詩は、薛九といふものが讒言せられ、その爲に、止むを得ず、魯國を立ち去るに就いて、賦して贈つたのである。薛九の名字は、何といふか、又如何なる徑路で、さういふ事に成つたのか、その邊の事は、詩を讀んでも分らぬ。

【詩意】むかし、宋人は、其性太だ愚にして、玉の何物たるかを知らず、燕石を珍として、大事にして居たといふし、魯國の人は、孔子の聖人たるを知らず、これを呼び棄てにして東家の丘といつて居た位。世の中は、目くら千人であるから、折角才があつた處で、容易に認められるものではない。今、薛君は、何が故に、この地より他國に出かけるのか、一寸聞いただけでは笑ふべきことであるが、よくよく考へれば、まことに無理もない事である。現に、黄金は衆口に因つて消鑠せられ、美事な玉も、暗中に投ずれば、劍を按じて見るといふ位で、うっかり、投げ出す譯には行かず、才があつた處で、矢鱈に見せつけると、必ず禍を受けるものである。それから、梧桐の樹には蒺藜が寄生し、竹も實を結ばぬから、折角、鳳凰が出て來た處で、棲むべき處もなく、食ふべき物もなく、止むを得ず、羣雞と一所に成つて居るより外はないので、才あるものも、その處を得ざれば、羣小と伍して居らねばならぬ。しかし、むかしから士を好むものは、決して少くないので、田子方は、拂ひ下げの老馬を買ひ取つ

て、大切に飼養した爲に、窮士は、その門に來り集まつた。次に、平原君の美人は、覺の者の水を汲む様子がをかしいといつて笑ひ、しかも、平原君は、覺者の約に背いて、その美人の頭を斬らざりしに因り、賓客は次第に門下より辭し去つた。それと氣が付いたから、平原君は、美人を斬つて覺者に詫び、厚く之に禮したから、三千の賓客は、又ぞろ大急ぎで其門に駆け込んで來た。かくて、毛遂といふ様な偉い男も、その内に居合せ、平原君が合従を約せむが爲に楚に赴きし時には、劍を按じて、つかつかと楚王の前に進み出でて之に説き、遂に合従を全うせしめ、楚趙の二國は、その爲に、猶ほ存續することが出來た。それから、馮煖は、孟嘗君に説き、狡兔も三窟あればこそ安心であるので、是非とも、さう無くては成らぬといひ、孟嘗君の爲に力を盡して、數十年間、織芥の禍も無い様にした。信陵君は、侯嬴の謀に因り、王の臥内に在る兵符を竊んで、晉鄙の軍を奪ひ、自ら將として趙を救ひ、遂に希代の大功を成した。古人士を好むの功は、大抵かくの如く、これにつけても、讒言を聞いて、天晴の士を追ひ拂ふなどいふのは、以ての外のことである。唯だ春申君のみは、まことに、愚の骨頂で、その行爲も、純ならざるに因り、後に李園といふ小人の爲に首を刎ねられて仕舞つた。以上、平原・孟嘗・信陵・春申の四人は、戰國時代に當つて、ともに賓客を好み、四公子と稱せられた位で、死後黄泉の下に於て相會し、手を拍いて快げに話して居るであらう。そこで、何人を笑ふかと問へば、世の中の權勢ある人人が兎角士を好まず、従つて、大仕事を仕出かすことが出來ない、まこ

とに詰らぬことだといつて、その人人を笑つて居る。君も、今、士を好まざる世の中に於て遂に用ひられず、はては、讒言を被つて追ひ出されたからといつて、格別恥にも成らないから、素直に此を立ち去りて、くどくどしく騒ぎ立てぬ方が善いので、物言はずして、自然その下に蹶を成すといふ桃李の様に、奥床かしく有つて欲しい。顧みれば、この沙丘を中心とせる魯國を尋ね廻つたとて、漂母のやうな俠氣ある人もなく、従つて、王孫の窮を憐んで、これに飯を與へるといふ様なこともないから、この地は、斷じて、久戀の地に非ず、さつさと立ち去つて、他國に往つた方が善い。

【餘論】王琦は、この篇を評して「田家養老馬一より以下十四句は、蓋し古人士を好むの美を歴言し、しかも雜ふるに春申一何愚、刎首爲三李園を以てす、倫類に非ざるに似たり。下文又接するに賢哉四公子云云を以てす、これを譬ふれば、李家の娘子、わづかに墨池に入り、忽ちにして雪嶺に登る。太白斗酒百篇、筆に任かせて疾書し、疵類なくんばあらず、然れども、數句の間、黑白分明ならずして、此に至るべからず。苟くも、缺文に非ざれば、訛筆たること、蓋し疑なし」といつたが、極めて的確である。すでに、春申君を一何愚といひ、その次に之をも併せて賢哉四公子といつたのは、矛盾も亦た甚しく、まことに譯の分らぬことである。それから、今の人が士を好まぬ爲に止むを得ず此を去るといふのは、穩かであるが、題には、讒を被つて去るとあつて、もそつと、痛切激烈な事が言つて無くてはならぬ筈である。初めの處では、士の不遇を言つて居たので、漸層的に愈よ意味が強

くなるべき筈であるのに、一轉して、士を用ふる功に及んだものだから、何となく、間が抜けて辻褄が合はなく成つて仕舞つたのである。

單父東樓秋夜送族弟沈之秦

單父の東樓にて、秋夜、族弟沈の秦に之くを送る

爾從咸陽來。

爾、咸陽より來り、

問我何勞苦。

我に問ふ、何をか勞苦すると。

沐猴而冠不足言。

沐猴にして冠するは、言ふに足らず。

身騎土牛滯東魯。

身は土牛に騎して、東魯に滯す。

沈弟欲行凝弟留。

沈弟は行かむと欲し、凝弟は留まる。

孤飛一雁秦雲秋。

孤飛一雁、秦雲の秋。

坐來黃葉落四五。

坐來、黃葉落つる四五。

北斗已挂西城樓。

北斗すでに挂る西城の樓。

【字解】(一) 沐猴而冠 史記に「説者曰く、人は曰ふ、楚人は沐猴にして冠するのみ」とあつて、張晏の解に「沐猴は獼猴なり。漢書に、魯太子以爲へらく、漢廷の公卿列侯、皆沐猴にして冠するが如きのみ。その衣冠を著くと雖も、但だ微に人形に似て、他の才能なきを言ふなり」とある。(二) 土牛 周泰が鍾繇に答へて「獼猴、土牛に騎する、何ぞ遲きや」といふに本づき、すでに前に見ゆ。(三) 絲桐感人 王粲の詩

絲桐感^三人絃亦絕。絲桐、人を感じて、絃、亦た絶ゆ。

滿堂送客皆惜別。滿堂送客、皆別を惜む。

卷簾見月清興來。簾を卷き、月を見て、清興來る。

疑是山陰夜中雪。疑ふらくは是れ山陰夜中の雪。

明日斗酒別。明日、斗酒の別。

惆悵清路塵。惆悵、清路の塵。

遙望長安日。遙に長安の日を望めども、

不見長安人。長安の人を見ず。

長安宮闕九天上。長安の宮闕、九天の上、

此地曾經爲近臣。この地、かつて經て近臣となる。

一朝復一朝。一朝復た一朝、

髮白心不改。髮白くして心改めず。

屈平憔悴滯江潭。屈平憔悴して江潭に滯し、

に絲桐感^三人清、爲^レ我發^二悲音^一とあるに本づく。【四】山陰夜中雪、世

説に「王子猷、山陰に居る、夜大雪、眠覺め、室を開き、命じて酒を酌み、四望皎然」とある。【五】清

路塵、曹植の詩に君若^二清路塵^一とある。【六】屈平憔悴、楚辭に「屈原、

すでに放たれて江潭に遊び、澤畔に行吟す、顔色憔悴、形容枯槁」とある。【七】亭伯、後漢書に「崔駰、字

是亭伯、竇憲の主簿となり、前後奏記數十、長短を切指す。憲、容るる能はず、稍や之を疎んず。因つて、

駰の高第を察し、出して長岑の長となす。駰、自ら遠く去り、意を得ざるを以て、遂に官に之かすして歸る」とある。長岑は縣名、樂浪郡に屬し、その地は遼東に在る。【八】轉蓬、曹植の詩に轉蓬離^二本根^一、飄飄隨^二長

風、何意迴颺舉、吹^レ我入^二雲中^一、高高上無^レ極、天路安可^レ窮、類^二此游子^一、捐^レ軀遠從^レ戎とある。【九】聞弦虛墜、戰國策に「更羸、魏王と京臺の下に處り、魏王に謂つて曰く、臣、王の爲に弓を引き、虚發して、鳥を下さむ。魏王曰く、射、ここに至るべきか。更羸曰く、可なり」と。問ありて、

亭伯流離放^二遼海^一。亭伯流離して遼海に放たる。

折翻翻飛隨轉蓬。翻を折り、翻飛して轉蓬に隨ひ、

聞弦虚墜下霜空。弦を聞き、虚墜して霜空を下る。

聖朝久棄青雲士。聖朝久しく棄つ青雲の士、

他日誰憐張長公。他日、誰か憐む張長公。

雁、東方より來る。更羸、虚發を以てして之を下す。王曰く、然らば、射、ここに至るべきか。更羸曰く、これ孽なり。その飛ぶこと徐にして、鳴くこと悲し。飛ぶこと徐なるものは、故瘡痛むなり。鳴くこと悲しきものは、久しく羣を失ふなり。故瘡、未だ息まず、驚心未だ忘れず、弦音の烈しきを聞いて、高く飛ぶ、故瘡隕つるなり」とある。【一〇】張長公、史記張釋之傳に「その子を張攀といふ、字は長公、官、大夫に至り、免す、容を當世に取る能はざるを以て、故に終身仕へず」とある。

【題義】單父は縣の名で、唐時は河南道宋州睢陽郡に屬して居た。族弟といへば、從弟であらう。その人、名は沈、繆本には況に作つてある。秦は長安、一本には西京に作つてある。すると、この詩は、秋夜、單父なる東の城樓に登り、其處で從弟李沈の長安に赴くを送つて作つたのである。そして、李白の自註に「時に凝弟席に在り」とあつて、詩中にも、沈弟欲^レ行凝弟留とある。沈、凝の二人、その名の相近き處から考へると、これは、同腹の兄弟であるかも知れぬ。

【詩意】汝は、曩に長安より來り、我に向つて、如何なれば、かくは勞苦するかといつて、頻りに慰めて呉れた。我の如きは、格別の才能もなく、たとへば、猴が人の眞似をして居るやうなもので、もとより、言ふに足らず、現に猴が土牛に乗つた様な工合で、今以て、東魯の地に滯留して居る。然るに、汝は、此に留まること久しからず、今しも再び長安に赴かむとし、そして、凝弟だけは、ここに残つて居るとのこと、汝の此行、たとへば、一雁さびしく飛んで、秦地の秋の雲に入るやうなものである。折しも秋の末、見て居る間に、黄葉が四つ五つ、座上に飄り、北斗の星は、熒熒として、西の方の城樓の上に挂つて居る。やがて、琴を弾すれば、その聲、清越にして、人心を感せしめ、そして、絃も切れて仕舞ひ、見送りに來た人人は、いづれも、別を惜んで悽然として居る。かくて、簾を巻き上げて明月を見れば、清光晝の如くして幽興を催し、さながら、山陰の夜中に雪が降り積つたかと疑ふばかり。明日、斗酒を酌んで別を爲せば、汝は、蹤跡飄然、清路の塵の如く、行く手はるかに長安の月を望み得るも、長安に赴く人は、やがて見えなくなる。長安は天子の都で、宮闕嵯峨として九天の上に聳え、汝も嘗て近臣として、天子の御側に奉仕したことがある。それから、一朝復た一朝と、年月は次第に移り行き、頭上の髪は、追追白くなつても、一片の丹心は、依然として變らない。今、汝の身の上は、屈原が江潭に遊んで、顔色憔悴せるが如く、又崔亭伯が竇憲に疏まれて、遠く遼東に放たれたやうなものである。かくて、翼を折つた儘、行衛定めず、轉蓬の如く翻つて飛び、弦音を

聞いても、古瘡を持つ雁が、霜凍る空から地に落ちるといふやうな、果敢ない境涯である。今日、聖明の朝廷に於て、青雲を棄てて、久しく顧みないのは、如何なる故か。かくて、張長公に比すべき純潔なる良士に向つて、同情を寄せるものの無いのは、まことに、嘆かましい事である。

【餘論】初の四句は、沈弟が己を慰問せしことを述べ、沈弟欲行凝弟留より不見長安人に至るまでは、送別の状況、以下十句は、その人物を敘し、深く痛惜の意を寓したので、感慨淋漓、人をして覺えず浩歎せしめる。

送族弟凝至晏堦單父三十里 族弟凝を送つて晏堦に至る、單父より三十里

雪滿原野白。戎裝出盤遊。雪は満ちて原野白く、戎裝出でて盤遊す。

揮鞭布獵騎。四顧登高丘。鞭を揮つて獵騎を布き、四顧して高丘に登る。

兔起馬足間。蒼鷹下平疇。兔は起つ馬足の間、蒼鷹、平疇に下る。

喧呼相馳逐。取樂銷人憂。喧呼相馳逐、樂を取つて人憂を銷す。

捨此戒禽荒。徵聲列齊謳。此を捨てて禽荒を戒めよ、徵聲、齊謳を列す。

鳴雞發晏堦。別雁驚涑溝。鳴雞、晏堦を發し、別雁、涑溝に驚く。

西行有東音。寄與長河流。 西行、東音あり、寄與す長河の流

【字解】(一) 原野 淮南子に「原野を周視す」とあつて、高誘の註に「廣平を原といひ、郊外を野といふ」とある。(二) 盤遊 書の五子之歌に「盤遊無度とあつて、孔安國の傳に「盤樂遊逸なり」とある。(三) 禽荒 同じく五子之歌に「外作禽荒」とあつて、鳥を狩することに耽ること。(四) 微聲 鮑照の詩に「選色徧齊魯、微聲匣叩越」とあつて、微聲は悲しい調子。(五) 齊謳 説文に「謳は齊歌」とある。(六) 涑溝 魏書に「東平縣范縣に涑溝あり」山東通志に「單縣東門外に涑河あり、源、泮水に出づ、晉時、開くところ。北、濟河に抵り、南、徐沛に通ず。元以後、漸く涇み、惟だ下流沛に入るもの、わづかに水道を存す」とある。(七) 東音 呂氏春秋に「夏后氏孔甲、破斧の歌を作る、實に始めて東音たり」とある。

【題義】 族弟凝は、前詩にも見えて居たので、李沈が先つて長安に赴きし時、この人だけは、なほ單父に留まつて居たが、やがて、相繼いで都に歸つたものと見える。そして、李白は、特に之を送つて、晏堦といふ處まで往つたので、そこは、單父から三十里距つた處である。この題は、單父の上に、どうやら脱字が有るらしい。しかし、晏堦は何處か、その地理は、よく分らない。そして、その時は雪後で、狩獵を爲し、そこで、別を敘したものに見えるが、ひよつとすると、送別の爲め、特に獵を催したのかも知れない。

【詩意】 大雪が降つて、原野一白、まことに、狩には持つて来いといふ時であるから、武裝して、盤遊の爲に出かけた。かくて、鞭を揮つて指揮しつ、獵騎を要處に配置し、自分は、高丘の上に馬を立てて、試に四顧した。すると、兎は狩り出されて、馬足の間に跳り出し、蒼鷹は、勢こんで、平かな畑地に下り、そして、勢子どもは騒ぎ立てて馳せ廻り、まことに、この上もない樂で、區區たる人間の憂を消すことが出来る。しかし、狩に耽るのは、即ち禽荒といふものであるから、いい加減の處で切り上げて之を戒め、そして、宴上には、微聲を以てせる齊國の歌を唱へ、いささか、送別の意を寓した。君は、明朝、鶏の鳴くのを聞いて、この晏堦から出發されるであらうが、友を失へる雁の驚飛して涑溝の邊を過ぐるを見れば、おのが身に似通つて居る處から、必ず心を傷ましめるに相違ない。それから、西に行く途すがら、この東方の音を耳にしたならば、わが特に意を用ひて、長河の流に寄せた爲であるとして、又わが事を思ひ出して貰ひたい。

【餘論】 前八句は狩獵の光景、一轉して送別に入り、末句は殊に意の盡きざるを覺える。

魯城北郭曲腰桑下送張子還嵩陽

魯城北郭曲腰の桑下に、張子の嵩陽に還るを送る

送別枯桑下。凋葉落半空。 別を送る枯桑の下、凋葉、半空に落つ。
我行道遠。爾獨知天風。 我行、道の遠きに慥し、爾、獨り天風を知る。
誰念張仲蔚。還依蒿與蓬。 誰か念はむ張仲蔚、還た依る蒿と蓬と。

何時一杯酒。更與李膺同。 何時一杯の酒、更に李膺と同じうせむ。

【字解】 一 枯桑 古樂府に枯桑知天風とあり、李善の註に「枯桑枝なくして、尙ほ天風を知る」とある。 二 樽 説文に「不明なり」とある、即ち暗いこと。 三 張仲蔚 高士傳に「張仲蔚は平陵の人なり、同郡の魏景卿と俱に道徳を修め、身を隠して仕へず、天官博物に明かに、善く文を屬し、詩賦を好む、常に窮素に居り、處るところ、蓬蒿人を没す、門を閉ち、性を養ひ、榮名を治めず、時人識るなし、惟だ劉襲これを知る」とある。 四 李膺 前に見ゆ。

【題義】 この詩は、魯城の北郭なる曲腰といふ處の桑下に於て、張某の嵩山の南に還るを送つて作つたのである。

【詩意】 君の行くを送つて、枯桑の下に佇めば、黄ばんだ葉が、はらはらと半空より落ちて來る。われは、道の遠きをも知らず、茫然として居るが、桑は、時の風を知つて、かくは落ちて來るので、一しほ淒涼の趣を添へる。張仲蔚に比すべき君は、ここを去つて、蓬蒿の中に隠れ住み、又何時、この李膺と共に一杯の酒を酌むであらうか。あはれ、再會期すべからず、この恨、愈よ堪へ難きを覺える。

【餘論】 前半四句は一氣呵成、自然に淒寥の致に満ちて居る。それから、張仲蔚、李膺、ともに同姓の故を以て、自他二人に比したので、もとより、漫然として情ひ來つたものではない。

李太白集 卷十六

送魯郡劉長史遷弘農長史 魯郡の劉長史、弘農長史に遷るを送る

魯國一杯水。難容橫海鱗。 魯國一杯の水、横海の鱗を容れ難し。

仲尼且不敬。況乃尋常人。 仲尼すら且つ敬せられず、況んや乃ち尋常の人をや。

白玉換斗粟。黃金買尺薪。 白玉、斗粟に換へ、黃金、尺薪を買ふ。

閉門木葉下。始覺秋非春。 門を閉づれば木葉下り、始めて覺ゆ、秋、春に非ざるを。

聞君向西遷。地即鼎湖鄰。 聞く、君が西に向つて遷るを、地は即ち鼎湖の鄰。

寶鏡匣蒼蘚。丹經埋素塵。 寶鏡は蒼蘚を匣にし、丹經は素塵に埋む。

軒后上天時。攀龍遺小臣。 軒后、天に上る時、攀龍、小臣を遺す。

及此留惠愛。庶幾風化淳。 此に及んで、惠愛を留め、庶幾す風化の淳なるを。

魯縞如白煙。五緜不成束。 魯縞は白煙の如く、五緜、束を成さず。

臨行贈貧交。一尺重山岳。

行くに臨んで、貧交に贈る、一尺、山岳よりも重し。

相國齊晏子。贈行不及言。

相國齊の晏子、行を贈つて言に及ばず。

託陰當樹李。忘憂當樹萱。

陰を託する、當に李を樹うべく、憂を忘るる、當に萱を

他日見張祿。綈袍懷舊恩。

他日、張祿を見れば、綈袍、舊恩を懷はむ。「樹うべし。」

【字解】

【一】 横海鱗。抱朴子に「寸鮪は牛跡の水に遊び、横海の巨鱗を責ばす」とあり、謝世基の詩に、偉哉横海鱗、壯矣垂天翼とある。

【二】 鼎湖。黄帝が鼎を鑄た處、その詳、前に見ゆ。その地は、弘農郡の胡城縣である。【三】 寶鏡。太平廣記に「黄帝、十五鏡を鑄る、その第一、横徑一尺五寸、滿月の數に法るなり」とある。又路史には、十二鏡となし、羅華の註に「十有二次に應じ、得る者あるに隨つて、以て日蝕を占し、刻分差なし」とある。

【四】 丹經。抱朴子に「黄帝、王屋に陟つて、丹經を授かる」とあり、路史に「黄帝、駕を王屋に同し、石函を啓き、玉笈を發し、九鼎飛靈神丹訣を得たり」とある。

【五】 軒后。黄帝軒轅氏の略。【六】 魯綺。魯國に産する白綺。【七】 五緜。王琦は緜を以て兼の誤だらう、そして五兼は即ち五匹だといった。東は鄭玄の周禮註に「十個を束となす」とある。唐制に、帛は十端を束としたので、五匹の儘では、束を成さぬ。

【八】 晏子。晏子春秋に「曾子、將に行かむとす、晏子、これを送つて曰く、君子は人に贈るに軒を以てするも、言を以てするに若かず」とある。【九】 樹李。說苑に「桃李を樹うるもの、夏は休息するを得、秋は其實を得」とある。

【一〇】 樹萱。詩の國風に、焉得三葢草、言樹之背とあつて、毛傳に「葢草は、人をして憂を忘れしむ」とある。【一一】 張祿。史記に「范雎、すでに秦に相たり、秦、號して張祿といふ、而して、魏、知らず。魏、秦の東韓魏を伐たむとするを聞き、須賈を秦に使す。范雎、これを聞き、微行を爲し、敝衣間歩して邸に至り、須賈を見る。賈、意、これを哀み、留めて與に坐し、飲食せしめて曰く、范叔一寒、ここに至るか、と。乃ち一綈袍を取つて以て之に賜ふ」とある。

綈袍は即ち麤袍、どてら。

【題義】

魯郡は、兗州弘農郡の魏州で、河南道に屬し、もと上州である。元來、上州の刺史別駕の下には、長史一人あつて、從五品である。長史といへば、今の縣參事官の如きものであらう。劉は、名字ともに不詳。この詩は、劉某が魯郡の長史から、弘農の長史に榮轉したるに因つて、その行を送るが爲に作つたのである。

【詩意】

むかし、魯國に於ては、唯だ一杯の水を湛へたと同じく、海を横絶する様な大魚を容れることが出來ず、折角、孔子の様な大聖人が出て來ても、これを用ひずに仕舞つた。孔子さへ、魯國の人に尊敬されなかつた位であるから、尋常の人に於ては、猶更の事で、こんな處へ往つては、とても遣り切れない。されば、君の魯郡に在るや、矢張、多くの人から馬鹿にされ、白玉を以て一斗の粟に換へ、黄金を以て一尺の薪を買ひ、廉いものを態態高く買はされて、まことに閉口して居た。かくて、門を閉づれば、木葉はらはらと下り、わが身一つの秋は、早くも來て、世は今しも春でないといふことを覺つたといふ位。承れば、君は、今回、西に向つて、榮轉されたといふことで、その地は、古しへの鼎湖に鄰つて居る。おもへば、黄帝の鑄造した寶鏡は、蒼苔に包まれ、天から授けられた丹經は、塵埃に埋没して仕舞つた。しかし、黄帝が天に登る時、小臣輩は、龍の髯を攀ち、やがて、髯が抜けて、地に落されたといふことで、依然として、惠愛を留め、そして、千歳の後に於ても、どうやら、風俗は純良である。君は、賢人の存在を認めぬ魯郡から、黄帝の遺跡たる弘農に轉任されたる

ことだから、まことに目出たい。その上、君は予が窮迫を憐み、置土産として、魯國に産する白絹を贈られたが、その絹は、如何にも精緻を極めて、さながら白煙の如く、五匹では數こそ揃はぬが、まことに、大したもの、一尺ごとに、誠心が籠つて、その徳は、山岳よりも重い。むかし、齊の晏子の云つた通り、人の行を贈るには、言葉を以てするのが第一であるから、予はここに、晏子に倣うて、君に餞するに言を以てしやうと思ふ。もし木蔭に身を寄せむと欲せば、李樹を植うべく、もし憂を忘れむと欲せば、萱草を植ふたが善い。つまり、人の徳あるものに交れば、以て庇蔭すべく、人の才華あるものに交れば、以て欣賞することが出来るので、何につけても、交を擇ぶが第一である。われは、いつまでも貧賤に甘んじて居るものでないので、かの范曄が秦に入つて張祿と稱し、やがて相位に登つたと同じく、いつかは、相當に立身しないものでもないから、その時は、かの綈袍に比すべき君の舊恩を懷うて、必ず之に報ゆるであらう。

【餘論】起首の八句は、劉某が魯郡に於て志を得ざることを寫し、次の八句は、弘農に遷れば、大に得意なるべきを敘し、魯縞の四句は、別に臨んで物を贈られたるを謝し、以下六句は、ここに言を贈るといふことに及び、以て收結としたのである。

送族弟單父主簿凝攝宋城主簿至郭南月橋

却廻棲霞山留飲贈之

族弟單父の主簿凝、宋城の主簿を攝し、郭南の月橋に至り、却つて棲霞山に廻るを送り、留飲して之に贈る

吾家青萍劍。操割有餘閒。

往來糾二邑。此去何時還。

鞍馬月橋南。光輝歧路間。

賢豪相追餞。却到棲霞山。

羣花散芳園。斗酒開離顏。

樂酣相顧起。征馬無由攀。

【字解】一 青萍、劍の名。二 操割、子産の「未だ刀を操る能はずして割かしむ」といふ語を用ひたので、すでに前に見ゆ。三 糾、韻會に「督なり、又察なり」とあり、周禮大司徒に「萬民を糾す」とある。四 斗酒開離顏、陶潛の詩に「斗酒開離顏」とあるに本づく。五 征馬、江淹の別賦に「驅征馬而不顧」とあるに本づく。

【題義】族弟凝は前に見え、族弟沈と一所に居て、沈の長安に還りしとき、なほ單父に留まり、それから、長安に歸るに就いて、李白は、これを晏瑀まで送つたといふので、その詩は、前に見えて居た。

宋城縣は、唐の河南道、宋州睢陽縣に屬し、その郭下に單父縣があつて、州の東北一百四十九里に在つたといへば、宋城も、單父も、互に鄰接して居たのである。棲霞山は、一統志に「兗州單縣の東四里に在り」と記してある。單縣は、即ち舊時の單父縣である。この詩は、族弟凝が單父の主簿であつたのに、今回宋城の主簿をも兼攝することになり、公務の都合で、郭南の月橋に至り、それから、棲霞山に還らむとするに際し、これを留めて酒を飲ましめ、因つて、賦して贈つたのである。

【詩意】汝は、吾が家の青萍劍ともいふべく、その切れ味は如何にも見事で、これを操つて物を割くに際し、綽綽として餘裕がある位、その才幹は、天晴の人物と稱すべきものである。かくて、今までは單父の主簿であつたのに、今度は、宋城をも兼攝し、二邑の間を往來し、萬民を糾して政を行ふことに成つたが、ここを去れば、又何時還るであらうか。かくて、鞍馬を聯ねて、月橋の南に至れば、光輝燦然として、歧路の間に照り耀く位、そこで、單父の賢豪どもは、跡を追ひかけて、餞別の宴を開き、それから、汝は棲霞山に往くとのことである。時しも春の半、羣花は芳園に散じ、斗酒を酌めば、別離の愁顔を開かしめる。やがて、樂酣なる時、さらばといひつつ、相顧みて起ち、愈よ出かけるといふが、公事程あり、汝の馬を引き留めることの出来ないのは、まことに残念である。

【餘論】起四句は李凝の人物、次の四句は今次の修行、終の四句は餞筵の狀況で、内容が内容だけに、格別の物ではないが、相應にまとまつて居る處は、さすがに李白の手筆である。

魯郡東石門送杜二甫 魯郡東石門にて杜二甫を送る

醉別復幾日。登臨徧池臺。醉別復た幾日。登臨、池臺に徧ねし。

何時石門路。重有金樽開。何時か石門の路、重ねて金樽の開くあらむ。

秋波落泗水。海色明徂徠。秋波、泗水に落ち、海色、徂徠に明かなり。

飛蓬各自遠。且盡手中杯。飛蓬各、自ら遠し、且つ盡せよ手中の杯。

【字解】一、泗水 元和郡縣志に「泗水は、源、兗州泗水縣東の陪尾山より出づ、その源、四あり、四泉ともに導く、因つて、以て名と爲す」とあり、一統志に「泗水は、源、陪尾山より發し、四泉竝に發し、泗水縣北八里に循ひ、はじめて合して一となり、西、曲阜縣を經、兗州府城の下を貫き、濟寧に至つて南北に分流し、南流は徐州の境に入り、北流は會通河に入る」とある。二、徂徠 水經註に「徂徠山は梁甫、奉高、博、三縣の界に在り、なほ美松あり、亦た尤來の山といふ」とあり、一統志に徂徠山は、泰安州の東南四十里に在り、上に紫原池、玲瓏山、獨秀峰、天平東西三臺あり」と記してある。三、飛蓬 商子に「飛蓬、飄風に遇つて、千里を行く」とある。

【題義】王漁洋の居易錄に「孔博士東塘言ふ、曲阜縣の東北に石門山あり、即ち杜子美の詩、張氏隱居に題すに謂はゆる春山無伴獨相求、劉九法曹鄭瑗邱、石門宴集に謂はゆる秋水清無底、是れなり。李太白、石門に杜二甫を送るの詩あり、何時石門路、更有金樽開と。亦た其地の山麓、今尚ほ張氏莊あり、相傳へて、唐の隱士張叔明の舊居と爲す。張は、蓋し太白孔巢父輩と同じく、徂徠に隱れ、竹

溪六逸と稱せしものなり。山は甚だ高大ならざるも、石峽對峙、門の如し、故に名づく。中に石門寺あり、寺後を涵峰といふ、峰頂に泉あり、流れて溪澗に入り、往往瀑布を成すとある。すると、石門は、即ち今の石門山で、魯郡の東に在る。この詩は、その地に於て杜甫の遠行を送つたときに作つたのである。

【詩意】今次、君が遠くに行かれるに就いて、別を惜む爲に醉飲し、すでに幾日を経たか。その間、處處の池臺に登臨して、最早殘すところもない位。しかし、一たび別れなば、この石門の路に於て、何時又相逢うて金樽を開くべきか。再會の日は、もとより期することが出来ない。眺めやれば、秋の波が起つて、さしもの泗水も稍や浅く、海色は晴れ互つて、徂徠山に反映して見える。君も、我も、ひとしく旅の身で、蹤跡は飛蓬の定處なきが如く、やがて、各自に遠くに往つて仕舞ふから、せめては、ここに於て、手中の杯を傾け、十分に樂を盡すが善からう。

【餘論】この篇は、極めて短いが、出語輕省、寫情稠至、すべて自然に出でて、少しも掩飾したり敷張したりした處がない。五六は境地清曠、これを得て、一層の色澤を添へて居る。乾隆御批に「無限の低徊、説いて盡さざる處あり、情、辭よりも深し」とあるが、簡にして盡して居る。それから、蕭士贊の説に「杜少陵、かつて詩あり、太白に贈つて曰く、何時一樽酒、重與細論文。今この篇を觀るに、豈に一時酬答の詩なるか」とあつて、その全篇は、左の通りである。

白也詩無敵、飄然思不羣、清新庾開府、俊逸鮑參軍、渭北春天樹、江東日暮雲、何時一尊酒、重與細論文。

しかし、この詩は、春日憶李白と題してあるから、無論、この時の作ではなく、別後に寄せたので、渭北江東は、兩地隔絶せるを寫し、そして、結二句は、李白の句を翻用したものであらう。又藝苑雌黄に下の一條がある。曰く、洪駒父詩話に言ふ、子美集中、太白に贈る詩、最も多し。しかも、李集、初めより一篇の杜に與ふるものなし、と。按ずるに、段成式の酉陽雜俎に云ふ、李集、堯祠贈杜甫闕一といふものあり、即ち老杜なり、ひとり飯顆山の句のみに非ざるなり、と。予、かつて之を考ふるに、太白集中、沙上城下寄杜甫の詩あり、又魯郡東石門送杜甫の詩あり、洪駒父、略して此を見ざるは何ぞやと。

魯郡堯祠送張十四遊河北

猛虎伏尺草、雖藏難蔽身。

猛虎、尺草に伏す、藏ると雖も、身を蔽ひ難し。

有如張公子、骯髒在風塵。

張公子の如きあり、骯髒、風塵に在り。

豈無橫腰劍、屈彼淮陰人。

豈に横腰の劍、彼の淮陰の人を屈するなからむや。

擊筑向北燕。燕歌易水濱。筑を撃つて、北燕に向ひ、燕歌易水の濱。
歸來太山上。當與爾爲鄰。歸り來る太山の上、當に爾と鄰を爲すべし。

【字解】【一】張公子 張十四その人を指す。【二】航麟 後漢書の註に「高亢倅直の貌」とある。【三】淮陰人 韓信が淮陰の少年に辱められた事を用ふ、すでに前に見ゆ。【四】易水濱 水經註に「太子丹、荆軻を遣して秦王を刺さしむ。賓客、謀を知るもの、皆衣冠を素くして、これを易水の上に送る。荆軻、起つて壽を爲し、歌うて曰く、風蕭蕭兮易水寒、壯士一去兮不復還」と。高漸離、筑を撃つ。宋如意、これに和し、壯聲を爲せば、士皆髮冠を冲し、哀聲を爲せば、士皆流涕す」とある。【五】當與爾爲鄰 陶潛の詩に老夫有所愛、思與爾爲鄰とある。

【題義】唐書地理志に「河北道は、蓋し古しへの幽・冀二州の境、孟・懷・魏・博・相・衛・貝・澶・邢・洺・惠・鎮・冀・深・趙・滄・景・德・定・易・幽・涿・瀛・莫・平・嬀・檀・薊・營の二十九州あり」と見ゆ。張十四の名字は不詳。この詩は、例の魯郡の堯祠に於て、張某の河北に遊ぶを送つて作つたのである。

【詩意】猛虎が、丈高き草むらに伏して居る時、かくれて居る積りであつても、その身を蔽ひかくすことは出来ない。士の此世に在るも、正に之と同じく、全然韜晦しやうとしても、矢張、人の目につき、毀譽褒貶、必ず之に伴ふものである。わが張公子の如きは、天晴の才能あれども、兎兔不遇で、風塵の中に跼踏して居る。もとより、腰下には寶刀を佩びて居るから、失敬にも人を輕侮する彼の淮

陰の少年輩をつかまへて、目に物見せて呉れることの出来ない筈もない。しかし、そんな事はせず、これより、筑を撃ちつつ、北燕に向ふとのことで、易水の邊に於ては、古しへの荆軻を弔ひ、燕歌を唱へて、感慨に堪へぬことであらう。かくて、太山の邊なる、この魯郡の地に再び歸つて來たならば、汝と鄰同士に住んで、日夕追隨、互に慰め合ふことにしやう。

【餘論】全體が悲歌慷慨といふ様な調子で、讀者の心を動盪する。但し、張十四は、何の爲に河北に出かけるのか、その邊の消息は、一切分らず、一轉して、歸來太山上となり、甚だ呆つ氣ない様な氣がする。

杭州送裴大澤時赴廬州長史

杭州にて裴大澤を送る、時に廬州の長史に赴く

西江天柱遠。東越海門深。西江、天柱遠く、東越、海門深し。
去割辭親戀。行憂報國心。去つて、辭親の戀を割き、行く報國の心を憂へしむ。
好風吹落日。流水引長吟。好風、落日を吹き、流水、長吟を引く。
五月披裘者。應知不取金。五月、裘を披くもの、應に金を取らざるを知るべし。

【字解】一 天柱 漢書に「廬江郡灊縣、天柱山南に在り」といひ、三國志に「灊中に天柱山あり、高峻二十餘里、道險狹、歩徑わづかに通ず」とあり、一統志に「霍山は廬州府六安州の西南九十里に在り、一名衡山、一名天柱。漢の武帝、南巡して盛唐に至り、南岳衡山の遠阻なるを以て、乃ち岳神を霍に移して祀る、又南岳山と名づく。山頂に天池、龍湫、風洞、岳井、試心崖、凌霄樹あり」と記してある。二 海門 咸淳臨安志に「海門は仁和縣の東北六十五里に在り、山あり、赭山といふ、龜山と對峙し、潮、その間に生ず」とあり、輟耕錄に「浙江の口、兩山あり、その南を龜山といひ、その北を赭山といふ、蓋し江海の會に峙つ、これを海門といふ」とある。三 披裘者 論衡に「延陵の季子、出でて遊び、路に遺金あるを見る。夏五月に當つて、裘を披いて薪するものあり。季子、薪者呼んで曰く、彼の地の金を取れ、と。采薪者、鎌を地に投じ、目を瞋らし、手を拂つて、言つて曰く、何ぞ子居るの高く、視るの下く、儀貌の壯、語言の野なるや。吾、夏五月に當り、裘を披いて薪す、豈に金を取るものならむや、と。季子これを謝し、姓氏を請ひ問ふ。薪者曰く、子は皮相の士なり、何ぞ姓氏を語るに足らむや、と。遂に去つて顧みず」とある。

【題義】唐時の杭州は餘杭郡で、江南東道に屬し、廬州は廬江郡で、淮南道に屬して居た。裴大のは排行第一、澤は、其名であらう。この詩は、杭州に於て裴大澤といふものが、新に廬江の長史に補せられて、赴任するのを送つて作つたのである。

【詩意】君の行く廬州に於ては、西江の地に名だたる天柱山が遠くに聳えて居るし、今居る杭州は、即ち古しへの東越で、海門深く、兩地の隔絶することは、言ふまでもない。君は、今、親に對する愛戀の情を割いて、行く報國の心を憂へしめ、つまり、公事の爲には私を顧みず、庭闈の樂を棄てて、于役しやうといふ、その心根は、まことに見上げたものである。折しも、好風は落日を吹き、流

水は長吟の聲を引き、さながら、君の前途を祝福するやうである。むかし、延陵の季子は、夏の五月に、厚い裘を着て居るものに向ひ、金を拾へといった處が、見事に一本遣りこめられたことがあるので、いかに聰明の賢者なりとも、これを自負して、人を見縊つては成らぬので、爲政者たる君に向つては、この一事を特に忠告する次第である。

【餘論】これは純然たる五律で、頷聯が聊か一氣呵成的に出來て居る處から、第一第二の兩句を緊密に對した。好風の一聯は名句で、この光景に因つて、その人物を臆想すべく、つまり、情景融合の妙がある。結末は、一步を拓開したので、亦た一種の收結法である。

灞陵行送別

灞陵行、別を送る

送君灞陵亭。灞水流浩浩。

君を送る灞陵亭、灞水流れて浩浩たり。

上有無花之古樹。

上に無花の古樹あり、

下有傷心之春草。

下に傷心の春草あり。

我向秦人問路歧。

我、秦人に向つて路歧を問ふ、

云是王粲南登之古道。

云ふ是れ王粲南登の古道と。

古道連綿走西京。

古道連綿、西京に走る、

紫闕落日浮雲生。

紫闕落日、浮雲生ず。

正當今夕斷腸處。

正に當る今夕斷腸の處、

驪歌愁絕不忍聽。

驪歌愁絶、聽くに忍びず。

【字解】(一) 灞陵亭 太平寰宇記に「灞陵は咸陽縣の東北二十五里に在り」とある。(二) 灞水 水經註に「灞水は白鹿原を經、東は即ち霸川、西は故の芷陽、これ之を霸上といふ。漢の文帝、その上に葬り、これを灞陵といふ。上に四出道あり、以て水を瀉ぐ。長安の東南三十里に在り。故に王仲宣、詩を賦して曰く、南登灞陵岸、廻首望長安」とある。(三) 王粲 字は仲宣、西京の擾亂を以て、乃ち荊州に之いて劉表に依り、七哀詩を作る、即ち南登灞陵岸、廻首望長安の一首。(四) 驪歌 漢書に「王式曰く、客、驪駒を歌ふ、主人歌へば客歸るを容るるなし」とあつて、服虔の註に「驪駒は逸詩の篇名、大戴禮に見ゆ、客去らむと欲して之を歌ふ、その辭に曰く、驪駒在門、僕夫具存、驪駒在路、僕夫整駕」とある。

【題義】灞陵送別の光景を寫したから、かく題したのである。

【詩意】君の遠行を送るが爲に、この灞陵亭まで来て見れば、灞水は、浩浩として、渡ることも一寸六つかしい位。そのあたりを見まはすと、上には、花もない古木が如鬼如鬼と立つて居るし、下には、心を傷ましむる春草が煙の如く萌えて居る。そこで、我は、土人に向つて、路の分れるのは、どこへ通ずるかといつて問ふと、これこそ、むかし、王粲が「南、灞陵の岸に登れば」といつた古道

で、南すれば、荊州までも行くし、北すれば、長安に連つて居る。長安城中には、宮闕嵯峨として聳え、落日西に斜なる頃、浮雲忽ち生じ、まことに心を傷ましめる眺である。この灞亭附近こそ、長安より發する旅客が今夕投宿し、回顧して腸を斷つ處であつて、その人の唱へ出す別の歌は、聲聲愁絶、聞くに忍びないのも、まことに、尤も至極な事である。

【餘論】乾隆御批には「古しへの傷心の人、別に懷抱ありとは、この詩の謂」とある。起首六句、長短錯綜、亦た實に、一奇格と推すべく、その下、古道の二句は、綴景清新、正當今夕斷腸處に至つて、餘情長しへに盡きない。

送賀監歸四明應制

賀監の四明に歸るを送る、應制

久辭榮祿遂初衣。久しく榮達を辭して、初衣を遂げ、

曾向長生說息機。かつて長生に向つて、息機を説く。

眞訣自從茅氏得。眞訣、自ら茅氏より得、

恩波應阻洞庭歸。恩波、應に洞庭を阻て歸るべし。

瑤臺含霧星辰滿。瑤臺、霧を含んで、星辰滿ち、

【字解】(一) 遂初衣 初衣は初服に同じ。楚辭に進不入以離尤二兮、退將復修乎初服、製芟荷以爲衣兮、集芙蓉以爲裳とあつて、王逸の註に「初服、初始潔清の服なり」とあり、即ち朝衣を脱いで、初始潔清の衣服を著ること。(二) 眞訣

仙嶠浮空島嶼微。仙嶠、空に浮んで、島嶼微なり。

借問欲棲珠樹鶴。借問す、珠樹に棲まむと欲するの鶴、

何年却向帝城飛。何の年か、却つて帝城に向つて飛ばむ。

太玄真人傳に「茅盈、仙し去らむとし、家人及び親戚と辭し、句曲に歸る。二弟、これを聞き、官を棄てて家に歸る。漢の元帝永光元年、江を渡つて、兄を東山に求め、遂に與に

相見る。兄曰く、卿、すでに老いたり、欲、補ふべきこと難し、たとひ真訣を得るも、適ま地上の王者と成るべきのみ」とある。【三】洞庭、水經註に「太湖中大雷小雷の三山あり、亦た之を三山湖といひ、又これを洞庭湖といふ」とあり、吳地記に「揚州記に曰く、太湖、一名は震澤、一名は洞庭」とある。【四】瑤臺、拾遺記に「須彌山の旁に瑤臺凡そ十二あり、各、廣さ千歩、皆五色の玉を臺基となす」とあり、梁の武帝の詩に、瑤臺宮碧霧、羅幕生紫煙」とある。【五】仙嶠、列子に「渤海の東、中に五山あり、その根、連著するところなく、常に潮波に隨つて上下往還す」とあつて、その詳、前に見ゆ。仙嶠、浮空は、即ち其事を用ひたのである。【六】珠樹、鶴、淮南子に「崑崙中に珠樹あり、玉樹、璇樹、不死樹、その西に在り」論衡に「海外、西南に珠樹あり」と見ゆ。次に神仙傳に「蘇仙公、道を得たり、數年の後、雲に昇つて去る。後に、白鶴あり、來つて郡城東北樓上に止まる。或は彈を挾んで之を彈す。鶴、爪を以て樓板を擡し、漆書に似せて曰く、城郭是、人民非、三百甲子一來歸、我是蘇公、彈我何爲」とある。

【題義】賀監は、即ち賀知章で、その四明に歸臥せしことは、もとより著名な事實である。冊府元龜に「賀知章、祕書監となり、銀青光祿大夫を授けらる。天寶三載、老疾に因つて、恍惚醒めず、洞天三清の上に神游するが若く、數日にして方に覺め、遂に入道に志あり、乃ち上疏し、度して道士となりて歸り、本郷の宅を捨てて觀と爲さむことを請ふ。玄宗、これを許し、仍つて、其子典を設郎に

拜し、曾を會稽郡司馬となして侍養せしめ、御製の詩、以て行を贈り、皇太子以下、咸な就いて別を執る。御製の詩并に序に云ふ、
天寶三年、太子賓客賀知章、鑒止足之分、抗歸老之疏、解組辭榮、志期入道、朕以下其夙有微尚、年在遲暮、用循挂冠之事、俾遂赤松之游、正月五日、將歸會稽、遂餞東路、乃命六卿庶尹大夫、供帳青門、寵行邁也、豈惟崇德尚齒、抑亦勵俗勸人、無令二疏獨光漢冊、乃賦詩贈行云、

遺榮期入道、辭老竟抽簪、豈不惜賢達、其如高尚心、環中得祕要、方外散幽襟、獨有青門餞、羣英悵別深、又云ふ、

筵開百壺餞、詔許三疏歸、仙記題金錄、朝章換羽衣、悄然承容藻、行路滿光輝、
それから、詩紀載に據ると「知章の越に歸るや、詔して、東門外に供帳せしめ、百僚、長樂坡に祖餞す。李適より以下、詩を作つて之を送る」とあつて、今詩の存するもの三十七首、李白の此詩も其一である。應制は、天子の詔を承けること。

【詩意】賀老は、恩榮ある俸祿を辭し、朝衣を脱いで、初始潔清の服を著けやうと願ふこと、すでに久しく、又かつて長生の仙術に心を寄せ、これに因つて、浮世の塵機を斷つことが出来ると言つて居

た。かくて、今回愈よ官を辭して、その故郷なる會稽の四明に歸るといふことであるから、やがて、長生の秘訣を茅盈から傳授されるであらうし、天子の恩澤は、波の溶溶たるが如く、賀老は洞庭を隔てて容易に其郷に歸られる。仙人の居る十二の瑤臺は、霧を含んで、星辰爛爛、その周圍に照り輝き、海上の仙山は、空に浮ぶが如く、島嶼らしい影が、かすかに見える。賀老も、仙術を學んだ上は、日夕こんな處を飄遊するであらう。しかし、崑崙の珠樹に棲まむと欲する鶴は、何時又帝城に向つて飛び歸るか、賀老は、すでに天子の殊遇を受けたことであるから、仙術成就の後には、是非一度は御禮の爲に、一寸でも長安に顔出しするが善からうと思はれる。

【餘論】王翼雲の評に「前解は、賀監が郷に歸らむとし、詔して之を許せしより、その祿を辭して告歸するの由を寫し、後解は、その仙と成つて以後、君恩の隆重を忘るる勿からむことを冀ふ、應制體を得たり」とある。結二句、鶴は何時歸るか、大方歸るまい、これと同じく、賀老も、一たび此を去つた後は、再び歸り來ることなかるべく、これが最後の御別であるから、愈よ名殘が惜まれるといふ様な意味にも取れるが、それでは、淺近の誚を免れない。なほ翼雲は「久の字、遂の字に應ず。榮祿を辭する志、すでに久しく、今、はじめて初衣の願を遂ぐるを得たり。眞訣は、長生を學ぶの訣なり。むかし、曾て之を慕ふ、今、すでに之を茅君に得たり。恩波は、帝の恩澤なり、洞庭の字と相映帶して生巧」といつた。この詩は、純然たる七律で、李白の集中に於ては、多く見ざるところ。嚴

滄浪は「應制の體を得たり、逸蕩の人、これを爲す、亦た是れ一苦」といつたが、如何にも其通り、もし體制と格律とに拘はらず、五古でも用ひたならば、一層の佳作を爲したに相違なく、まことに遺憾の至である。

送寶司馬貶宜春

寶司馬の宜春に貶せらるるを送る

天馬白銀鞍。親承明主歡。

天馬白銀の鞍、親ら明主の歡を承く。

鬪雞金宮裏。射雁碧雲端。

雞を鬪はす金宮の裏、雁を射る碧雲の端。

堂上羅中貴。歌鐘清夜闌。

堂上には中貴を羅ね、歌鐘清夜闌なり。

何言謫南國。拂劍坐長歎。

何ぞ言はむ、南國に謫せられ、劍を拂うて坐して長歎。

趙璧爲誰點。隨珠枉被彈。

趙璧、誰が爲にか點する、隨珠、枉げて彈せらる。

聖朝多雨露。莫厭此行難。

聖朝、雨露多し、この行、難きを厭ふ莫れ。

【字解】

【一】白銀鞍 陳の後主の詩に照耀白銀鞍とある。【二】鬪雞、中貴 ともに前に見ゆ。【三】歌鐘 歌聲と之に和して扣く鐘聲の聲。【四】趙璧 史記に「趙の惠文王の時、楚の和氏の璧を得たり」とある、その詳、前に見ゆ。【五】爲誰點 陳子昂の詩に青蠅一相點、白璧遂成宛とある。【六】隨珠 搜神記に「隨侯、出でて行き、大蛇の傷を被つて中斷するを見、その靈異を疑ひ、

人をして、藥を以て之を封ぜしむ。蛇、乃ち能く去る。因つて、其處を號して斷蛇邨となす。歲餘、蛇、明珠を啣んで以て之に報ゆ。珠、徑寸に盈ち、純白にして、夜、光明あり、月の爛らすが如く、以て室を爛らすべし。故に、之を隨侯珠といひ、亦た靈蛇珠といひ、又明月珠といふ。莊子に「今且つ此に人あり、隨侯の珠を以て、千仞の雀を彈ぜば、世、必ず之を笑はむ、これ何ぞや。その用ふるところのもの重くして、要するところのもの輕ければなり」とある。

【題義】唐時の宜春郡は、即ち袁州で、江南西道に隸して、上州であつた。上州には、刺史長史の下に司馬一人あつて、從五品である。この詩は、竇某が何か罪を得て、宜春の司馬に貶せられ、愈よ赴任するに際し、慰藉の意を寓して、その行を送つたのである。

【詩意】今まで、君は、天馬に白銀の鞍を置いて、得意に乗り廻はし、しづしづと入朝して、親しく明主の歡心を承け、又雞を金宮の裏に鬪はしたり、雁を碧雲の端より射落したりして、天子の御側に奉仕し居た。それから、家に還れば、堂上に中貴人の輩を列坐せしめ、歌鐘興を添へて、清夜、すでに闌ならむとする頃に及び、まことに富貴榮華を極めて居た。しかも、料らざりき、一朝罪を得て、遠く南方の宜春に貶謫せられむとは。かくて、劍を拂うて長嘆し、まことに、感慨に堪へぬ有様である。君の才徳を以てして、今次の貶謫に遭へるは、たとへば、趙に傳へた和氏の璧が何者かに汚され、隨侯の明珠を以て、雀か何かを彈するやうなもので、まことに、不幸の至である。しかし、聖明の世には雨露多く、いづれ遠からぬ内に、一切の事が分つて、召し還されるに相違ないから、この

行の困難を厭はず、何事も運命と諦めて、兎に角、出かけたなら善からう。

【餘論】前半六句は往日の豪貴、後半六句は今日の貶謫で、結二句は慰藉の意を寓して居る。

送羽林陶將軍

羽林陶將軍を送る

將軍出使擁樓船。將軍出でて使して、樓船を擁す

江上旌旗拂紫煙。江上の旌旗、紫煙を拂ふ。

萬里橫戈探虎穴。萬里、戈を横へて、虎穴を探り、

三杯拔劍舞龍泉。三杯、劍を抜いて、龍泉を舞はしむ。

莫道詞人無膽氣。道ふ莫れ、詞人、膽氣なしと、

臨行將贈繞朝鞭。行くに臨んで將に贈らむとす繞朝の鞭。

【字解】一 樓船 水軍載する

二 拂紫煙 東都賦に羽旄掃霓旌旗拂

天とある。三 探虎穴 呂蒙の

語に「虎穴を探らざれば虎子を得ず」とあるを用ふ、詳に前に見ゆ。

四 龍泉 劍の名、すでに前に見ゆ。

五 繞朝鞭 前に宇文太守に贈る詩に繞朝策とあつたのと同じ、朝を繞つて鞭を贈るといふ。

【題義】唐書百官志に「左右羽林軍には大將軍各一人、正三品、將軍各三人、從三品、北衙の

禁兵を掌統し、左右廂の飛騎儀仗を督攝す」とある。この詩は、羽林軍に屬する將軍陶某が命を受けて、江南に使用するを送る爲に作つたのであるが、如何なる使命を帯びて行くのか、その邊の事は、一

切分らない。

【詩意】陶將軍は、今次出でて南方に使用し、樓船を従へて大江を下るとのこと、旌旗の影は、江上に簇つて、晴れた日の紫煙を拂ふばかり。かくて萬里の遠きに赴き、戈を横へて虎穴を探らむとし、三杯を傾けし後、龍泉の名劍を抜いて、起舞する。その氣概の壯烈なる、如何なる事でも成し遂げぬ筈はない。むかしから、詞人には膽氣なしといふが、決して、そんな譯ではなく、われは、君の行くに臨み、朝堂を繞つて歩みながら、馬鞭を贈り、以て此情を展べやうと思ふ。

【餘論】この詩は格別のものではなく、萬里三杯の二句は、對偶を爲しては居るが、精當ではない。唐仲言は「この篇、全く是れ律體、疑ふらくは是れ、龍泉の下に一聯を脱す」といひ、方弘靜は「この篇、當に是れ近體八句して、その五六を逸せしなるべきなり。今以て古詩となし、或は以て六句の律となす」といひ、王琦は之を斷じて「六句の近體、唐人時に之あり、六朝人に本づく、或は號して小律となす」といつた。小律は一に半律といふ。しかし、平仄の上から見ると、この詩は、王琦の云ふ様な小律ではなく、矢張、唐仲言・方弘靜等の云へるが如く、五六二句を脱したものに相違ない。

送程劉二侍郎兼獨孤判官赴安西幕府

程・劉二侍郎の獨孤判官と安西幕府に赴くを送る

安西幕府多材雄。

安西の幕府、材雄多し、

喧喧惟道三數公。

喧喧惟だ道ふ三數公。

繡衣貂裘明積雪。

繡衣貂裘、積雪よりも明かに、

飛書走檄如飄風。

書を飛ばし檄を走らすこと飄風の如し。

朝辭明主出紫宮。

朝に明主を辭して、紫宮を出で、

銀鞍送別金城空。

銀鞍、別を送つて、金城空し。

天外飛霜下葱海。

天外の飛霜、葱海に下り、

火旗雲馬生光彩。

火旗雲馬、光彩を生ず。

胡塞清塵幾日歸。

胡塞、塵を清めて、幾日か歸る、

漢家草綠遙相待。

漢家草綠にして遙に相待つ。

【六】火旗 旗の赤くして火に似たるをいふ。【七】雲馬 馬の多くして雲に似たるをいふ。

【題義】舊唐書封常清傳に「開元の末、安西四鎮節度使夫蒙靈詒判官に劉朮・獨孤峻あり」と見え居るから、劉侍御、獨孤判官は大方その人であらう。但し、程は何人だか、分らない。それから、

送程劉二侍郎兼獨孤判官赴安西幕府

【字解】【一】繡衣 漢書に「侍

御史に繡衣直指あり」と記し、顏師古の註に「衣するに繡を以てするは、これを尊重するなり」とある。【二】

飛書走檄 西京雜記に「枚臯文章敏疾」とあり、揚子法言に「軍旅の際、戎馬の間、飛書馳檄には枚臯を用ふ」とある。【三】紫宮 即ち紫微宮、天子の居るところ、すでに前に見ゆ。

【四】金城 長安城、亦た前に見ゆ。【五】葱海 通典に「安西郡、西、疎勒鎮守使の軍に至る三千里、葱嶺を去る七百里」とあり、涼州異物志に「葱嶺の水、東西に分流し、西は大

海に入り、東は河源となる」とある。

通鑑唐紀に「安西節度は、西域を撫寧し、龜茲、焉耆、于闐、疎勒の四鎮を統べ、龜茲城に治す、兵二萬四千」とあるし、冊府元龜に「周禮、六官六軍、竝に吏屬あり、大は朝廷に命せられ、次は皆自ら辟除す。春秋諸國、軍司馬尉候の職あり、しかも未だ幕府の名あらず。戰國の際、はじめ、將帥治するところを謂うて幕府と爲す。唐節度使の屬、副使一人、行軍司馬一人、判官二人、掌書記一人あり、參謀は員なし、隨軍四人、これより正に幕府の職たり、皆奏請し、出身あるの人、及び六品以下の正員官、これを爲す」とある。この詩は、侍御劉朶及び程某、判官獨孤峻の三人が、安西都護府に赴任するを送つて作つたのである。

【詩意】安西都護府は、西域一帯の地を牽制するから、その必要上、才氣雄傑の人が多いが、その中でも、喧喧として、人口に上るのは、程・劉・獨孤の三數公である。三君は、繡衣を著け、貂裘を披き、それが滿地の積雪よりも明かに、そして、書を飛ばしたり、檄を走らしたりする場合に、その疾いことは、さながら飄風の如く、まことに、天晴の人物で、これなればこそ、かの重職も、やすやすと務まる譯である。今次、三君は、朝に聖明の君に辭して、紫宮より出で、そして、其行を送る人人は、馬に銀鞍を置いて、美しき打扮、しかも、その數の多いことは、長安城が空に成るかと思ふ位。これより、行く手の路は、いとも遙にして、天外の飛霜は、葱海に下り、まことに凄寒に堪へられぬが、一行は、火のやうな赤い旗を押し立て、相從ふ人馬の多きことは、雲の如く、まことに見事であ

る。かくて、何時胡塞の塵が收まつて、目出たく歸京せらるるか、都に於ては、春回り、草再び緑にして、遙に三君の歸るのを待つて居る。

【餘論】起首四句は、三人の人物を寫し、朝辭の二句は、送別の有様、天外の二句は、途中の光景を想像し、胡塞の二句は、その歸京の早からむことを囑望したのである。

送姪良攜二妓赴會稽戲有此贈

姪良が二妓を攜へて會稽に赴くを送り、戲に此の贈あり

攜妓東山去。春光半道催。妓を攜へて東山に去れば、春光半道に催す。

遙看若桃李。雙入鏡中開。遙に看れば桃李の若く、雙つながら鏡中に入つて開く。

【字解】一 東山 一統志に「東山は、紹興府上虞縣西南四十五里に在り、晉の太傅謝安、ここに居る。今絶頂に、謝公の調馬路、白雲明月二亭の遺跡あり」と記してある。二 桃李 曹植の詩に、南國有二佳人、容華若桃李」とある。三 鏡中開 王逸少の言に「山陰道上行くは、鏡中に在つて遊ぶが如し」とあつて、すでに前に見ゆ。

【題義】李白の姪李良といふものが二妓を攜へて、會稽の方へ遊びに出かけるに就いて、送別の爲に戲に此詩を贈つたのである。

【詩意】汝の妓を攜へ行くのは、丁度古しへの謝安の東山に於けるが如くである。そして、會稽に赴く道中に於ては、春光次第に催し、まことに、善い時候で、その興も、さこそと思はれる。汝の攜へて居る二妓を遙に看れば、さながら、桃李の妍を競ふが如く、そして、鏡中を行くが如しといはれた其山水の間に於て、嫣然相竝んで開き、その風情は、又一しほであらう。

【餘論】この一首は、極めて簡單であつて、その聊か謔意を帯びた處は、戲贈だからでもあるが、亦た實に、六朝齊梁の餘習に沿うたものである。

送賀賓客歸越 賀賓客の越に歸るを送る

鏡湖流水漾清波。鏡湖の流水、清波を漾はす。

狂客歸舟逸興多。狂客の歸舟、逸興多し。

山陰道士如相見。山陰の道士、もし相見なば、

應寫黃庭換白鵝。應に黃庭を寫して白鵝に換ふべし。

ゆ。しかし、それは、黃庭經でなく、道德經だといふ説もあつて、その詳は、餘論の項に於て述べることにする。

【字解】(一)鏡湖 通典に「越

州會稽縣に鏡湖あり」と記してある。

(二)狂客 賀知章、自ら四明狂客と號す。

(三)山陰道士 王羲之が山陰道士の鶯を飼ふを見、これを得

むと欲し、仍つて、黃庭經を寫して

之に換へたので、その詳は、前に見

【題義】賀賓客は、即ち賀監で、この詩は、前に見えた送賀監歸四明の一首と略ぼ同時の作であ

る。但し、前のは應制であるし、これは個人として又別に贈つたものと見える。舊唐書に「天寶二年十月乙酉、太子賓客賀知章、度して道士となつて、郷に還らむことを請ふ。三年正月庚子、左右相以下を遣し、賀知章を長樂坡に祖別し、詩を賦して之に贈る」とあり、法書要録に「賀知章、字は維摩、會稽永興の人、太子洗馬德仁の孫。少にして文辭を以て名を知られ、草隸の書に工なり。進士に及第し、禮部侍郎、集賢學士、太子右庶子兼皇子侍讀、檢校工部侍郎に歴官し、祕書監、太子賓客、慶王侍讀に遷る。知章、性放にして善謔、晩年、尤も縦にして、復た規檢なし。年八十六、自ら四明狂客と號す。興酣なる毎に、筆を命じ、好んで大字を書し、或は三百言、或は五百言、詩筆惟だ命のみ。幾紙あるかと問ひ、十紙と報ずれば、紙盡き、語、亦た盡く。二十紙、三十紙、紙盡き、語亦た盡く。忽ち好處あれば、造化と相爭ふ、人工の到るべきところに非ざるなり。天寶二年、年老いたるを以て上表し、入道して郷里に歸らむことを請ふ。特に詔して、之を許し、重ねて入閣、儲皇以下をして、拜辭せしめ、上、親ら詩序を製し、所司をして供帳せしめ、百僚餞送し、詩を賜うて別を敘す。知章表謝するや、手詔して答へて曰く、

卿儒才舊業、德著老成、方欲乞言以光東序、而乃高踏三世表、歸心妙門、雖雅意難違、良深二
歌嘆、眷言離祖、是用贈詩、宜保松喬、慎行李也、兒子輩、常所執經、故令親下別尊師之
義、何以謝爲、

仍つて、其子典を設郎に拜し、曾子を朝散大夫本郡司馬となし、以て侍養を伸べしむ」とある。それから、通典に「皇太子賓客四人、調護侍從規諫を掌る、凡そ太子、賓客の事あらば、上齒たり、蓋し象を四皓に取り、資位閑重、その流、雜ならず」とある。

【詩意】鏡湖の水は、澄み切つて、清波を漾はして居る。今、君は其地に歸休されるといふので、舟に乗つて、湖水を渡つて行かれるが、逸興定めて多きことであらう。かくて、愈よ四明に歸著せし後、山陰道士の如きものに遇つたならば、書に堪能なる君は、古しへの王逸少を學び、黃庭の一經を寫して、道士の白鵝に換へることであらう。

【餘論】前半は四明に歸著するまでの旅興、後半は歸著せし後の事を云つたので、王逸少を以て之に比したのは、ひとしく能書の譽あるからである。それから、むかし王羲之が道士の爲に寫したのは、黃庭經だといひ、又別に道德經だといふ説もある。そして、始めて黃庭經といつたのは、李白の此詩などだといふので、大分議論がやかましく成つて居る。野客叢書に「西清詩話に曰く、太白の詩、山陰道士如相見、應下寫黃庭一換白鵝」と。晉書を按ずるに、右軍は道德經を寫して、道士の鵝に換ふ、黃庭に非ざるなり。僕、陶穀の跋せる黃庭經を觀るに曰く、山陰道士劉君、鵝羣を以て右軍に獻じ、黃庭經を寫せむことを乞ふ。これはれなりと。穀、亦た黃庭と謂ふは、太白の誤を承くるに非ざるを得むや。黃魯直の詩、爲君寫就黃庭了、不博山陰道士鵝、梅聖俞の詩、道士難換黃庭經、又曰

く、黃庭換白鵝と。皆、この謬を承く。或は謂ふ、晉史、但だ道士の鵝羣と言ふのみ、知らず、穀、何を以て、その道士劉君たるを知るや。僕、晉帖を考ふるに、獻之に劉道士鵝羣亦復歸也とあり、乃ち此に據るなからむや。米元章の書史、黃素黃庭經一卷、これ六朝人の書、陶穀跋して云ふ、山陰道士劉君、鵝羣を以て右軍に獻せむとし、黃庭經を寫せむことを乞ふ、これ即ち是れなり。晉史に載す、爲に道德經を寫さば、當に羣を擧げて相贈るべしと。李白の詩、賀監を送るに、山陰道士如相見、應下寫黃庭一換白鵝と云ふに因り、世人、遂に黃庭經を以て換鵝經と爲す、甚だ笑ふべきなり。黃伯思の東觀餘論、世、黃庭真帖を傳へて、逸少の書と爲す。僕、かつて之を考ふるに非なり。按ずるに、陶隱居眞誥翼眞檢論上清眞經始末に云ふ、晉の哀帝興寧二年、南岳魏夫人授くるところの弟子、司徒公府長史楊君、隸字を作つて寫し出し、以て護軍長史許君及の子上計掾に傳へしむ。掾、以て子黃民に付し、民、以て孔默に傳へ、後、王興先に竊に之を寫さる。はじめ、浙江を濟り、風に遇うて淪漂し、惟だ黃庭の一篇、存するを得たり、と。蓋し此經なり。僕、按ずるに、逸少は、晉の穆帝昇平五年を以て卒す。この年、歲、辛酉に在り。後二年、歲、甲子に在り、即ち哀帝の興寧二年、はじめ、黃庭を世に降す。安んぞ、逸少、豫め之を寫するを得む。又按ずるに、梁の虞翻の論書表に云ふ、山陰曇懷村の養鵝の道士、羲之に謂つて曰く、久しく、河上公の老子を寫さむと欲す、縑素早く辨ず、しかも人の能く書するなし、府君、もし能く自ら屈して、道德經兩章を寫せば、便ち羣

を合して奉ずべしと。ここに於て、羲之、便ち停まること半日、爲に寫し畢り、鵝を攜へて去ると。晉書本傳、亦た、道士が、爲に道德經を寫さば、當に羣を擧げて相贈るべきのみと云ふを著し、初めより、未だ嘗て黃庭を寫すと言はざるなり。二書を以て之を考ふれば、黃庭は逸少の書に非ざることを、疑なし。然れども、陶隱居が梁の武帝に與ふる啓に云ふ、逸少有名の蹟は、數首に過ぎず、黃庭・勸進・告誓等、猶ほ存するあるや否やを審にせず、と。蓋し、この啓は、眞詰を著す前に在り、故に未だ之を考證せざるのみ。唐の張懷瓘に至りては、書估を作つて云ふ、樂毅、黃庭、但だ幾篇を得たり、即ち國寶と爲ると。遂に誤つて逸少の書となす。李太白、これを承けて、詩を作る、山陰道士如相見、應下寫黃庭一換白鵝上と。苟くも、之に隨はむと欲するのみ、初めより未だ嘗て之を考へず。しかも、韓退之は第だ數紙尙可レ博二白鵝と云ふのみ、而して、黃庭と云はざるは、豈に其謬を覺るに非ざるか。王氏の法書苑、伯思の論、詳悉なるが若きに似たるも、予を以て之を考ふれば、その説、非なり。蓋し、黃庭經を寫して鵝に換ふると、道德經を寫して鵝に換ふると、自らはれ兩事。伯思謂ふ、黃庭の傳は、右軍死後に在りと。これ最も詳審に失するなり。道家に黃庭內景經、黃庭外景經、及び黃庭遁甲緣身經、黃庭玉軸經あり。世俗、例、稱して黃庭經となすは內景經、乃ち大道玉晨君の作るころ、扶桑大帝君、陽谷神王に命じて、魏夫人に傳へ、凡そ三十六章、即ち眞詰に言ふところのもの。外景經三篇は、乃ち老君の作るころ、即ち右軍の書するところのもの、

魏夫人の傳ふるところと初めより同じからず。予が家の舊藏、右軍書するところの外景經、石刻一卷、凡そ六十行、末に云ふ、永和十三年五月二十五日在山陰縣寫と。小歐陽集古録目と之を校するに、文忠の所藏本と同じ。すなはち、右軍の黃庭を寫す、甚だ曉然、諸公これを考ふること、未だ詳ならざるに縁つて、故に紛紜を免れざることを、かくの如し。伯思謂ふ、梁武に與ふるの啓、眞詰を著すの前に在り、と。これ又曲げて之が辯を爲すなり。予、又かつて道藏中に於て、務成子註外景經一卷を得たり。序あり、云ふ、晉有道士、好黃庭之術、意專三書寫、常求三序人、聞王右軍精於草隸、而復愛中白鵝、遂以數頭贈之、得三其妙翰、右軍逸興自縱、未レ免脱漏、但美其書二耳、と。張君房進むるところの雲笈七籤、亦た此序を載す、これ最も據と爲すなり。蓋し道德經は、是れ偶ま道士の鵝を悦び、因つて之が爲に寫す。もし、黃庭は、是れ道士その書を善くし、且つ鵝を喜ぶを聞き、故に是を以て贈となし、以て其書を求む。これは是れ兩事、頗る分明。俱に寫經を以て鵝を得るに縁つて、遂に後人をして指して一事となして、妄りに異論を起さしむ。唯だ李太白、その二事たるを知る、故にその書右軍の一篇に云ふ、右軍本清真、瀟灑出風塵、山陰過羽客、要此好鵝賓、掃素寫道德經、筆精妙入神、書罷籠鵝去、何曾別主人と。これ道德經を寫して鵝を得たるを言ふなり。送賀賓客歸越的一篇に云ふ、山陰道士如相見、應下寫黃庭一換白鵝上と。これ黃庭經を寫して、鵝を得たるを言ふなり。太白、兩詩に於て、亦た各、これを言ふ、すべて未だ嘗て誤らず、

乃ち後人自ら誤るなり、と。又程文簡の演繁露に云ふ、王羲之本傳、書を以て鵝に換ふるものは道德經なり、文士用つて黃庭となし、人皆以て誤と爲す。張彥遠の法書要録、褚遂良の右軍書目正書を載せ、第二卷に黃庭經六十行あり、山陰道士に與ふ、その時の眞蹟、故と在り、すでに以てその黃庭たること疑なきを見るべし。又武平一の徐氏法書記、親しく禁中に在つて、武后が太宗の時の法書六十餘函を曝すを見る、記憶するところのものは、扇書、樂毅、告誓、黃庭。又徐浩の古蹟記、玄宗の時、大王正書三卷、黃庭を以て第一となし、道德經を聞かず、すなはち傳の云ふところは、却つて誤れり。程、晉書誤を傳ふと云ふものは、蓋し未だ太白の詩を詳にせず、故に二事たるを知らざるなり、と。野客叢書以下述ぶるところは、此の如く、その究極、黃庭と道德とを以て二事として居るのである。そこで、王琦は説を爲し「琦、按するに、白氏六帖、右軍王羲之、かつて、山陰道士、羣鵝あるを見て、これを求む、乃ち右軍を邀へ、黃庭經を書せしめ、以て換ふといひ、遂に之を書す。太平御覽、何法盛の晉中興書に曰く、山陰に道士あり、羣鵝を養ふ、羲之意甚だ悦ぶ。道士云ふ、爲に黃庭經を寫さば、當に羣を擧げて相贈るべしと。乃ち爲に寫し訖り、鵝を籠にして去る。仙傳拾遺、山陰道士管霄霞、紅鵝一雙を籠にして羲之に遺り、黃庭經を書せむことを請ふ。太白、用ふるところ、誤記に非ざるに似たり。即ち謂ふ、仙傳拾遺、或は僞撰に出づと。白氏六帖引くところ、又何の書に本づくかを著さず、自ら當に晉書載するところを以て信と爲すべし。然れども、太平御覽、

引くところ何法盛の晉中興書は、すなはち又晉史の先鞭なり、豈に亦た信するに足らざるか。夫れ一經なり、或は以て黃庭となし、或は以て道德となす。一道士なり。或は以て劉となし、或は以て管となす。一鵝なり、或は以て羣を擧ぐとなし、或は以て一雙となす。蓋し謂はゆる傳聞異辭の故、一事兩傳の者を還考するに、載籍もとより多く有るなり。乃ち其一説を取つて以て其餘を警り、或は以て太白の誤となし、或は以て晉書の誤となし、或は以て右軍換鵝、もと二事ありとなし。或は以て右軍初めより未だ嘗て黃庭經を書せずとなす、皆これを執に失す。又洪容齋の四筆に謂ふ、太白、眼、四海に高く、口を衝いて章を成す、必ず規規然として、晉史を檢閲し、逸少の傳を見て、然る後に筆を落さず、正に誤つて道德を以て黃庭と爲さしむるも、理に於て正に自ら害なし。夫れ詩の美劣、原と用事の誤と否とに關せず、と。然れども、白璧の微瑕、後人の指摘を受けざる能はず、太白の此詩の若きは、もとより未だ嘗て瑕あらざるものなり、故に昔人の論を歴引して之を辯晰し、且つ古しへを考ふるもの易からざるを見はすなり」といつて居る。

送張遙之壽陽幕府

張遙の壽陽幕府に之くを送る

壽陽信天險。天險橫荆關。

壽陽は信に天險、天險、荆關に横ふ。

苻堅百萬衆。遙阻八公山。

苻堅百萬の衆、遙に八公山を阻つ。

送 送張遙之壽陽幕府

不假築長城。大賢在其間。

長城を築くを假らず、大賢その間に在り。

戰夫若熊虎。破敵有餘閒。

戰夫、熊虎の若く、敵を破つて餘閒あり。

張子勇且英。少輕衛霍孱。

張子、勇にして且つ英、少にして輕んず衛霍の孱なるを。

投軀紫髯將。千里望風顏。

軀を投ず紫髯の將、千里、風顏を望む。

勗爾效才略。功成衣錦還。

爾を勗む、才略を效し、功成らば、錦を衣て還れ。

【字解】【一】壽陽 太平寰宇記に「壽陽城は、淝水に臨み、北に八公山あり、山北は即ち淮水、東晉より今に至るまで、常に要害の地たり」とある。

【二】苻堅百萬衆 十六國春秋に「秦、兵を遣し、道を分つて晉に寇す。秦王苻堅、遂に長安の成卒六十餘萬、騎二十七萬を發す。晉、謝石を以て征討大都督となし、謝玄を前鋒都督となし、衆八萬を督して之を拒がしむ。劉牢之、精兵五千を帥ゐて、洛澗に趨き、直に水を渡り、秦の前鋒梁成を撃つて之を斬る。石等、水陸繼いで進む。堅、壽陽城に登つて望見するに、晉兵の部陣嚴整なり。又八公山の草木を望見して、晉兵となし、惘然として懼るる色あり。秦兵、淝水に逼つて陣す。玄、人を以て謂はしめて曰く、陣を移して小しく卻き、我が兵を以て渡るを得せしめ、以て勝負を決せば可ならむか。と。堅、晉兵に聽るし、半ば渡るとき、これを覺めむと欲し、兵を麾いて却がしむ。秦兵、退いて、復た止むべからず。朱序、陣後に在つて、呼んで曰く、秦兵敗る、と。遂に潰ゆ。玄等、勝に乗じて追撃す。秦兵大に敗れ、走るものは、風聲鶴唳を聞いて皆以て晉兵至るとなす。堅、狼狽して長安に歸る」とある。

【三】八公山 江南通志に「八公山は、壽州城北五里、淝水の北、淮水の南に在り、漢の淮南王安、その賓客八公と俱に此山に登つて仙を學ぶ。今山に淮南王廟あり、安及び八士の像を圖す。山、八公を以て名づくるは、蓋し此に本づく」とある。

【四】熊虎 三國志に「劉備、梟雄の姿を以て、關羽・張飛・熊虎の將あり」とあり、江表傳に「戰つて熊虎の如く、軀命を惜まず」とある。蓋し牧誓の如く虎如、熊如、熊如、熊如の義に本づく。

【五】孱 懦弱なること。【六】紫髯將 孫權をいふ、前に見ゆ。【七】衣錦 南史に「柳慶遠、出でて雍州刺史となる。帝、新亭に饒し謂つて曰く、卿、錦を衣て郷に還る、朕西顧の憂なし」とある。

【題義】唐書地理志に「淮南道に壽州あり、壽春郡中都督府、本と淮南郡、天寶元年、名を更む」とある。王琦の説に「按ずるに、壽春の名は、本と戰國よりす。史記楚世家、考烈王、都を壽春に徙す。正義に曰く、壽春は南壽州壽春縣に在りと。是れなり。壽陽の名は、東晉より起る。通典、東晉、鄭皇后、諱を以て、壽春を改めて壽陽といひ、宜春を富陽といひ、富春を富陽といひ、凡そ春と名づくるものは、悉く之を改む。唐時、壽春と名づけ、太白壽陽を用ふるは、蓋し舊名を襲用するのみ」といつた。それから、幕府は、史記索隱に「凡そ將軍、これを幕府と謂ふは、蓋し兵門合せて帷帳を施す、故に幕府と稱す。崔浩曰く、古しへ出征して將帥たり、軍、還れば罷む、理、常處なし、幕を以て府署となす、故に幕府といふ」とある。すると、この詩は、張遙といふものが、壽春に駐在する將軍の幕下に身を投せるが爲に、はるばる壽春に出かけるに就いて、これを送る爲に作つたのである。

【詩意】壽春は天險で、南方楚地の關門として横はつて居る。むかし、苻堅は、百萬の衆を率ゐて、江南を擧げむとし、遙に八公山を隔てて、ここに陣取つた。その勢は、まことに凄じい位であつたが、東晉の方には、長城を築くまでもなく、幸にも、謝玄・謝石の如き大賢が其間に居り、麾下の戰

士は、その勇悍なること、熊の如く、虎の如く、見事に敵を破り、しかも餘裕綽綽として居た。ここに、張遙は、勇銳英俊、少にして衛青・霍去病の如き古しへの將軍をさへ、孱弱な者として之を輕んずる位、かくて、今回、孫權に比すべき名將の幕下に身を投じ、千里の遠きを馳せて、態態これに逢ひに行くといふので、汝に勸めるは他に非ず、一たび、幕客となりし後は、十分に才略を致し、やがて、功成りし後は、錦を衣て故郷に歸れといふことである。

【餘論】前八句は壽春の故事、後六句は送別の正意で、兩者の關係は、自然緊密である。

送裴十八圖南歸嵩山 二首 裴十八圖南の嵩山に歸るを送る 二首

何處可爲別。長安青綺門。 何の處か別を爲すべき、長安の青綺門。

胡姬招素手。延客醉金樽。 胡姬、素手を招き、客を延いて金樽に醉ふ。

臨當上馬時。我獨與君言。 當に馬に上るべき時に臨んで、我獨り君と言ふ。

風吹芳蘭折。日沒鳥雀喧。 風吹いて芳蘭折れ、日沒して鳥雀喧し。

舉手指飛鴻。此情難具論。 手を舉げて飛鴻を指し、この情、具に論じ難し。

同歸無早晚。潁水有清源。 同じく歸つて早晚なし、潁水に清源あり。

【字解】一、青綺門 三輔黃圖に「長安城の東出南頭の第一門を霸城門といふ、民、門色の青きを見、名づけて青城門といふ」とあり、廟記に「霸城門は、亦た青綺門といふ」とあり、洞冥記に「青雀あり、霸城門に羣がり飛ぶ、乃ち改めて青雀門となし、乃ち更に修飾し、木を刻して綺櫺となす、雀去る、因つて青綺門と名づく」とある。二、舉手指飛鴻 晉書に「郭瑀、臨松、菴谷に隱る。張天錫、使者孟公明をして、節を持し、蒲車支纒を以て禮を備へて、之を徵さしむ。公明、山に至る。瑀、翔鴻を指し以て之に示して曰く、この鳥、安んぞ籠すべけむや」と。遂に深く逃れて跡を絶つ」とある。三、潁水 嵩山の少室より出づ、すでに前に見ゆ。

【題義】裴十八の十八は排行、圖南は其名。嵩山は、地理今釋に「嵩山は、河南府登封縣の北十里に在り、西、洛陽縣に接し、北、鞏縣に接し、東、開封府密縣の界に接し、綿互一百五十里」とある。この詩は、裴圖南といふものの嵩山に歸るを送つて作つたのである。

【詩意】君の遠行に就いて、何處で別を爲すべきか、長安城東の青綺門は、路の都合もあつて、一番善からう。仍つて、この門頭に於て餞筵を催せば、胡姬は素手を舉げて招き、客を延いて、金樽の酒に酔はしめる。やがて、君が愈よ發程せむとして、馬に上る時に當り、われ獨り留まつて、君と話をした。今しも、風は颯颯と吹いて、芳蘭は、むごくも折れ、日は沒して、つまらぬ鳥雀の聲が喧しい。これを譬ふれば、君子が抑へられて、その志を伸ばすを得ず、又君暗くして、讒言が競ひ起る様な有様である。かくて、手を舉げて、空を飛ぶ雁を指し、この鳥は、とても籠に入れることは出来ない。自分も其通りだといつて、歸隱の本志をほのめかしたが、その眞情は、詳しく論ずることは出

來ない。嵩山は、潁水の出る處、その源は極めて清い、われも、いづれは、其處に住む積りであるから、君は先へ往つて、待つて居て貰ひたい。

【餘論】起四句は送別の状態、その下に臨上馬時二句を挿入し、あとは送別の辭。風吹日没の二句は、比の體で、刻下の時勢を述べ、歸隱の止むを得ざるに道及し、結二句は、自分も、どうせ同じ處に往くといふ意を逗露したので、層層遞下して、絶えて、平板の弊が無い。

君思潁水綠。忽復歸嵩岑。

君は潁水の綠なるを思ひ、忽ち復た嵩岑に歸る。

歸時莫洗耳。爲我洗其心。

歸る時、耳を洗ふ莫れ、我が爲に、其心を洗へ。

洗心得眞情。洗耳徒買名。

心を洗はば、眞情を得む、耳を洗はば、徒に名を買はむ。

謝公終一起。相與濟蒼生。

謝公、終に一起、相與に蒼生を濟はむ。

【字解】一 洗耳 高士傳に「許由は、堯、召して九州の長となす、由、これを聞くを欲せず、耳を潁濱に洗ふ」とあつて、その詳は前に見ゆ。二 謝公終一起 世説に「謝公、屢ば朝旨に違ひ、東山に高臥す。諸人毎に相與に言ふ、安石、肯て出でずんば蒼生を如何せむ」とある。

【詩意】君は、潁川の流の綠に澄めるを懐かしく思ひ、今日、忽然として、嵩山に歸られる。しか

し、嵩山に歸りし後、許由の眞似をして、浮世の事は聞きたくない、汚されるのは厭だといつて、耳を洗ふことは爲さず、それよりも、我が爲に、その心を洗ふが善い。心を洗へば、愈よ萬物の眞情を悟るやうに成るが、耳を洗へば、却つて、虚名を買ふに過ぎぬ。かくて、謝安石が東山に高臥して居たものの、やがて一たび起つて、蒼生を濟つたやうに、時來れば、その隱棲を出で、われと共に天下を救濟しやうではないか。

【餘論】前首の終なる潁水有三清源の句を承けて、構想したので、中間四句は、能く事理を得、まことに名句である。それから、結二句は、全然、隱者を以て終らず、天下の事を忘れぬことを囑望したので、その言ふところも、極めて切實、これを見ても、太白が決して狂士で無いといふことが分る。嚴滄浪は「この格、常山の蛇の如く、首尾、中と皆相應ず」といひ、乾隆御批には「沈刻の意、快語を以て之を出す、聞く者をして、驚竦せしむべし」とある。

同王昌齡送族弟襄歸桂陽 二首

王昌齡と同じく、族弟襄の桂陽に歸るを送る 二首

秦地見碧草。楚謠對清樽。

秦地、碧草を見、楚謠、清樽に對す。

把酒爾何思。鷓鴣啼南園。

酒を把つて、爾、何をか思ふ、鷓鴣、南園に啼く。

送 同王昌齡送族弟襄歸桂陽

余欲羅浮隱。猶懷明主恩。余は、羅浮に隠れむと欲し、猶ほ明主の恩を懷ふ。

躑躅紫宮戀。孤負滄洲言。紫宮の戀に躑躅し、滄洲の言に孤負す。

終然無心雲。海上同飛翻。終然たる無心の雲、海上同じく飛翻す。

相期乃不淺。幽桂有芳根。相期する乃ち淺からず、幽桂に芳根あり。

【字解】 一 羅浮 洞天福地記に「羅浮洞は、周圍五百里、朱明耀眞の天と名づく。惠州博羅縣南八十里に在り」といひ、太平寰宇記に「羅浮山は、本と是れ蓬萊の一峰、浮んで海中に在り、羅山と合し、因つて、之に名づく、山に洞あり、句曲に通じ、又瑤瑤室七十二所あり」といひ、斐淵の廣州記に「羅浮の二山、天に懸る、惟だ石樓の一路登るべし」とある。二 躑躅 增韻に「猶豫なり」とある。三 紫宮 天子の居、前に見ゆ。四 幽桂有芳根 吳均の詩に桂樹多芳根とあるを用ひたが、その意は、却つて、淮南招隱士の桂樹叢生山之幽といふを用ひたのである。

【題義】 桂陽は郡名、即ち彬州で、江南西道に隸して居た。この詩は、王昌齡と共に、族弟李襄といふものの桂陽に歸るを送つて作つたのである。但し、一本には「王昌齡・崔國輔と同じく、李舟の彬州に歸るを送る」に作つてある。

【詩意】 秦地なる、この長安に於て、碧草の萌え出づる春の頃、楚地の歌を唱へて、清樽に對し、ここに、汝の行を送るのである。汝は酒を把り、愴然として居るが、そは何を思つて居るのであるか。多分、鷓鴣の南園に啼く聲を聞き、前程の愈よ遠きに心を傷ましめて居るのであらう。われも、羅浮

山に隠れやうと思ふが、明主の恩を懷へば、むやみに此を立ち去ることも出来ず、紫宮を戀ふる忠誠の念に動かされて、頻りに躑躅し、そして、滄洲に仙を尋ねるといふ平生の言に孤負して居る。しかし、われは、無心の雲の如く、いつかは、ここを立ち去つて、汝と共に海上に飛び翻るべく、爾我二人、心に期すること淺からず、たとへば、幽桂に芳根があつて、山中に叢生するが如く、物外に逍遙するのが、本來の志である。

【餘論】 起首四句は送別の正意、以下八句は、自分もいづれ隱遯するから、必ず待つて居て呉れるといふので、更に一步を拓開し、熟套を避け得た處が面白い。嚴滄浪は「許多の轉折、却つて腕力を費さず」といひ、蕭士贇は「細に此詩を味へば、一飯君を忘れざるものに非ざるか、議者、何を厚く太白の杜に如かざるを誣ふるや」といひ、猶ほ「明主恩」の一句を本にして、大に李白を辯護して居る。

爾家何在瀟湘川。爾の家、何くにか在る、瀟湘の川。

青莎白石長江邊。青莎白石、長江の邊。

昨夢江花照江日。昨は夢む、江花の江日を照らすを。

幾枝正發東窓前。幾枝、正に發く東窓の前。

送 同王昌齡送族弟襄歸桂陽

【字解】 一 瀟湘 二水の名、

王琦の說に「湖よりして南、二水經るところの地、甚だ廣く、長沙湘陰縣に至り、はじめて青草湖に達し、洞庭に注ぎ、岷江の流と合す。故に湖の北は、漢沔これ主、これを瀟湘

覺來欲往心悠然。 覺め來つて、往かむと欲すれば、心悠然。

魂隨越鳥飛南天。 魂は越鳥に隨つて、南天に飛ぶ。

秦雲連山海相接。 秦雲、山に連つて、海相接し、

桂水橫煙不可涉。 桂水、煙を横へて、涉るべからず。

送君此去令人愁。 君が此に去るを送れば、人を愁へしむ。

風帆茫茫隔河洲。 風帆茫茫、河洲を隔つ。

春潭瓊草綠可折。 春潭の瓊草、綠折るべくんば、

西寄長安明月樓。 西に寄せよ、長安の明月樓。

すなり」といひ、應劭は「桂水は桂陽に出で、東北流して湘に入る」といつた。王琦の説に「按ずるに、桂水は彬州桂東縣の小桂山に出で、下流は、來水に合す、來水は衡州府城の北に至り、はじめて瀟湘と合す」とある。

【詩意】 汝の家は、何處かといへば、桂陽、即ち瀟湘二水の流域附近であつて、長江の邊には、青莎

白石が相映じて、一段の趣がある。昨日、君は夢を見たが、江邊の花は、今が盛りで、江天の日に照

らされ、そして、おのが故居に於ても、東窓の前なる幾枝が丁度咲き初めたとのことであつた。そこ

で、君は夢が覺めると、故郷へ歸らうと思ひ、しかも、心悠然として取り付くすべもなく、はては、

神魂が越鳥に隨ひ、飄飄然として南天に飛び行く想がした。顧みれば、秦地の雲は山に連り、そして

山脈の盡くる處は海、桂水は山の彼方に在つて、一片の煙が其上に横はり、決して、徒渉することは

出來ず、旅行するのも、なかなか困難である。君の今此地を去るを送れば、別離の愁、自ら堪へず、

君の乗る船は、帆に風を受け、杳茫として、河洲に隔てられ、やがて見えなく成つて仕舞ふ。君、す

で桂陽に歸りし後、潭上に萌え出でし瓊草の綠なるを見、もし折るべくんば、忘れずに之を折り、

西に向つて、わが今居る長安なる月下の樓に寄せ、せめては、わが相思の情を慰めて呉れる。

【餘論】 起四句は故國の春色を描き、次の四句は桂陽に歸る道途の困難なるを述べ、終の四句は送別

の正意、就中、結二句は仙音縹緲として、人を賺し去るの妙がある。桂臨川が「情、至惘に出づ、詞

調警絶」といつた通り、かういふ詩になると、さすがに作者の擅場で、容易に他の模倣を許さぬ妙處

がある。

送外甥鄭灌從軍 三首 外甥鄭灌の從軍するを送る 三首

六博爭雄好彩來。 六博、雄を争つて、好彩來れば、

金盤一擲萬人開。 金盤一擲、萬人開く。

【字解】 〔一〕 六博、演繁露に、

「博、六子を用ふ、楚辭これを六博

送 送外甥鄭灌從軍

丈夫賭命報天子。丈夫、命を賭して、天子に報ず、
當斬胡頭衣錦回。當に胡頭を斬り、錦を衣て回るべし。

し、そして、うまく申れば勝つので、仍つて、その出た目を彩と名づけた。【三】金盤一擲 宋書に「劉毅、家に儋石の儲なきも、樽蒲一擲百萬」とあるを翻用す。

賽の目の文を指したので、黒白の色を以て別ち、雉犢の物を以て別つば、皆彩である。何の色といつて投げ出

【題義】外甥といへば、母方の甥で、つまり母の姉妹の子である。この詩は、外甥の一人鄭灌といふものの從軍を送つて作つたのであるが、鄭灌の名字閱歴等は、一切分らぬ。

【詩意】たとへば、六博の戲を爲して雄を争ふが如く、幸にして、よき賽の目が出て來れば、金盤一擲、忽ち大まうけをなし、萬人を驚かすことも出来る。今、汝は從軍することであるが、天晴、丈夫たるもの、その身命を賭して、天子に報ゆることを心がくべく、さうすれば、うまい場合にめぐり合ひ、胡人の頭を斬つて、大功を立て、やがて、錦衣を著て凱旋することも出来るので、必ずかくあれかしと翹望する次第である。

【餘論】前半は博戲を以て功名に比し、後半は、賭命の賭の字を以て之を受け、そして、縁起よく祝つたのである。

丈八蛇矛出隴西。

丈八の蛇矛、隴西より出で、

【字解】【二】丈八蛇矛 十六國春秋に「隴上の人、壯士の歌を作つて曰く、丈八蛇矛左右盤、十盪十決無當前」とある。【三】弧 説文に木弓とある。【三】白猿啼 淮南子に「楚王、白猿あり、王、自ら之を射

彎弧拂箭白猿啼。

弧を彎き、箭を拂へば、白猿啼く。

破胡必用龍韜策。

胡を破る、必ず龍韜の策を用ひよ。

積甲應將熊耳齊。

積甲、應に熊耳と齊しかるべし。

「楚王、白猿あり、王、自ら之を射れば、矢を搏つて照ぶ。養由基をして之を射らしむ、はじめ、弓を調へ、矢を矯む、未だ發せざるに、猿、柱を擁して號ぶ」とある。

【四】龍韜 太公六韜の篇名。【五】積甲 後漢書に「赤眉、忽ち大軍に遇ひ、驚震、爲すところを知らず、乃ち劉恭を遣して降を乞ふ、兵甲を宜陽城西に積んで、熊耳山と齊し」とある。

【詩意】汝は、一丈八尺もある大きな蛇矛を攜へて、しづしづと隴西から出て來たので、さながら、音に聞く古しへの壯士の通り。そして、弓を引き搾り、箭を拂つて番ふと、むかしの養由基を其儘に、白猿は驚いて泣き叫ぶ。汝の材武、かくの如く、今次從軍をすれば、必ず大功を立てるに相違ない。但し、胡虜を破るには、太公が龍韜に論じた其謀を用ひて、正堂堂の陣を張るべく、かくて、胡虜が降服する時は、丁度、赤眉が兵甲を釋き、これを積み上げたら、熊耳山と齊しかつたといふやうに定めて目ざましいことであらう。

【餘論】この首は、毎句に故事を用ひて居るが、善く融化して、少しも、わざとらしい處の無いのは、

まことに手際である。

月蝕西方破敵時。月蝕、西方、敵を破るの時、「べからず。」

及瓜歸日未應遲。瓜に及んで、歸る日、未だ應に遅かる。

斬胡血變黃河水。胡を斬れば、血は變ず黃河の水、

梟首當懸白鵠旗。首を梟す、當に懸くべし白鵠の旗。

【三】懸白鵠旗。史記に「武王、黃鉞を以て、紂の頭を斬り、太白の旗に懸く」とある。白鵠旗は未詳、或は白鵠の羽を飾にした旗かも知れない。

【詩意】月蝕に際し、西方の敵を破ることは、期して待つべく、もと瓜期に及んで歸るといふ規定で、その日も、追迫迫つて來た。されば、速に兵を進めて胡虜を斬り、その血をして、黃河の水を紅に變せしむべく、やがて、首を梟して白鵠旗に懸けたらば善からう。

【餘論】この詩も、前首と同じく、殆んど毎句故事を用ひてある。それから、三首を通覽すると、その次第、秩然として、毫も紊れず、まことに、連作の體を得たものである。

【字解】【一】及瓜歸日。左傳に

「齊侯、連稱管至父をして、葵邱を成せしめ、瓜時にして往く。曰く、

瓜に及んで歸らむ」とある。【三】

梟首。漢書顏師古の註に「梟とは、首を木上に懸くるなり」とある。

送于十八應四子舉落第還嵩山

于十八の四子舉に應じ、落第して嵩山に還るを送る

吾祖吹橐籥。天人信森羅。吾が祖、橐籥を吹き、天人、信に森羅。

歸根復太素。羣動熙元和。歸根、太素に復し、羣動、元和を熙らぐ。

炎炎四真人。摛辯若濤波。炎炎たる四真人、摛辯、濤波の若し。

交流無時寂。楊墨日成科。交流、時として寂なるはなく、楊墨日に科を成す。

夫子聞洛誦。誇才才故多。夫子、洛誦に聞く、才を誇る、才もと多し。

爲金好踊躍。久客方蹉跎。金と爲つて、好んで踊躍、久客方に蹉跎たり。

道可束賣之。五寶溢山河。道は束ねて之を賣るべく、五寶、山河に溢る。

勸君還嵩丘。開酌眄庭柯。君に勸む、嵩丘に還り、開酌、庭柯を眄みよ。

三花如未落。乘興一來過。三花もし未だ落ちざらば、興に乗じて一たび來り過ぎよ。

【字解】【一】吾祖。老子を指す。李白は、唐室と同姓で、老子の後と稱して居た。【二】橐籥。老子に「天地の間、其れ猶ほ橐籥のごときか」とあつて、橐籥は、ふいご。【三】歸根。老子に「萬物芸芸、各その根に歸る、根に歸るを靜といふ」とある。【四】

太素。列子に「太素は質の始なり」とあり、白虎通に「はじめて起る先づ太初あり、後に太始あり、形兆すでに成る、名づけて太素

送 送于十八應四子舉落第還嵩山

といふ、混沌相連る、これを視れども見えず、これを聴けども聞こえず」とあり、潘夫論に「太素の時、元氣窮冥、形兆未だ成らず」とあり、淮南子に「その聰明を假せ、その太素を抱く」とある。【五】照、やはらぐ。【六】真人、舊唐書に「天寶元年、莊子は號して南華真人となし、文子は號して通元真人となし、列子は號して冲虚真人となし、庚桑子は號して洞虚真人となす。その四子著すところの書、改めて真經となす」とある。【七】摘辯、班固の答賓戲に「辯を馳すること濤波の如く、藻を擲すること春華の如し」とあつて、顔師古の註に「大波を濤といふ、擲は布くなり」とある。【八】洛誦、莊子に「副墨の子、これを洛誦の孫に聞く」とあつて、陸德明の音義に「副墨、以て元墨に副貳たるべきなり。洛誦、誦は通、苞落して通ぜざるなきなり。崔云ふ、皆古人の姓名、或は寓言のみ、その人なきなり」とある。【九】爲金好踊躍、莊子に「大冶、金を鑄る、金、踴躍して曰く、我必ず鑄錐と爲らむと。大冶必ず以て不祥の金と爲さむ」とある。【一〇】五寶、不詳。【一一】開酌、酌庭柯、歸去來辭に「引壺觴以自酌、酌庭柯以怡顏」とあつて、呂向の註に「柯は樹枝なり」とある。【一二】三花、初學記に「漢の世、道士あり、外國より貝多子を將て來り、嵩高西脚の下に於て、これを種う、四樹あり、棠木と異なるあり、一年三たび花さき、白色香異」とある。

【題義】于十八の十八は例の排行で、その名字は分らない。四子とは、通典に「開元二十九年、はじめて、京師に於て崇玄館を置き、諸州に道學生徒を置くこと差あり。これを道舉といふ。舉送課試、明經と等し。京師は各百人、諸州は常員なし、老莊文列を習ふ、これを四子といふ、蔭第、國子監と同じ」とあり、唐會要に「開元二十九年正月十五日、玄宗皇帝の廟に於て、崇玄學を置き、道德經・莊子・文子・列子を習はしめ、習成の後を待ち、毎年、舉人の例に隨ひ、名を送つて省に至り、明經に准じて考試し、通するものは、及第人に准じて處分す」とある。從前文官試験を受けるには、儒學のみに限つて居たが、玄宗の中年、大に道學を標榜し、これを以て試験を受けることが出来るやうにし

たので、その學校の主要なるものが崇玄館、そこでは、専ら四子を講習したのである。この詩は、于十八といふものが、崇玄館に入る積りで、其舉に應じて入學試験を受けた處が、不幸にして落第し、仍つて、嵩山に歸らむとするに就いて、これを送る爲に作つたのである。

【詩意】わが祖の老子は、天地の間、猶ほ橐籥の如きかと云つたが、まことに其通りで、そのふいごから吹き出されて、上、天に屬し、下、人に屬するものが、森然として、宇宙の間に羅列して居る。かくて、一たび、其根に歸れば、形兆わづかに成りし、謂はゆる太素の状態に復するので、萬種の生物は、元氣の清和を受けて、和らいで居る。これが即ち理想至治の状態である。ここに、莊文列庚の四真人は、老子の統を傳へ、雄辯を揮ふこと、さながら波濤の如く、やがて、その會流した揚句には、時として、寂然たることなく、愈よ以てやかましく騒ぎ立てる様なり、はては、流れて楊墨の一派を生じ、それが、日日窪みを成して、萬派の水を受けるやうに成つた。今、君は、洛誦から道を聞いたといつて、才を誇つて居る。なる程、その才は、もとより多いに相違ないが、それでは、根に歸るといふ根本主義に違背したものである。又金が踊躍して、われは莫耶に成りたいといつた様に、頻りに偉がつて騒ぎ出すのは、世に處する道を得たものではないので、久客として他郷に居り、夙志蹉跎したのも、尤も千萬な事である。つまり、君が今回落第した理由は、あまり偉らく見せかけて、是非とも、試験を通過したいといつてあせつたからである。元來、道てふものは、表面に露出せぬ處に價値

があるので、あまりけばけばしい様な道は、束ねて之を賣るべく、かくて、五寶が山河に溢る様な観を爲すべきも、決して、褒めたことではない。君が既に落第した上に、ここに留まつて居ても仕方がないから、その故郷なる嵩山に歸り、酒を酌みつつ、庭の木でも眺めて心を落ちつけ、ゆつくりと修養するが善い。たとへば、貝多羅葉が一年に三度花さいて、なかなか落ちないと同じく、この試験も唯だ一度だけではなく、なほ明年も、明後年もあることであるから、興に乗じて、試験を受ける爲に、今一度、上京したら善からう。

【餘論】起八句は、老子の學が根本になつて、諸種の學校を生じ、従つて、その研究も必要で、これを以て士を取ることも、至極尤もだといふ意。夫子問洛誦の六句は、今次、試験に落第した理由を揣摩し、勸君還嵩丘の四句は、その歸郷を送り、兼ねて、慰藉の意を寓して、他日に囑望したのである。

送別

送別

尋陽五溪水。

尋陽五溪の水、

沿洄直入巫山裏。

沿洄直に入る巫山の裏。

【字解】一五溪 蕭士贊の解に「巫山は、夔峽二州の間に介し、峽に青溪、赤溪、綠蘿溪、滄茫溪、姜詩溪あり。峽の五溪たり。蓋し、別

勝境由來人共傳。

勝境、由來、人共に傳ふ、

君到南中自稱美。

君、南中に到つて自ら美と稱す。

送君別有八月秋。

君を送る、別に八月の秋あり、

颯颯蘆花復益愁。

颯颯蘆花、復た益す愁ふ。

雲帆望遠不相見。

雲帆遠きを望んで、相見えす、

日暮長江空自流。

日暮、長江、空しく自ら流る。

五溪、當に尋陽に在るべし。然れども、考據するところなし。按ずるに、一統志に、五溪水は、池州青陽縣西二十里に在り、源は九華山に出づ。五溪は、龍溪、池溪、漂溪、雙溪、瀾溪、合流して、北、大江に入る。尋陽、或は是れ青陽の誤なるも、未だ知るべからず。楊氏は、武陵の五溪を以て、蕭氏は巫峽の五溪を以て之に當つ。恐らくは、皆是に非ず」といつた。要するに、尋陽五溪は、遂に其解を得ないので、ここでは、しばらく、文字の通りに解釋して置く。【三】沿洄 沿は水に順つて下る、洄は水に逆つて上る、つまり水を上下すること。【三】長江空自流 王勃の詩に檻外長江空自流とある。

【題義】唯だ送別とあるだけで、誰が何處に往くのを送つたのか、よくは分らぬ。

【詩意】一たび尋陽を發し、五溪の水に沿ひ、その流を上下して、やがて巫峽の中に入る。その巫峽は、音に聞こえた勝境で、むかしから、人人は之を傳へて居るので、君は南中に到り、これを見ると、定めて絶美だといつて、賞嘆することであらう。今や、君を送る時、恰も八月で、秋の最中、たださ

へ物淋しいのに、一しほ蕭寂の想がする。眺めやれば、兩岸の蘆花は、風に吹かれ、颯颯として聲を爲し、はては、雪の如く散り亂れ、益す離愁を惹く。君の乗つて居る舟は遠く雲か水かの間に入り、いくら望んでも、復た見えす、ここに佇立して居ると、日は暮れかかり、長江の水、空しく自ら流れ、しかも、わが愁は、渺渺として盡くことはない。

【餘論】前四句は、行く手なる巫峽の佳景を述べて、この行の徒爾ならざるをいひ、次の四句は、送別の正意、就中、結二句は、延佇、神に入り、かの孤帆遠影碧空盡、唯見長江天際流と極めて相類似し、人をして、魂銷の想に堪へざらしめる。もとより、格別の名作ではないが、多少の餘情を存して居る處は面白い。

送族弟綰從軍安西

族弟綰の安西に從軍するを送る

漢家兵馬乘北風。漢家の兵馬、北風に乗じ、

鼓行而西破犬戎。鼓行して西し、犬戎を破る。

爾隨漢將出門去。爾、漢將に隨つて、門を出でて去り、

剪虜若草收奇功。虜を剪ること草の若く、奇功を收む。

【字解】一 漢家 中國の義に用ふ。二 鼓行 漢書の項籍傳に

「我、兵を引いて、鼓行して西せば、必ず秦を擧げむ」とあり、顔師古の註に「鼓行とは、鼓を撃つて行き、畏懼なきなり」とある。三 犬戎

君王按劍望邊色。君王、劍を按じて、邊色を望めば、

旄頭已落胡天空。旄頭すでに落ちて、胡天空し。

匈奴繫頸數應盡。匈奴、頸を繫いで、數、應に盡すべし。

明年應入蒲萄宮。明年應に入るべし蒲萄宮。

國語に「穆王、將に犬戎を征せむとす」とあり、韋昭の註に「犬戎は西戎なり」とあり、文獻通考に「犬戎は西戎の別名、荒服に在り」とある。

【四】邊色 邊塞の景色。【五】旄頭 漢書に「昂を旄頭といふ、胡星なり」とある。【六】匈奴繫頸 賈誼の傳

に「陛下、何ぞ試に臣を以て屬國の官となし、以て匈奴を主らめし、臣の計を行はざる。請ふ、必ず單于の頸を係ぎて、その命を制せむ」とある。【七】蒲萄宮 三輔黃圖に「蒲桃宮は、上林苑西に在り、漢の哀帝の元壽三年、單于來朝、太歲厭勝の在る所なるを以て、これを舍す、即ち此宮なり」とある。蒲桃は即ち葡萄。

【題義】族弟綰、一に瑄に作る。安西は、通典に「安西都護府は、本と龜茲國なり、大唐明慶中に置く。東、焉耆に接し、西、疏勒に連り、南、吐蕃に鄰り、北、突厥を拒ぐ」とある。すると、この詩は、族弟李綰といふものが、從軍して安西都護府に赴くを送つて作つたのである。

【詩意】今や、中國の兵馬は、北風に乗じて、勢すさまじく、そして、鼓を撃ちつつ、西に向つて進出し、必ず西戎を破つて見せるといふ手筈である。汝は、中國の大將軍に從ふ爲に、門を出でて從軍し、胡虜を斬ること草を薙ぐが如く、十分に奇功を收めることが出来やう。今しも、天子は、劍に手をかけて、邊境の風色を望まれ、折しも、旄頭の星、地に落ちて、胡天寥瀾、物もなく、やがて、匈奴

奴は、珠數繫ぎに首を縛られ、あらむ限りの數を盡し、明年、これを驅り立てて蒲桃宮に入朝するだらうといつて、待つて居られる。汝等も、その積りで、一身を抛つて、奮鬪し、天子の豫期せらるるところに負かぬ様にして欲しい。

【餘論】前半四句は送別、後半は天子を借りて、破虜の功一日も早からむことを囑望したので、これ即ち之を易める所以である。

送梁公昌從信安北征

梁公昌の信安に從つて北征するを送る

入幕推英選。捐書事遠戎。幕に入つて英選を推し、書を捐つて遠戎を事とす。

高談百戰術。鬱作萬夫雄。高く百戰の術を談じ、鬱として萬夫の雄となる。

起舞蓮花劍。行歌明月宮。起つて舞はす蓮花の劍、行く歌ふ明月の宮。

將飛天地陣。兵出塞垣通。將飛んで天地陣し、兵出でて塞垣通す。

祖席留丹景。征麾拂彩虹。祖席、丹景を留め、征麾、彩虹を拂ふ。

旋應獻凱入。麟閣佇深功。旋つて、應に凱を獻じて入るべし、麟閣に深功を佇つ。

【字解】一 入幕 帷幕に參與する。二 百戰術 百戰百勝術の略。三 蓮花劍 漢書音義に「管灼曰く、古しへ、長劍の

首、玉を以て井鹿盧形を作り、上に木を刻して山形を作り、蓮花初めて生じて未だ數かざる時の如し」とあり、吳均の詩に玉鞭蓮花劍とある。【四】天地陣 六韜に「武王、太公に問うて曰く、凡そ兵を用ふる、天陣地陣を爲す、奈何。太公曰く、日月星辰、斗柄、一左一右、一向一背、これを天陣といひ、邱陵水泉、亦た前後左右の利あり、これを地陣といふ」とある。【五】塞垣 邊牆に同じ。後漢書に「秦は長城を築き、漢は塞垣を起す」とある。【六】丹景 日影。【七】征麾 麾は旌幡、指麾するに用ふ。【八】麟閣 通鑑漢紀に「甘露三年、上、戎狄賓服せしを以て、股肱の美を思ひ、乃ち其人を麒麟閣に圖畫し、その容貌に法り、その官爵姓氏を署す。霍光、張安世、韓增、趙充國、魏相、丙吉、杜延年、劉德、梁邱賀、蕭望之、蘇武、凡そ十一人、皆功德あつて、名を當世に知らる。これを以て表して、之を掲げ、明かに中興輔佐を著し、方叔召虎、仲山甫に列す」とある。【九】佇 待つ。

【題義】冊府元龜に「開元二十年正月、朔方節度、副大使禮部尚書信安郡王禕を以て河東河北兩道行軍副大總管知節度事となし、兵を率ゐて、契丹を討たしむ。戸部侍郎裴耀卿、諸副將を率ゐ、道を分ち兵を統べ、范陽の北に出で、大に兩蕃の衆を破り、その酋長を擒にす、餘黨竄して山谷に入る」とある。すると、この詩は、梁公昌といふものが、信安郡王李禕に從つて、契丹征伐に出かけるのを送る爲に作つたのである。

【詩意】君は、今回、信安郡王の幕中に入り、まことに、善く選び出されたといふ評判。かくて、書を抛つて、遠戎を征伐するを事とし、百戰百勝の術を高談し、鬱として萬夫の雄と稱せられて居る。その事なきに當りては、起つて、蓮花の名劍を持つて舞ひ、明月宮の邊に行歌し、一朝事あらば、大將に從つて、天地の陣を布き、兵を出して、塞垣の路を通せしめ、終始その雋邁の氣概を示して居る。

今日、餞別の筵は、夕日影の傾く頃にも及び、やがて、君は、旌旗を揮つて、さながら彩虹を拂ふが如く、これから愈よ乗り出すといふので、まことに美ましく、且つ勇ましい有様。天子は、諸公の大功を建つるを待つて、麒麟閣に之を圖畫しやうといふ御思召であるから、凱歌を奏して、早く歸京される様に致されたいものである。

【餘論】この一首は、純然たる五言排律で、その對仗も極めて精當で、結二句、囑望淺からず、且つ最も切實である。

送白利從金吾董將軍西征

白利の金吾董將軍に從つて西征するを送る

西羌延國討。白起佐軍威。西羌、國討を延べ、白起、軍威を佐く。

劍決浮雲氣。弓彎明月輝。劍は決す浮雲の氣、弓は彎く明月の輝。

馬行邊草綠。旌卷曙霜飛。馬行いて、邊草綠なり、旌卷いて、曙霜飛ぶ。

抗手凜相顧。寒風生鐵衣。手を抗げて、凜として相顧みれば、寒風、鐵衣に生ず。

【字解】一、西羌 後漢書に「西羌の本は、三苗より出で、姜姓の別なり。その國、南岳に近し。舜の四凶を流すに及び、これを三危に徙す。河關の西南の羌地、是れなり。賜支に濱して、河首に至る、綿地千里、南は蜀漢徼外蠻夷西北鄰善車師諸國に接す。

居るところ常なく、水草に依隨す。地に五穀少く、産牧を以て業となす」とある。しかし唐時は、概れ吐蕃、即ち今の西藏を指して、西羌といつた。二、延 遷延。三、白起 史記に「白起は、鄢の人なり、善く兵を用ひ、敵を料り、變に合し、奇を出して窮まりなく、聲、天下に震ふ」とある。四、劍決浮雲氣 莊子に「天子の劍、上は浮雲を決し、下は地紀を絶つ」とある。五、抗手 孔叢子に「子高、趙に遊ぶ。平原君の客に鄒文李節といふものあり、子高と相善し。將に魯に還りむとするに及び、諸の故人、訣れて既に畢る。文節、遂行三宿、別に臨み、文節、流涕頤に交る。子高、徒に抗手するのみ、背を分つて路に就く」とあり、文選の李善註に「抗手とは、手を舉げて拜するなり」とある。六、鐵衣 木蘭詩に朔氣傳金柝、寒光照鐵衣」とあるに本づく。

【題義】唐書百官志に「左右金吾衛上將軍各一人、大將軍各一人、將軍各二人」とある。董將軍は、名字不詳。この詩は、白利といふものが、金吾將軍董某に從つて、西羌征討に出かけるのを送つて作つたのである。

【詩意】西羌の稱ある吐蕃は、國際的征伐として、數ば兵を動かしたが、のびのびに成つて、まだ十分に片が付かない。そこで、今回、君は戎幕に參し、軍威を佐けて、愈よ出兵することに成つた。かくて、劍を揮へば、浮雲の氣を切りまくるべく、弓を引けば、明月が輝いて居ると同じである。馬の行くところには、邊地の草、なほ綠に茂り、旗を卷けば、曉天の霜の飛ぶ想がする。何は兎もあれ、沙場の物凄じき景色は、覺えず心を傷ましめるばかりで、征軍の將士輩が、凜として身ぶるひを爲し、手を舉げて相顧みつつある間に、寒風は颯として鐵衣に生ずる。願はくは、この荒寒に耐へて、長驅千里、逸早く功勳を立てて貰ひたい。

【餘論】これは五律で、中間兩聯が敘景、即ち實事である爲に、内容が充實したやうに見える。それから、白起は、同姓の故を以て點醒したので、例の慣用手段である。結末二句は、邊庭苦寒の狀を述べて、從軍者を勵め勵ましたので、嚴滄浪が「千載、生氣あり」といつたのも、主として、これが爲である。

送張秀才從軍

張秀才の從軍するを送る

六駿食猛武。恥從駑馬羣。

六駿、猛武を食ひ、駑馬の羣に從ふを恥づ。

一朝長鳴去。矯若龍行雲。

一朝長鳴し去り、矯として龍の雲を行くが若し。

壯士懷遠略。志存解世紛。

壯士、遠略を懷き、志は世紛を解くに存す。

周粟猶不顧。齊珪安肯分。

周粟、猶ほ顧みず、齊珪、安んぞ肯て分たむ。

抱劍辭高堂。將投霍冠軍。

劍を抱いて高堂を辭し、將に投せむとす霍冠軍。

長策掃河洛。寧親歸汝墳。

長策、河洛を掃はば、寧親、汝墳に歸れ。

當令千古後。麟閣著奇勳。

當に千古の後をして、麟閣に奇勳を著さしむべし。

【字解】

【一】六駿 詩の國風に隲有六駿とあつて、毛傳に「駑は馬の如く、鋸牙、虎豹を食ふ」とあり、孔穎達の正義に「釋

畜に云ふ、駑は馬の如く、鋸牙、虎豹を食ふ」とあり、郭璞は山海經を引いて「獸あり、駑と名づく、白馬の如く、黒尾鋸牙、音、鼓の如く、虎豹を食ふ」とある。然らば、この獸は駑と名づけるだけ、それを六駿といつたに就いて、王肅は「六と云ふは、見るところに據つて言ふなり」といつた。北史に「張華原、兗州刺史となる。これより先、州境數ば猛獸あつて暴を爲す。華原、政に臨んでより、州の東北七十里、甌山中、忽ち六駿あり、猛獸を食ふ、威な化感の致すところと爲す」とある。【二】猛武 猛虎に作るべき筈であるが、唐では、虎の子を諱み、常に武の字を以て之に代へた。【三】駑馬 駑は鈍馬。【四】周粟猶不顧 史記に「伯夷叔齊、義として周の粟を食はず」とある。【五】齊珪 謝靈運の詩に弦高犒晉師、仲連却秦軍、臨組乍不縲、對珪寧肯分とあつて、李善の文選註「史記に曰く、平原君、魯連を封ぜむと欲す、連肯て受けず」とある。王琦の解に「左太冲の詠史の詩に曰く、臨組不肯縲、對珪不肯分、仲連の文に據るに、分珪の事を見ずと雖も、古しへ、爵を分つ、皆その爵の輕重に隨うて、これに珪璧を賜ひ、執つて以て瑞信と爲す。今仲連、齊趙の封爵を受けず、その肯て珪を分たざるを明かにするなり」とある。魯仲連は、はじめ、趙の平原君から封土の事を言ひ出されたのであるから、一體ならば、趙珪といはればならぬ處である。【六】霍冠軍 史記に「霍去病、劉姚校尉となり、封ぜられて冠軍侯となる」とある。【七】寧親 揚子法言に「孝は寧親より大なるはなし」とある。【八】汝墳 詩の國風に邇彼汝墳」とあり、鄭康成の周禮註に「水涯を墳といふ」とあつて、汝墳とは汝水の涯をいふ。後漢書郡國志に「汝陰、本と胡國」とあつて、その註に「詩に謂はゆる汝墳なり」とある。又應奉傳贊に「二應克聰、亦表汝墳」とあつて、凡そ汝水の濱は皆汝墳といふのである。【九】麟閣 すでに前に見ゆ。

【題義】國史補に「進士、通稱、これを秀才といふ」とある。張某の名字は、例の如く不詳。この詩は、進士張某の從軍を送つて作つたのである。

【詩意】駑は、猛虎をさへ食つて仕舞ふもので、駑馬の羣に從つて、のそのそして居るのを愧ぶることとは、言ふまでもない。かくて、一朝長鳴して、その志さす方に走り去るを見れば、矯矯として、龍

が雲の間を行くやうである。君は、もとより、當代の壯士、胸中には遠略を懐き、その宿志は、世の紛紜を解くに存し、矢張、かの六駿と同じ様である。かくて、苟くも義理に叶はねば、一物をも受けず、たとへば、伯夷叔齊が義として周の粟を顧みざるが如く、魯仲連が秦を帝とするを非として、その軍を斥け、やがて、平原君から封土を與へやうといはれたが、珪を分つことを屑しとせざると同じである。今次は劍を抱いて、父母に辭し、かの霍去病に比すべき名將の下に身を投せむとして居る。かくて、一たび幕中に入れば、長策を以て河洛の賊軍を一掃して、その地を回復し、その後、親を見舞ふ爲に、得意に成つて汝水の邊に歸つて來るが善い。何は兎もあれ、天晴の手柄を顯はし、麒麟閣上に其像を留めて、千古の後までも、美名を傳へるやうにして欲しいと、ひそかに其成功を祈つて居る。

【餘論】起四句は、六駿を敘し、駿は、猛虎さへ食ふといふ位、至つて強いものである處から、張秀才を以て、幽燕の賊よりも、もつと倔強なるものとなし、仍つて相比したのである。壯士懷遠略の四句は、張秀才の人物志操の超絶なることを稱揚し、以上六句が送別の正意で、當令千古後、麟閣著奇勳の二句は、前の匈奴繫頸數應盡、明年應入蒲桃宮だの、旋應獻凱入、麟閣佇深功だのと略ぼ意象を同じうし、いくら、李白でも、かう型に嵌つた様な文句を使ふと、甚だ慊らす思はれる。王琦は「この詩、當に祿山寇して洛陽を陥るの後に作るべし」といつたが、それは長策掃河洛の一句に本づいたので、まさしく確當であらう。張秀才は、一かどの人物と見えるが、格別その名を留めぬ處を見ると、折角ながら、功名手柄を顯はさずに終つたものと見える。

送崔度還吳。度故人禮部員外郎國輔之子

崔度の吳に還るを送る、度は故人禮部員外郎國輔の子、

幽燕沙雪地。萬里盡黃雲。
 幽燕沙雪の地、萬里盡く黃雲。
 朝吹歸秋雁。南飛日幾羣。
 朝吹、秋雁を歸し、南飛日に幾羣。
 中有孤鳳雛。哀鳴九天聞。
 中に孤鳳の雛あり、哀鳴、九天に聞こゆ。
 我乃重此鳥。綵章五色分。
 我、乃ち此鳥を重んじ、綵章五色分る。
 胡爲雜凡禽。雞鶩輕賤君。
 胡すれぞ、凡禽に雜り、雞鶩、輕しく君を賤む。
 舉手捧爾足。疾心若火焚。
 手を舉げて爾の足を捧げ、心を疾ましむること、火の焚く
 拂羽淚滿面。送之吳江濱。
 羽を拂つて、涙、面に滿つ、送つて之く吳江の濱。
 去影忽不見。躊躇日將曛。
 去影忽ち見えず、躊躇、日、將に曛せむとす。

【字解】【一】幽燕 古しへの幽州で、後に燕に成つたから云ふので、今の直隸地方。【二】朝吹 朝風。【三】九天 九は陽の大數なるが故に冠したのである。【四】雞鶩 鶩は家鴨。【五】吳江濱 吳江は、吳地を貫流する長江の本支を併稱したので、濱は

送 送崔度還吳故人禮部員外郎國輔之子

岸、すでに前に見ゆ。

【題義】度故人禮部員外國輔之子の十一字は、自註であつて、一本に題下に割註にしてある方が體を得て居る。唐書藝文志に「崔國輔、縣令の擧に應じ、許昌令集賢直學士禮部員外郎を授けられしが、王鉞の近親に坐して、竟陵郡司馬に貶せらる」とあり、唐詩品彙に「崔國輔は吳郡の人」とある。崔國輔は、當時世に知られた詩人であつたが、その子の崔度は、名字閱歷、ともに不詳である。しかしこの詩を見ると、久しく北方幽燕の地に居たが、兎角不遇にして、志を得ず、やがて故郷に還るといふので、李白は、乃ち其行を送る爲に、この詩を作つたのである。

【詩意】幽燕は、北方荒寒の地で、風沙と氷雪とに閉ぢこめられ、見わたす限り、萬里の果までも、黄色に曇つた雪の雲が低く立ち籠めて居る。かくて、朝風は、秋の雁を吹き送り、日ごとに幾羣となく、南飛する。その雁羣の中に、鳳凰の雛が、一羽まじつて居て、悲しげに鳴く聲は、九天に聞こえる位。われは、元と此鳥を重んじ、その文彩、爛然として、五色分明なるを見、いかなれば、凡禽に立ちまじり、鶏や家鴨などに馬鹿にされて居るのであるか、まことに不思議で堪まらぬ位。そこで、手を舉げて鳳雛の足を捧げて、懇に之を劬はり、かの雞鶩を憎む心は、さながら火の焚えると同じである。やがて、其羽に染みて居る塵などを拂ひ去り、滿面の涙を抑へつつ、これを送つて、その故郷なる吳江の邊に歸らしめ、見えなくなるまでも、佇立して、その影を目送り、去りがてにして居

る間に、夕日は、暮れなむとし、一しほ、寂寥の想を爲した。

【餘論】全體が比の體で、極めて面白く出來て居る。乾隆御批に「哀痛の音、故舊に篤く、自ら深情を見る」といひ、嚴滄浪は「須らく、古人、かくの如く、才を憐むを知るべし」といひ、ともに成程と頷かれる。

送祝八之江東賦得浣紗石

祝八の江東に之を送り、浣紗石を賦し得たり

西施越溪女。

西施は越溪の女、

明豔光雲海。

明豔、雲海に光る。

未入吳王宮殿時。

未だ吳王の宮殿に入らざる時、

浣紗古石今猶在。

浣紗の古石、今猶ほ在り。

桃李新開映古查。

桃李新に開いて、古查に映じ、

菖蒲猶短出平沙。

菖蒲猶ほ短く、平沙を出づ。

昔時紅粉照流水。

昔時は紅粉、流水を照らし、

送 送祝八之江東賦得浣紗石

【字解】(一) 明豔 容貌の豔麗

しくきらびやかなること。(二) 雲海 雲なす海。(三) 古查 査は水中

の浮木。(四) 菖蒲猶短 菖蒲の芽

の纒に出たばかりなるをいふ。(五)

超忽 遠き貌、王巾の頭陀寺碑文に

東望三平阜、千里超忽とある。

今日青苔覆落花。今日は青苔、落花に覆はる。

君去西秦適東越。君は西秦を去つて、東越に適く、

碧山清江幾超忽。碧山清江、幾超忽。

若到天涯思故人。もし天涯に到つて、故人を思はば、

浣紗石上窺明月。浣紗石上、明月を窺へ。

【題義】祝八の八は排行で、名字は分らない。江東は吳越の地。それから、浣紗石に就いては、太平御覽に引ける孔暉の會稽記に「句踐、美女を索め、以て吳王に獻せむとし、諸暨苧蘿山の賣薪の女、西施鄭旦を得、先づ土城山に教習せしむ、山邊に石あり、云ふ是れ西施の浣紗石」とあり、太平寰宇記に「諸暨縣に苧蘿山あり、山下に石跡あり、云ふ是れ西施浣紗の所と。浣紗石、猶ほ在り」と記してある。この詩は、祝八の江東に之くを送るにつけ、その地の名勝を擇んで、各題とした處が、李白は浣紗石を取り中て、因つて、この詩を作つたので、つまり、浣紗石を詠する其中に於て、送別の意を寓した譯である。

【詩意】西施は、もと越溪に生まれた女で、その容光の明艷異常なることは、雲なす海をも照らす位。そして未だ吳王の宮殿に入らざりし前は、河水に臨んで紗を洗つて居たとかいふので、その常に乗つ

て居たと傳ふる石が、今でも残つて居る。その石の邊には、桃李の花、新に咲き出でて、水中の古い浮木に映じ、そして、汀に生える菖蒲は、やつと芽を出して、平沙の上に抽き出して、當時と少しも變らぬ景色。しかし、むかしは、その處に於て、紅粉の妝を爲せる西施が、流るる水に其影を映したが、今では、石上の青苔は落花に覆はれて、その人、すでに見えず、これを思へば、まことに感慨に堪へぬ。君は、今、ここ長安を去つて、東越に行かれるので、その間、碧山清江、相連つて、道も極めて遠い。かくて、天涯に至つて、故人即ち吾を思ひ出したならば、浣紗石の邊へ往つて、石の上に映する明月を見よ、われも亦た均しく君を思ふ心を其月に寄せてゐるから、それとなく、心に感得することがあるに相違ない。

【餘論】起首より今日青苔覆落花に至る二解は、専ら浣紗石を詠じ、結一解に於て、送別の意を寫し出し、若到天涯思故人、浣紗石上窺明月の二句を以て題意を完うしたのである。そして、この二句は、例の我寄愁心與明月、隨風直到夜郎西と極めて類似し、又前の藍田太白若可期、爲余掃灑石上月と表裏を爲す様にも見え、兎に角、慣用の筆法である。

送侯十一

侯十一を送る

朱亥已擊晉。侯嬴尙隱身。

朱亥、すでに晉を撃ち、侯嬴、尙ほ身を隠す。

時無魏公子。豈貴抱關人。時に魏の公子なくんば、豈に抱關の人を貴ばむや。

余亦不火食。遊梁同在陳。余亦た火食せず、梁に遊ぶは陳に在るに同じ。

空餘湛盧劍。贈爾託交親。空しく湛盧の劍を餘し、爾に贈つて交親を託す。

【字解】(一) 朱亥、侯嬴、ともに前に數ば見ゆ。(二) 不火食、煮た物を食はぬ、莊子に「孔子、陳蔡の間に窮し、七日火食せず」とある。(三) 湛盧劍、吳越春秋に「楚の昭王、臥して寤め、吳王湛盧の劍を牀に得たり。その故を知らず、乃ち風胡子を召して問ふ。答へて曰く、これを湛盧の劍といふ、五金の英、太陽の精、氣を寄せ、靈を託し、これを出せば神あり、これを服すれば威あり、以て折衝して敵を拒ぐべし。然れども、君、理に逆ふの謀あれば、その劍、即ち出づ、故に無道を去つて有道に就く。今、吳王無道、君を殺し、楚を謀る、故に湛盧楚に入る」とある。

【題義】 侯十一は、名字閑歴、ともに不詳。しかし、詩を見れば、一個の老俠であるらしく、そこで同姓に因み、侯嬴を以て之に擬し、且つ其行を送つたのである。

【詩意】 今や朱亥に比すべき君の門下は、すでに晉鄙の様な人を椎殺し、著著と場面が進行するに拘はらず、侯嬴に比すべき肝腎の大立物たる君が出て来て活動すべき筈であるのに、尙ほ身を隠して引込んで居るのは、どうした事か。刻下の世、魏の公子信陵君の様な人が無く、従つて、關門の番人の如き賤しき地位に居るものを貴ばないのは、尤も至極な事である。かくの如く君が不遇であるばかりか、予も亦た火食せず、今しも梁に遊歴して居るが、丁度、孔子が陳蔡の野に困んだと同じである。

さはれ、湛盧に比すべき名劍だけが残つて居るから、ここに別を爲すに際し、これを君に贈つて、親交の表徴としやうと思ふ。

【餘論】 同姓の故に、侯嬴を以て其人に比したのは、例の慣用手段で、前半四句、まことに骯髒の極である。次の二句は、自分の事を述べ、結二句は、自他の交親に及んだのである。

魯中送二從弟赴舉之西京

魯中にて二從弟の舉に赴き西京に之くを送る

魯客向西笑。君門若夢中。魯客、西に向つて笑ふ、君門、夢中の若し。

霜凋逐臣髮。日憶明光宮。霜は逐臣の髮を凋ましめ、日に明光宮を憶ふ。

復羨二龍去。才華冠世雄。復た羨む、二龍去つて、才華、冠世の雄なるを。

平衢騁高足。逸翰凌長風。平衢、高足を騁せ、逸翰、長風を凌ぐ。

舞袖拂秋月。歌筵聞早鴻。舞袖、秋月を拂ひ、歌筵、早鴻を聞く。

送君日千里。良會何由同。君が日に千里なるを送る、良會何に由つてか同じうせむ。

【字解】(一) 向西笑、桓譚の新論に「人、長安の樂しきを聞けば、門を出で、西に向つて笑ふ」とある。(二) 明光宮、雍錄に

漢に明光宮三あり。一は北宮に在り、長樂宮と相連るもの、武帝の太初四年に起る。即ち王商の指借し、以て暑を避けむと欲するところの者なり。別に明光宮あり、甘泉宮中に在り、亦た武帝の起すところ、燕趙の美女三千人を發して之に充つ。尙書郎、文書を作り、起草するを主るに至り、更めて建禮門内に直す、すなはち明光殿に近し。建禮門内、神仙門を得、神仙門内、明光殿を得、省中皆胡粉壁に塗り、丹を以て地に漆す、これを丹堊といふ。尙書郎、蘭を握り、雞舌香を含んで、事を奏す。これ明光殿、その方向を約するに、必ず未央正宮殿中に在らむ、北宮甘泉、奇玩を設爲する者と比せず。すなはち、臣下事を奏するの地なり」とあつて、王琦は「按ずるに、太白の用ふるところ、正に明光殿を指し、しかも、宮の字を借用するは、以て韻を趁ふのみ」とある。【三】二龍世説に「謝子微、許子將兄弟を見て曰く、平輿の淵に二龍あり」とある。【四】平衢、謝靈運の詩に平衢修且直とある。【五】高足古詩に何不策高足」とあつて、李善の註に「高は上なり、又逸足を謂ふなり」とある。

【題義】この詩は、魯中に居た時、從弟二人が例の文官試験を受ける爲に、長安に上京するのを送つて作つたのである。一本には「族弟鎰を送る」とあるさうだが、題に二從弟といひ、詩中にも二龍去といひ、もと二人であるから、李鎰の外に今一人あるべき譯である。

【詩意】われは、今魯中の客となつて滯留して居るが、長安の事を聞けば、おもはず西に向つて笑ふので、往日出入せし九重の宮門は、宛然として、夢中の想を爲すばかり。身は逐臣となつて、頭上の髪は、追追白くなり、日として、明光殿を思はぬことはない。羨むべきは、汝等二人、今次、上京するとのことで、その才華は、當世に冠として、その雄傑を稱すべく、やがて、坦坦たる大道に向つて名馬を馳せ、力ある翼を振つて、長風を凌ぐと同じく、きつと、試験に及第して、追追立身すること

であらう。ここに、別を爲すに際し、舞の袖は秋月の影を拂ひ、筵上の歌を唱へ終れば、やがて、雁の聲が聞こえる。これより、君は、日ごとに千里を隔つべく、どうして、再び良會を爲すことが出来やうか、まことに、名残の惜まれることである。

【餘論】起四句は自己の現状、次の四句は二從弟の身分、結四句は送別の正意で、殆んど遺憾なく言ひをほせて居る。

奉饒高尊師如貴道士傳道錄畢歸北海

高尊師、如貴道士が道錄を傳へ畢り、北海に歸るを饒し奉る

道隱不可見。靈書藏洞天。道、隠れて見るべからず、靈書、洞天に藏す。

吾師四萬劫。歷世遞相傳。吾が師四萬劫、歷世遞に相傳ふ。

別杖留青竹。行歌躡紫煙。別杖、青竹を留め、行歌、紫煙を躡む。

離心無遠近。長在玉京懸。離心、遠近なし、長く玉京に在つて懸る。

【字解】【一】道隱不可見 老子に「道隠れて名なし」とあつて、河上公の註に「道は潛隱、人をして能く指名すること無からしむるなり」とあり、莊子にも「道は聞くべからず、聞けば非なり。道は見るべからず、見れば非なり」とある。【二】靈書 太平御

覽に「後聖道君列記に曰く、刻するに紫玉を以てして簡となし、青金を文と爲し、龜母筆を按じ、眞童筵を拂ひ、玉童編を結び、名づけて靈書度人經といふ。この二章、竝に是れ諸天上帝及び至靈魔王隱秘の音、皆此れ大梵の言、世上の常辭に非ず、言に韻麗なく、曲に華宛なし、上天の寶とするところ、京都紫微上宮に秘す、玄科に依つて四萬劫に一たび傳ふ」とある。【三】別杖留青竹 後漢書に「費長房、壺公に隨從して深山に入る。長房辭して歸る。翁、一竹杖を與へて曰く、これに騎し、之くところ任かせば、自ら至らむ。すでに至らば、杖を以て葛陂中に投すべし」と。長房、杖に乘じ、須臾にして來歸す。杖を以て、陂に投じ、顧視すれば、龍なり」とある。【四】玉京 前に見ゆ。

【題義】北海は唐時の郡名、即ち青州で、河南道に隸屬して居た。この詩は、高尊師、如貴道士の二人が、長安紫微宮に於て道籙を受け、愈よ道術の修行が濟んで北海に歸るを送つて作つたのである。

【詩意】宇宙の大道は、潜幽隱微にして見るべからず、従つて、道家の修行は、なかなか六つかしむ。その道の秘奥を書きしるした靈書は、紫微宮に秘藏されてあつて、四萬劫を経て一傳し、代代これを受け繼いで居る。二君も、今回愈よ其道籙を許されたので、これ位、お目出たいことはない。かくて別時に與へられた青竹の杖に騎して、その之くが儘にして歸り、それから、行歌しつつ、紫煙を躡んで、青天を驅け廻ることであらう。ここに、別の愁は遠近なく、長く天上の白玉京に懸つて居る。

【餘論】これは五律の形式を備へて居るが、三四の一聯は散體を以て之を行つたのである。後聯は、措辭極めて明靚。離愁の句は、唯だ一語千古の別情を寫し盡し、そして、長在三玉京懸の句を得て、

縹緲たる仙音を爲して居る。大體に於て、題と恰も好く相稱ひ、且つ緊健に出來て居る。

金陵送張十一再游東吳

金陵にて張十一の再び東吳に遊ぶを送る

張翰黃花句。風流五百年。

張翰黃花の句、風流五百年。

誰人今繼作。夫子世稱賢。

誰人か今繼いで作る、夫子世賢と稱す。

再動遊吳棹。還浮入海船。

再び吳に遊ぶの棹を動かし、還た海に入るの船を浮ぶ。

春光白門柳。霞色赤城天。

春光、白門の柳、霞色、赤城の天。

去國難爲別。思歸各未旋。

國を去つて別を爲し難く、歸るを思つて、各未だ旋らず。

空餘賈生淚。相顧共悽然。

空しく、賈生の涙を餘し、相顧みて共に悽然。

【字解】

【一】黃花句 張翰の詩に青條若三總翠、黃花如散金とある、この黃花は菊でなく、菜の花である。【三】白門 胡三省の通鑑註に「白門は建康城の西門なり、西方は色白し、故に以て稱と爲す」とあり、古しへの楊叛兒曲に暫出白門前、楊柳可藏鴉とある。【三】赤城 台州府志に「赤城山は、天台縣北六里に在り、一名燒山、石皆霞色、これを望めば雉堞の如し、因つて以て名となす。孫綽の賦に謂はゆる赤城霞起而建標とは、是れなり。支遁の天台山銘の序に曰く、天台山に往く、當に赤城より道と爲すべしと。而して、神龜山圖、亦た赤城を以て天台の南門となし、石城山を西門となすなり」とある。【四】賈生淚 王琦は漢書に「賈誼、自ら傳となつて無狀なるを傷み、常に哭泣す」とあるを引いたが、これは、治安策に於て、痛哭太息すべきものがあるといつた其事

送 金陵送張十一再游東吳

を指したので、即ち時事に感憤したことに相違ない。

【題義】金陵は今の南京、張十一の十一は排行、名字は不詳。この詩は、金陵に於て、張某の再び呉に遊ぶのを送つて作つたのである。

【詩意】張翰は、黄花如散金の一句を以て世に知られ、その風流は後世に朗映し、今すでに五百年を経た。その風流を誰が承繼して居るかといふと、夫子は代代賢と稱せられた人で、まさしく、其人であらう。今君は、舟に棹して、再び呉に遊び、はては、大海に浮び出さうといふので、愈よここを出發される。時しも、春光は白門の柳を籠め、霞色は赤城の天に映じて見え、旅をするには、持つて来いといふ好期節である。さばれ、われは國を去つて此に居る客中の身であるから、別離の情殊に苦しい。又歸りたいと思つて居ても、各歸り得ずして居る。おまけに、時事に慷慨して、痛哭長太息すること、さながら、古しへの賈誼の如く、相顧みて、ともに悽然たるばかりである。

【餘論】起四句は、張某が古しへの張翰の後繼であるといふ意、再動遊吳棹の四句は、張某の旅行の計畫と其期節とに道及し、以下四句は、送別の正意である。

送紀秀才遊越

紀秀才の越に遊ぶを送る

海水不滿眼。觀濤難稱心。

海水、眼に満たざれば、濤を観るも、心に稱ひ難し。

即知蓬萊石。却是巨鰲簪。

即ち知る蓬萊の石、却つて是れ巨鰲の簪。

送爾遊華頂。令余發鳥吟。

爾の華頂に遊ぶを送れば、余をして鳥吟を發せしむ。

仙人居射的。道士住山陰。

仙人、射的に居り、道士、山陰に住む。

禹穴尋溪入。雲門隔嶺深。

禹穴、溪を尋ねて入り、雲門、嶺を隔てて深し。

綠蘿秋月夜。相憶在鳴琴。

綠蘿秋月の夜、相憶ふは鳴琴に在り。

【字解】一蓬萊石、巨鰲簪 初學記に「玄中記に曰く、東海の大なるもの、巨鰲あり、背を以て蓬萊山を負ふ、周圍千里」とある、巨鰲は巨龜。二華頂 一統志に「華頂山は、天台縣の東北六十里に在り、周圍百餘里、高さ萬丈、絶頂より、東、滄海を望む、俗、望海尖と名づく、草木蕭郁、すべて人世に非ず、夏、積雪あり」とある。三鳥吟 王粲登樓賦に「莊鳥顯而越吟」とあるに本づく、その詳、前に見ゆ。四射的 藝文類聚に孔曄の會稽記を引いて「縣の東南十八里に射的山あり、遠望的、射侯の如きあり、故に之を射的といふ。射的の西に石室あり、方二丈ばかり、これを射室といふ」とある。五道士住山陰 即ち王羲之が道徳經を寫して鵝に換へて來た其道士で、すでに前に見ゆ。六禹穴 方輿勝覽に「禹穴は、紹興府龍瑞宮の側に在り」といひ、輟耕錄に「會稽の陽明洞天は、秦望山後、禹廟の西南に在りと云ふ、即ち古しへの禹穴、越の勝境なり」とある。或は委宛山が即ち禹穴だといふ説もあるが、それは誤つて居る。七雲門 水經註に「山陰縣南に玉笱・竹林・雲門・天柱の精舍あり、竝に山を疏し、基を創め、林を架し、字を裁し、泖を割き、流を延き、泉石の好を盡す」といひ、施宿の會稽志に「雲門山は、會稽縣南三十里に在り。舊經に云ふ、晉の義熙二年、中書令王子敬、ここに居る。五色の雲あつて見はる。詔して、寺を建て、雲門と號す。山に謝敷宅、何公井、好泉亭、王子敬の山亭、永禪師の臨書閣あり」と記してある。

【題義】この詩は、進士紀某の越に遊ぶのを送つて作つたのである。紀の名字閱歴等は、一切不詳。

【詩意】海を觀るには、濤を觀るべしといふが、海は海でも、狭くては不可ないので、もし眼に満たぬ程であれば、折角濤を觀ても、到底心に稱うて快哉を叫ばしめるやうには成らぬ。蓬萊山といふも、畢竟するに、大龜の頭に、一寸載つて居る、いはば簪の様なものに過ぎぬ。されば、觀るところが廣くなければ、心胸を開拓することが出来ないで、それにつけても、旅行游覽は、まことに必要なものである。ここに汝が越中に向ひ、天台の華頂山に遊ぶを送れば、予をして、覺えず、莊寫の越吟を發せしめる。越の地たるや、勝境極めて多く、射的山には仙人が住んで居るし、山陰は例の鵝を飼つた道士の住んで居た地であるし、禹穴は溪流に沿うて尋ね入るべく、雲門寺は嶺を隔てて山の極めて深い處に在る。君が此等の勝地を尋ねる間に於て、綠蘿に月の照る秋夜に遇はば、必ず琴を弾じて、われを憶ひ出すことであらう。

【題義】嚴滄浪は、破題の四句を評し「起二句、眼孔大、胸懷別、非常の人、非常の語を爲す、下二句は便ち誕」といつたが、いかにも其通りて、蓬萊巨鰲は、竹に木を續いだやうな感がある。仙人の四句は、越中の勝概を列擧し、綠蘿の二句は、餘情盡きず、まさしく、熟套を打破し得たので、ここらは、流水に李白といひたい處である。

送長沙陳太守 二首

長沙の陳太守を送る 二首

長沙陳太守。逸氣凌青松。

長沙の陳太守、逸氣、青松を凌ぐ。

英主賜五馬。本是天池龍。

英主、五馬を賜ひ、本と是れ天池の龍。

湘水廻九曲。衡山望五峰。

湘水、九曲を廻らし、衡山、五峰を望む。

榮君按節去。不及遠相從。

君が節を按じて去るを榮とし、遠く相從ふに及ばず。

【字解】【一】天池龍。庾信の春賦に馬是天池之龍種とある。【二】湘水廻九曲。水經註に「衡山東南二面、湘川に臨映す、長沙より此に至る、江湖七百里中、九背あり、故に漁者歌うて曰く、帆隨湘轉、望衡九面」とあり、藝文類聚に引ける湘中記に「遙に衡山を望めば、陣雲の如し、湘に沿ふこと千里、九向九背、乃ち復た見えず」とある。【三】衡山望五峰。通鑑地理通釋に「衡岳は、潭州衡山縣西三十里、衡州衡陽縣北七十里に在り。五峰あり、曰く、紫蓋、天柱、芙蓉、石廩、祝融」とある。【四】按節。史記の秦本紀に「郭璞云ふ、言ふは轡を頓するなり。司馬彪云ふ、轡を按じて行けば、節を得、故に節を按ずといふ」とある。即ち馬の手綱を緩めること。

【題義】長沙は、唐の郡名、即ち潭州で、江南西道に隸屬して居た。この詩は、陳某が新に長沙の太守に補せられて赴任するのを送つて作つたのである。陳の名字閱歴等は、例の如く不詳。

【詩意】今次、長沙太守に任命された陳君は、まことに天晴な人物で、その逸氣は、青松を凌がむばかりで、大に俗離れがして居る。それから、天池の龍種とも稱すべき名馬五頭を、天子より賜はり、

それに騎して、任地向ふことである。やがて、長江を渡つて、衡湘一帯の地へ往くと、湘水の流は、うねつたり、くねつたりして、凡そ九曲と稱せられ、衡山の五峰は、目の前にはつきりと見える。君が手綱を緩めて、しづしづと練り行かれるのは、まことに榮譽の極で、早く任地に到着して、今後政績を挙げられるのが善いので、いたづらに、別を惜んで、遠く相従ふやうな真似は、斷じて爲さぬ。

【餘論】前半四句は一氣呵成。湘水、衡山の二句は、本地の風光を點醒して、人の眉目を清うする。結二句は、翻つて之を激勵する意味である。

七郡長沙國。南連湘水濱。

七郡長沙の國、南、連る湘水の濱。

定王垂舞袖。地窄不廻身。

定王、舞袖を垂れ、地窄くして身を廻らさず。

莫小二千石。當安遠俗人。

二千石を小とする莫れ、當に安んずべし遠俗の人。

洞庭鄉路遠。遙羨錦衣春。

洞庭鄉路遠く、遙に羨む錦衣の春。

【字解】一 七郡 唐時の潭州長沙郡、衡州衡陽郡、永州零陵郡、連州連山郡、道州江華郡、彬州桂陽郡、邵州邵陽郡、この七郡は、秦漢の時に於ける長沙の故地であつた。

二 定王垂舞袖 前に見ゆ。

三 二千石 漢時太守の秩、故に直に太守を指す。

四 洞庭 長沙へ行く路に當つて居る。

【詩意】古しへ謂はゆる長沙國は、今の七郡を汎稱したもので、南の方、湘水の濱に連接して在つた。

漢の長沙の定王は、父皇帝の御前で、變な手つきをして踊り、何分場所が狭くして、自由に身を動かすことが出来ぬと、あてこすりを言ひ、その爲に大に封土を増されたといふことである。しかし、君は、二千石の秩を以て小と爲さず、専心一意、政を勵んで、僻遠の小民を安撫するが善い。君は、元と洞庭附近の産で、今次赴任するに就いては、郷路を通過せられることであらうが、錦衣きらびやかに、折からの春景色に輝いて見えるのは、まことに、羨ましいことである。

【餘論】この首も、前半は一氣呵成で、前首と大に類似して居る。それから、政を勵むべきこと、故郷に錦を飾ることを述べ、すべて、前首とは全く異なる意象を詠出した處は、まさしく、連作の體を得たものである。

送楊燕之東魯

楊燕の東魯に之くを送る

關西楊伯起。漢日舊稱賢。

關西の楊伯起、漢日舊と賢と稱す。

四代三公族。清風播人天。

四代三公族、清風、人天に播く。

夫子華陰居。開門對玉蓮。

夫子、華陰に居り、門を開いて玉蓮に對す。

送 送楊燕之東魯

何事歷衡霍。雲帆今始還。

何事ぞ、衡霍を歴、雲帆、今はじめて還る。

君坐稍解顔。爲我歌此篇。

君坐して稍や顔を解き、我が爲に此篇を歌へ。

我固侯門士。謬登聖主筵。

我、固より侯門の士、謬つて登る聖主の筵。

一辭金華殿。蹭蹬長江邊。

一たび金華殿を辭し、蹭蹬す長江の邊。

二子魯門東。別來已經年。

二子、魯門の東、別來すでに年を経たり。

因君此中去。不覺淚如泉。

君が此中より去るに因つて、覺えず、涙、泉の如きを。

【字解】

【一】關西楊伯起 後漢書に「楊震、字は伯起、弘農華陰の人、少にして學を好み、經に明かに、博覽、窮究せざるなし。諸儒、これが語を爲して曰く、關西孔子楊伯起」とある。それから、震より、乘、賜を経て、彪に至るまで、四世相繼いで、太尉となつた。【二】華陰 太平寰宇記に「華州華陰縣、太華山の陰に在るを以て、故に之を名づく」とある。【三】玉蓮 華山の蓮花峰を指したのであらう。王琦の解に「或は謂ふ、玉女蓮花の二峰を指して言ふと。或は謂ふ、華山記に云ふ、山頂に池あり、千葉の蓮花を生ず、これを服すれば羽化す、昌黎の詩に謂はゆる太華峰頭玉井蓮、開花十丈藕如船、玉蓮は玉井蓮を指すに似たり」とある。【四】衡霍 二山の名。霍山は、太平寰宇記に「一名衡山、一名天柱山、漢の武帝、衡山遂遠、讖緯皆霍山を以て南岳となすを以て、故に其神を此に祭る、今土俗、皆南岳大山と呼ぶ」とある。【五】解顔 笑ふこと。【六】金華殿 三輔黃圖に「未央宮に金華殿あり」と記してある。

【題義】

楊燕は、如何なる人か分らぬが、詩中に夫子華陰居とあるからには、矢張漢の楊震の末裔と

見える。この詩は、李白が金陵あたりに居た頃、楊燕が南方を旅行して來りしに遇ひ、そして、その東魯に之くを送つて作つたのである。

【詩意】

關西の楊白起は、後漢の時分、音に聞こえた大賢人で、四代打續いて太尉となり、その清絶なる高風は、人天の間に播き渡つた位、君は其末孫で、矢張、華陰の地に居り、門を開いて、蓮花峰の秀色を眺めつつあつた。然るに、何事に因つて、態態旅行を爲し、衡霍二山を経めぐり、今しも、雲帆を飛ばせて還られるのか。君よ、暫く此に坐して、笑顔を見せ、折角作つて上げた此詩を我が爲に歌うて御覽せられよ。われは、固より侯門に出入するものであつたが、誤つて、聖主の知遇を得、一時は、大に得意であつた。然るに、一たび金華殿を辭し、都を去つて放浪してからは、この長江の邊に蹭蹬として、今に愚圖愚圖して居る。二人の倅は、魯の城門の東に僑居し、一別以後、すでに年を経た。そこで、今君が東魯に赴くに際し、倅どもの事を思ふと、涙が泉の如く湧き出づるを覺える程である。

【餘論】

起首より爲我歌此篇に至るまでが、楊燕の事に係り、即ち送別の正意である。爲我は一に爲君に作つてあるが、その方が、意味が一層明白である。我固侯門士以下は、自己父子の事を述べたので、因君此中去、不覺淚如泉の二句は、語真にして情摯、たしかに人を動かす處があるし、かくの如き構想は、これまで餘り其類を見なかつた様である。

送蔡山人

蔡山人を送る

我本不棄世。世人自棄我。

我、本と世を棄てず、世人、自ら我を棄つ。

一乘無倪舟。八極縱遠極。

一たび無倪の舟に乗じ、八極、遠極を縦にす。

燕客期躍馬。唐生安敢譏。

燕客、躍馬を期し、唐生、安んぞ敢て譏らむ。

探珠勿驚龍。大道可暗歸。

珠を採る、龍を驚かす勿れ、大道、暗に歸るべし。

故山有松月。遲爾翫清暉。

故山、松月あり、遅つ爾が清暉を翫ぶを。

【字解】

【一】無倪舟 倪は極際、即ち無限に進行する舟。【二】遠極 極は船尾、舵に同じ、かぢ。【三】燕客 蔡澤を指す、史記に「蔡澤は燕人なり、諸侯に遊學し、小大甚だ衆くして遇はず。唐舉に従つて相せしめて曰く、臣の若き者は何如と。唐舉然視して、笑つて曰く、先生、曷鼻巨肩、鰓頰鬚膝、吾聞く、聖人は相せず、と。殆んど先生かと。蔡澤、唐舉の之に戯るるを知り乃ち曰く、富貴は吾が自ら有するところ、吾が知らざるところのものは壽なり、願はくは、之を聞かむ。唐舉曰く、先生の壽、今より以往は四十三歳と。蔡澤笑つて謝して去り、その御者に謂つて曰く、吾、梁刺齒肥を持し、馬を躍らして疾驅し、黄金の印を懷にして、紫綬を腰に結び、人主の前に排讓し、肉を食うて富貴四十三歳足れり」とある。【四】探珠 莊子に「千金の珠は、必ず九重の淵にして鰓龍の領下に在り」とあつて、すでに前に見ゆ。【五】遲 待つ。

【題義】

蔡は山人といへば、もとより無官の處士である。ただ送といつただけで、何處へ往くのか分らない。

【詩意】

山人自ら曰く、われ本と世を棄てざれども、世人が自然にわれを棄てるから仕方がない。われは、到底、世と相容れぬものである、と。かくて、無限に進行する舟に乗じ、八極の表を飄游し、舵の儘に任かせて、つまり、大化の中に縦浪して居る。山人の志操は、かの如く、まことに、超絶的である。むかし、蔡澤は、馬を躍らす様な、立派な身分に成りたいと心に期して居たが、唐舉は、その人相を見て、これを譏らなかつたといふので、志あるものは、自然、その相にも顯はれ、且つ終に成就するものである。しかし、珍珠は龍の領の下に在るから、これを采らむとして、龍を驚かしては成らぬし、大道は、唯だ暗に歸嚮するを得るので、表面から騒ぎ立てて懸つても仕方がない。山人は、今、遠遊せむとし、その志ざすところは、如何なる事か知らぬが、注意さへすれば、無論成功する。しかし、故山なる松間の月は、皎瑩、蒼の如く、汝が歸り來つて、清光を弄するのを待つて居るから、たとひ成功した處で、久しく、塵世に留まらず、必ず此に歸つて來て、長閑に殘年を送るが善からう。

【餘論】

この一首は、李白が平生の懷抱を述べたもので、殊に結二句は、その理想である。今、山人を送るに際して、覺えず、これを吐露したものと見えるので、これにつけても、山人の人物も、さこそと想像される。

送蕭三十一之魯中兼問稚子伯禽

蕭三十一の魯中に之くを送り、兼ねて稚子伯禽に問ふ

六月南風吹白沙。六月南風、白沙を吹き、

吳牛喘月氣成霞。吳牛、月に喘いで、氣、霞を成す。

水國鬱蒸不可處。水國鬱蒸、處るべからず、

時炎路遠無行車。時炎に、路遠くして、行車なし。

夫子如何涉江路。夫子如何ぞ、江路を渉る。

雲帆嫋嫋金陵去。雲帆嫋嫋、金陵に去る。

高堂倚門望伯魚。高堂、門に倚つて伯魚を望む、

魯中正是趨庭處。魯中正に是れ趨庭の處、

我家寄在沙丘傍。我家、寄せて在り沙丘の傍、

三年不歸空斷腸。三年歸らず、空しく斷腸。

君行既識伯禽子。君が行、すでに識る伯禽子、

【字解】(一) 南風吹白沙 晉書

惠帝元康中京洛の童謡に「南風起、

吹白沙、遙望三魯國、何嵯峨、千歲觸

體生三齒牙」とある。(二) 吳牛喘月

風俗通に「吳牛、月を見て喘ぐ。言

ふは、これをして、日に於ける若く

ならしむ。これが故に、月を見て喘

ぐ。蓋し、傷禽は虚弦に驚き、疲牛

は月を望んで喘ぐ。物の懼怯、似た

るを見て驚く、此の如きものあり」

とある。(三) 吳牛は、晝、日光

の暑いの苦んで居るから、夜、月

を見ても、矢張、日ではないかと思

つて喘ぐといふ意。(四) 鬱蒸も

やもやして蒸し暑きこと。(五) 無

行車 程曉の詩に、平生三伏時、道

應駕小車騎白羊。應に小車に駕して白羊に騎すべし。

路無行車とあるに本づく。(五)

倚門 戰國策に「王孫賈の母曰く、

汝、朝に出てて晩に來れば、吾、門に倚つて望む」とある。(六) 伯魚 家語に「伯魚の生まるるや、魯の昭公、鯉魚を以て孔子に

賜ふ。君の昵を榮とし、故に因つて鯉と名づけ、伯魚と字す」とある。(七) 沙丘 前に見ゆ。(八) 騎白羊 世説註に「衛玠、鴈

蹴の時、白羊車に洛陽市上に乗ず、咸な曰く、誰が家の壁人」とある。

【題義】蕭三十一の三十一は例の排行で、その名字は分らぬ。稚子伯禽は、李白の子で、この時、まだ魯中に寄寓して居たのである。そこで、この詩は、蕭某の魯中に之くを送り、併せて、稚子伯禽に

近況を問うたのである。

【詩意】夏の季の六月、たださへ暑いのに、南風は白沙を吹き上げて、愈々堪まらない。そこで、吳

地の牛は、夜になつても、月に喘いで、その氣は霞を成すを疑ふばかり。このあたりは、水國で、涼

しかるべき筈であるのに、もやもやと蒸し暑く、とても留まつて居ることも出来ない位。かくの如く

暑さも厳しい上に、路が遠いから、さしもの驛路にも、旅行く車も見えない。然るに、君は、如何な

れば、江路を渉り、雲井に迷ふ帆影嫋嫋として、金陵から立ち去るのであるか。われは、日夕門に倚

つて、わが長子の居る方を望んで居るが、その趨庭の處は、君が今度行かれる魯中である。今でも、

我が家は、沙丘の近傍に寓居して居るが、われは、三年も歸省せず、従つて、その近況も分らぬから、

これを思へば、空しく斷腸するばかり。君は、魯中に行く序に、どうか、わが子の伯禽を見知つて下

送 送蕭三十一之魯中兼問稚子伯禽

七三九

さい。彼は、さながら、古しへの衛玠の如く、小車を白羊に牽かせて、市中を得意に乗り廻して居ることであらう。

【餘論】六月の二句は、暑威の甚しきを敍し、以下六句は送行の正面、我家以下の四句は、序に伯禽を尋ねて近況を知らせて呉れるといふ意。伯禽の事は、屢ば詩中に見え、さすがに、李白の天倫に厚き至情を想はしめる。

送楊山人歸嵩山

楊山人の嵩山に歸るを送る

我有萬古宅。嵩陽玉女峰。

我に萬古の宅あり、嵩陽の玉女峰。

長留一片月。挂在東溪松。

長く一片の月を留め、掛けて東溪の松に在り。

爾去掇仙草。菖蒲花紫茸。

爾、去つて仙草を掇へば、菖蒲、花紫茸。

歲晚或相訪。青天騎白龍。

歲晚、或は相訪はば、青天、白龍に騎せむ。

【字解】(一)玉女峰 登封縣志に「太室二十四峰、玉女峰あり、峰北に石あり、女子の如し、上に大篆七字あり、人、能く識るなし」とある。(二)掇 拾ふ。(三)菖蒲 神仙傳に「嵩山石上の菖蒲、一寸九節、これを服すれば長生す」とあり、抱朴子に「菖蒲は、須らく、石上一寸九節以上紫花の者を得べし、尤も善し」とある。謝靈運の詩、新蒲含紫茸、李善の註、倉頡篇に曰く、茸は草貌と。然らば、この茸は、菖蒲の花を謂つたのであらう。(四)歲晚 一年の末といふのでなく、他年の義。(五)騎白龍 廣博

物志に「翟武は、後漢の人なり、七歳、粒を絶ち、黃精紫芝を服し、蛾眉山に入る。天竺真人、授くるに眞訣を以てし、白龍に乗じて去る」とある。

【題義】楊は山人だから、勿論、無官の隱士、名字等は例の如く不詳。嵩山は、前にも屢ば見えて居るが、元和郡縣志に「嵩高山は、河南府告成縣西北二十三里、登封縣北八里に在り、亦た外方山と名づく。東を太室といひ、西を少室といふ、嵩高の總名、即ち中岳なり。山の高さ二十里、周回一百三十里」とある。この詩は、楊山人の嵩山に歸るを送つて作つたのである。

【詩意】わが悠久の住居となすべき場所は、嵩山の陽なる玉女峰であつて、そこには、長しへに一片の月を留め、東溪の松の梢に挂つて居る。今、汝は其地に往つて、仙草を拾ふといふが、定めて、紫の花、ふさふさしたる一寸九節の菖蒲を探がし出すであらう。かくて、これを服すれば、容易に昇仙するので、他年、ひよつとして尋ねたならば、定めて白龍に跨つて、青天の上を飛行して居ることであらう。

【餘論】嚴滄浪は「萬古宅の三字、達人の語と作して會すれば方に妙、一たび仙氣に涉れば、便ち癡」といつた。又五六は一に君行到三此峰。餐霞駐三衰容に作つてあるが、滄浪は「この二句を見て、方に本句の妙の佳なるを知る、便ち仙凡を隔て、即ち雅俗を分つ」といつて居る。それから、全首を評して、劉辰翁は「天地の間に超然たれば、以て死せざるべし、豈に獨り人の道ふを経ざらむや」といひ、

乾隆御批には「逸氣を短言に蟠し、彌よ奇健を覺ゆ」といひ、兎に角、一氣流注、自然に仙氣を帯びた處は、例の獨絶の筆致であらう。

送殷淑 三首

殷淑を送る 三首

海水不可解。連江夜爲潮。

海水解くべからず、江に連つて、夜、潮となる。

俄然浦嶼闊。岸去酒船遙。

俄然として浦嶼闊く、岸を去つて酒船遙なり。

惜別耐取醉。鳴榔且長謠。

別を惜んで醉を取るに耐へたり、榔を鳴らして、且つ長謠。

天明爾當去。應有便風飄。

天明、爾、當に去るべし、應に便風の飄るあるべし。

【字解】

浦嶼 韻會に「浦は水濱」、「嶼は海中の洲」とあり、劉涓子吳都賦の註に「嶼は海中の洲、上に石山あるなり」とある。【二】鳴榔 潘岳西征賦に鳴榔厲響とあつて、李善の註に「説文に云ふ、榔は高木なり、長木を以て、船を叩いて聲を爲す、魚を驚かして網に入らしむる所以なり」とある。一説に「榔は船板なり、船行けば響く、これを鳴榔といふ、駱賓王の詩、鳴榔下三貴洲、沈佺期の詩、鳴榔曉帳前、是れなり」とある。そこで、王琦は之を解し「太白の此篇の若きは、客を送る、漁を觀るに非ず、舟を停め酒を飲む、帆を掛けて長行するに非ず、謂はゆる鳴榔は、當に是れ船を撃つて、以て歌聲の節を爲すべし、猶ほ鼓を叩いて歌ふの義」といつた。

【題義】

顏真卿の元靜先生廣陵李君碑に「真卿、先生の門人、中林子殷淑、遺名子韋渠牟と、かつて

采眞の游緒を接し、合一の徳を聞く」とあつて、即ちここに謂ふ殷淑であらう。この詩は、李白の殷淑の遠行を送つたのであるが、何處から何處へ往つたのか、分らぬし、殷淑その人の名字閱歷等も、例の如く一切不詳である。

【詩意】 海水の變化は、まことに分らぬものであるが、江水に連つて居る處では、夜、潮となつて、差し込んで来る。かくて、潮が盈盈として漲れば、見る間に汀洲も闊くなり、酒を載せた游船も、岸を隔てて遙かの處に浮ぶ様に成る。ここに別を惜む上は、十分に醉を取るべく、船板を敲きつつ長謠して、時の移るに任かせて居る。かくて、夜が明ければ、君は此處より立ち去るべく、その折しも、追手の順風が吹いて、君の旅路も、極めて平穩であらう。

【餘論】 前半は江上夜舟の景況、後半は即ち其處に於ける送別の正意で、結二句、縁起の善いことを言つて、この行の無事ならむことを囑望したのである。

白鷺洲前月。天明送客回。

白鷺洲前の月、天明、客の回るを送る。

青龍山後日。早出海雲來。

青龍山後の日、早く海雲を出でて來る。

流水無情去。征帆逐吹開。

流水、無情に去り、征帆、吹を逐うて開く。

相看不忍別。更進手中杯。

相看着、別るるに忍びず、更に進む手中の杯。

【字解】(一) 白鷺洲 六朝事跡に「圖經に云ふ、城の西南八里に在り、周廻二十五里、江寧の新林浦に在り」と記してある。(二) 青龍山 景定建康志に「青龍山は、城の東南三十五里に在り、周廻二十里、高さ九十丈、又溧陽縣界別に青龍山あり」と記してある。

【詩意】白鷺洲前の残月は、夜明け頃、君の發程を送り、青龍山後の日は、朝早く、海雲を出でて、あかあかと晴を照らして来る。流水の滔滔たるは、無情なるが如く、征帆一片、風を逐うて開き、はるかに前程を指して飛んで行く。明朝の光景は、かくの如く、ここに相遇うて、さすがに別るるに忍びず、因つて、もう一つといつて、手中の杯を進める次第である。

【餘論】前半は残月と曉日とを點出して、別時の光景を想像し、流水征帆の二句は、その折の愁思を抽象的に表出し、仍つて、相看の二句を以て收束したのである。

痛飲龍筇下。燈青月復寒。

痛飲す龍筇の下、燈青くして月復た寒し。

醉歌驚白鷺。半夜起沙灘。

醉歌、白鷺を驚かし、半夜、沙灘より起つ。

【字解】(一) 龍筇 仙人の持つて居る杖で、龍が彫刻してある。殷淑は、仙術を學んだ人だから、これを持つて居たのであらう。

【詩意】座傍に衝き立ててある龍筇の下に痛飲すれば、燈火は漸く青くなつて、月光も亦た寒げに見

える。やがて、酔うて歌ひ出せば、その聲、白鷺を驚かし、夜半の頃、沙灘より飛び起つた。

【餘論】これは、離筵痛飲の光景で、唯だ見た儘を敘したのである。燈青の五字は明瑩、後半二句も自然に趣がある。

送岑徵君歸鳴臯山

岑徵君の鳴臯山に歸るを送る

岑公相門子。雅望歸安石。

岑公は相門の子、雅望、安石に歸す。

奕世皆夔龍。中台竟三坼。

奕世、皆夔龍、中台竟に三坼。

至人達機兆。高揖九州伯。

至人、機兆に達し、高く揖す九州の伯。

奈何天地間。而作隱淪客。

奈何か天地の間にして、しかも隱淪の客となる。

貴道能全真。潛輝臥幽鄰。

道を貴んで能く真を全うし、輝を潜めて、幽鄰に臥す。

探元入窅默。觀化遊無垠。

元を探つて、窅默に入り、化を觀て、無垠に遊ぶ。

光武有天下。嚴陵爲故人。

光武、天下を有し、嚴陵は故人たり。

雖登洛陽殿。不屈巢由身。

洛陽の殿に登ると雖も、巢由の身を屈せず。

余亦謝明主。今稱偃蹇臣。

余も亦た明主に謝し、今、偃蹇の臣と稱す。

登高覽萬古。思與廣成鄰。

高きに登つて、萬古を覽、廣成と鄰らむを思ふ。

蹈海寧受賞。還山非問津。

海を蹈むも寧ろ賞を受けむや、山に還るは津を問ふに非ず。

西來一搖扇。共拂元規塵。

西來、一たび扇を搖かし、共に拂はむ元規の塵。

【字解】

【一】相門子

王琦の解に「按ずるに、岑參感舊賦の序に云ふ、國家六葉、吾が門三相。江陵公は中書令となつて太宗を輔け、鄧國公は文昌右相となつて高宗を輔け、汝南公は侍中となつて睿宗を輔け、龍光を相承し、輔弼を繼出す。武后の朝に臨むに及び、鄧國公、これに由つて罪を得たり。先天中、汝南公又罪を得、朱輪翠轂、夢中の如しと。按ずるに、唐書に岑文本は鄧州棘陽の人、祖善方は後梁の吏部尙書、父之象は隋の邯鄲令、貞觀中、文本、中書令に歴官し、江陵縣子に封ぜらる。從子長倩、永淳中、兵部侍郎同中書門下平章事に累官し、垂拱中、文昌右相に拜し、鄧國公に封ぜられしが、來俊臣に誣陷せられ、市に斬らる。文本の孫義、累官して同中書門下三品に至り、景雲の間、侍中に進み、南陽郡公に封ぜらる。義の兄獻、國子司業となり、弟仲翔は陝州刺史、仲休は商州刺史、兄弟子姓、清要に在るもの數十人。義嘆じて曰く、物極まれば反す、以て懼るべしと。然れども抑退する能はず、太平公主の謀に與るに坐して、その家を誅藉せらる」とある。

【二】突世

累世、代代。

【三】夔龍、堯の時の名臣。【四】中台竟三塚、晉書天文志に「永康元年三月、中台星塚す、占して曰く、台星常を失へば、三公憂ふと。趙王倫、尋いで賈后を廢殺し、司空張華を斬る」とある。【五】九州伯、晉書に「桓玄曰く、父は九州の伯たり、兒は五湖の長たり」とある、父は即ち桓温。【六】隱淪、桓譚の新論に「天下の神人五、一に曰く神仙、二に曰く隱淪」とある。【七】全眞、莊子に「子の道、狂狂汲汲、詐巧虚偽の事なり、以て眞を全うすべきに非ざるなり」とある。【八】宵默、莊子に「至道の精は窈冥冥、至道の極は昏昏默默」とある。【九】遊無垠、淮南子に「上、蒼龍の野に遊び、下、無垠の門に出づ」とあつて、高誘の註に「無垠は形狀なきの貌」とある。【一〇】嚴陵、廣成、蹈海、皆前に見ゆ。【一一】僂蹇、僂、宏の後漢紀に「伏して、太原の周黨を見る、使者三聘、乃ち背て車に就く、陛下親しくこれを庭に見る。黨、伏して謁せず、僂蹇自ら高うし、逡巡退くを求む」とある。僂蹇は驕傲。【一二】元規塵、晉書に「庾亮、外鎮に居ると雖も、しかも、朝廷の權を執り、すでに上游に據り、強兵を擁し、趣向するもの、多く之に歸す。王導、内平かなる能はず、常に西風塵起るに遇へば、扇を擧げて自ら蔽ひ、徐に曰く、元規の塵、人を汚す」とある。

【題義】

岑微君は岑參で、すでに前に見えて居た。鳴阜は、河南府陸渾縣に在る山で、その詳は、矢張、説明して置いた。この詩は、岑參が鳴阜山に歸るに就いて、これを送る爲に作つたのである。

【詩意】

岑參は、元と相門の後裔であつて、當年の謝安石の如く、公輔の器量あるものとして、衆望これに歸して居る。しかし、それも其筈、代代皆夔龍の如き名臣のみを出したが、中台の星が坼けて、武后が朝に臨むに際して罪を得て、それから、格別立身するものが無かつたのである。凡そ至人と稱せらるるものは、すべての事物に就いて、其機兆を見破るものであり、その上、君の才識は、九州の伯をも高揖するに足る位であるが、如何なれば、君は天地の間に在つて、隱淪の客として、世に打つて出ぬのであるか。かくて道を貴び、これを己が身に體して、能く其眞を全うし、光彩を潜めて、幽僻に近い境地に高臥し、玄理を探つて、窈冥昏默の間に入り、宇宙の變化を見て、心神を無窮の域に遊ばせ、全然、この世と隔離して、道家の修養を旨として居る。むかし、光武帝が天下を有つて天子と爲つた時、嚴子陵は、その友達である處から、わざわざ招かれて、洛陽の皇居まで往くことは往つたが、依然、その節を持して、巢父、許由の如き隱者の高節を屈することなく、因つて、千古に傳せ

られて居る。君も亦た其通りで、如何に天子から招致されても、むざむざと之に應ずることは断じてないの、そして、今は其舊棲たる鳴阜山に歸臥することである。かく申す某も、一時は内廷に供奉したこともあつたが、尋いで、聖明の主に拜辭して、今は假蹇驕傲の臣と稱せられ居るので、高きに登つて、宇宙の永劫に互れるを感じ、仍つて、神仙の道を學んで、かの廣成子と鄰を爲さうと思つて居る。かくて、海を蹈んで死するとも、區區の榮譽を受けず、舊山に還らうと思へば、その路は分つて居て、格別津を問ふにも及ばない。もし、他日、西の方、長安に往つて、君と再會することがあつたならば、一たび、扇を搖かし、かの元規の塵にも比すべき、浮世の汚穢を拂ひ除けたいと思つて居る。

【餘論】起首四句は岑徵君の世系を述べ、至人達ニ機兆の四句は徵君の今の身分、貴道能全眞の四句は其修養、光武有天下の四句は徵君が高節を持して居ること、今次、鳴阜山に歸ること、其中に含まれて居る。余亦謝明主以下は、自己を併説し、西來一搖扇の二句を以て之を結び、爾我二人、超然高踏、長しへに世表に立つて居たいといふ希望を述べたのである。

送范山人歸太山

范山人の太山に歸るを送る

魯客抱白鶴。別余往太山。魯客、白鶴を抱き、余に別れて、太山に往く。

初行若片雲。杳在青崖間。はじめ行けば、片雲の若く、杳として、青崖の間に在り。

高高至天門。日觀近可攀。高高、天門に至れば、日觀近くして攀べし。

雲山望不及。此去何時還。雲山、望めども及ばず、ここを去つて、何の時か還らむ。

【字解】(一) 白鶴 一に白雞に作る。抱朴子に「芝草を求めむと欲して名山に入るには、靈寶符を帯び、白犬を牽き、白雞を抱き、白鹽一斗及び開山符を以て、大石の上に著く」とあり、續博物志に「陶隱居云ふ、道を學ぶの士、山に居る、宜しく白雞白犬を養ふべし」とある。して見ると、白雞の方が善い様に思はれる。(二) 初行若片雲 後漢書祭祀志に馬第伯の封禪儀記に「この朝、泰山に上り、中觀に至る、平地を去ること二十里、南向極望、觀ざるなし。仰いで天關を望む、谷底より仰いで抗峰を視るが如し。その高しと爲すや、浮雲を視るが如し。その峻たるや、石壁宵竊、道徑なきが如し。遙に其人を望む、端として朽瓦を行くが如く、或は白石の如く、或は雪の如し。これに久しうして、白きもの移つて樹を過ぐ、乃ち是れ人たるを知るなり」とある。(三) 天門、日觀 初學記に「太山記に曰く、盤道風曲して上る、凡そ五十餘盤、小天門、大玉門を經、仰いで天門を視れば、穴中より天窓を視るが如し。下より、古しへの封禪の處に至る、凡そ四十里。山頂の西巖を仙人石間となし、東巖を介邱となし、東南巖を日觀と名づく。日觀とは、雞一鳴する時、日を見る、はじめ出でむと欲す、長さ三丈ばかり」とある。

【題義】 范は山人で、名字閑歴等は一切分らぬ。太山は即ち泰山、山東濟南府泰安州の北五里に在る。この詩は、范山人の太山に歸るのを送つて作つたのである。

【詩意】 魯人范某は、今次、名山に入つて、芝草を采らむと欲し、因つて、白雞を抱き、予に別れて第一に泰山に行くとのことである。おもふに、はじめて其山に登り行くとき、遠くから見たならば、

その人は、定めて雲一片杳然として青青したる斷崖の間に在る様であらう。かくて、五十餘盤の險路を窮め、小天門から大天門まで行くと、日の出を見るに最も都合の善い名たたる日觀峰も、咫尺の處に在つて、容易に攀ぢ登ることが出来るであらう。君が登山の快は、かくの如くであるが、此方からいへば、白雲眼中に生じて、望めども及ばず、そして、一たび、此を去りし後は、又何時還つて來るか、まことに覺束ないことである。

【餘論】 初行若三片雲の四句は、泰山に登つて行く光景を想像したのであるが、専ら前人の紀行に憑據したので、決して、架空的ではない。結二句は、即ち送別の正意で、此去何時還といふのは、決して絶望的ではなく、その歸期の早からむことを囑望して云つたのである。

李太白集 卷十七

送韓侍御之廣德

韓侍御の廣德に之くを送る

昔日繡衣何足榮。昔日、繡衣、何ぞ榮とするに足らむ。

今宵貫酒與君傾。今宵、酒を貫うて、君と傾く。

暫就東山賒月色。暫く東山に就いて月色を賒り、

酣歌一夜送泉明。酣歌一夜、泉明を送る。

【字解】 一、繡衣 前に見えたが、漢書に「侍御史に繡衣直指あり、出でて奸猾を討め、大獄を治む」とあつて、顔師古の註に「衣するに繡衣を以てするは、これを尊寵するなり」とある。二、貫 漢書高帝紀に「つれに、王媪武負に従つて酒を買ふ」とあつて、顔師古の註に「貫は賒なり」とある。賒はおぎのりと訓し、あとから代金を拂ふといつて、其物を買ふこと。三、泉明 陶淵明、かつて彭澤の令たりしを以て、これを用ひて、韓侍御に擬したのである。野客叢書に「海録碎事に謂ふ、淵明、一字は泉明、李白の詩、多く之を用ふと。知らず、淵明を稱して泉明と爲すものは、蓋し唐の高祖の諱を避くるのみ。猶ほ、楊淵の楊泉と稱するが如し、一字泉明なるに非ざるなり。齊東野語、高祖、諱は淵、淵の字、盡く改めて泉となす。楊升菴曰く、今人、泉明を改めて泉聲と爲す、笑ふべし」とある。

【題義】 韓侍御、名字閔歷、ともに不詳、廣德は、唐書地理志に「江南西道宣城郡に廣德縣あり、本

と綏安縣、至德二載、名を廣徳と更むとある。それから、繆本には徳の字の下に一の令の字が多くなつて居る、すると、これは、矢張、廣徳の令であらう。この詩は、韓侍御といふ人が外を乞うて、廣徳縣令となり、その地に赴任するのを送つて作つたのである。

【詩意】君は、曩に侍御史として、就中、繡衣直指の顯職に居り、糾彈の大權を握つて居て、すばらしい勢であつたが、吾吾の目から見れば、格別榮譽とするにも及ばぬことであつて、それよりも、今日縣令となつて赴任される方が、餘程宜しく、ここに、酒を用意して、君と共に傾ける。かつて、東山に就いて、月明の色を賒り蓄へ、夜もすがら、爛醉浩歌して、古しへの陶淵明に比すべき君を送らうと思ふのである。

【餘論】この七絶は、格別の物ではないが、後半は、流石に餘情がある。賒二月色とへば、月の光を貰ひ溜めて置き、つまり、夜を永くし、そして、酣歌して此行を送らうと思ふといふ意である。

白雲歌送友人 白雲歌、友人を送る

楚山秦山多白雲。 楚山秦山、白雲多し、
白雲處處長隨君。 白雲、處處、長く君に隨ふ。

君今還入楚山裏。 君、今、還つて入る楚山の裏、

雲亦隨君渡湘水。 雲、亦た君に隨つて湘水を渡る。

水上女蘿衣白雲。 水上の女蘿、衣は白雲、

早臥早行君早起。 早く臥し、早く行き、君早く起て。

【餘論】蕭士贊の説に「この詩は、すでに前(第六卷)に見ゆ、ただ首尾數語のみ同じからず、しかも、此は尾語やや拙、恐らくは、是れ初本未だ改定を経ざるもの、今、兩つながら之を存す」とあつて、仍つて、此では解釋を略すことにした。

送通禪師還南陵隱靜寺 通禪師の南陵の隱靜寺に還るを送る

我聞隱靜寺。 山水多奇蹤。 我聞く隱靜寺、山水、奇蹤多しと。

巖種朗公橘。 門深杯渡松。 巖には朗公の橘を種る、門は深し杯渡の松。

道人制猛虎。 振錫還孤峰。 道人、猛虎を制し、錫を振つて、孤峰に還る。

他日南陵下。 相期谷口逢。 他日、南陵の下、相期して谷口に逢はむ。

【字解】【一】朗公橋、杯渡松。ともに題義の項に見ゆ。【二】道人。釋氏要覽に「智度論に云ふ、道を得るもの、名づけて道人と爲す。餘の出家、未だ道を得ざるものも、亦た道人と名づく」とある。【三】制猛虎。法苑珠林に「晉の沙門于法蘭は、高陽の人なり。かつて、夜、坐禪す。虎、その室に入り、因つて、牀前に蹲す。蘭、手を以て其頭を摩す、虎、耳を奮つて伏し、數日乃ち去る」とある。【四】振錫。沈約の法王寺碑に「錫を振つて經行、祇林宴坐」とある。錫は、釋家執るところの錫杖、一名德杖、一名智杖、金環あつて之を繞り、錫錫の聲を作し、行く時は、以て歩趨を節するものである。

【題義】通禪師は、如何なる人か分らぬ。しかし、隱靜寺は、なかなか名高い寺で、太平府志に「隱靜寺は、繁昌縣の東南二十里隱靜山に在り、一名五峰寺。山に碧霄、桂月、鳴磬、紫氣、行道の五峯あり、寺は五峰の會に當り、巖岫拱合、林木幽奇、古澗委折、殷雷地に轟く。相傳ふ、寺は杯渡禪師の建つるところ、飛錫、定基、江神木を送り、諸神異を現す。寺外に十里の松徑あり、傳へて云ふ、禪師の手植と。或は曰く、寺を距つること二里ばかり、雙松對峙、勢、虬龍の若きものあり、即ち師の手澤と。又かつて新羅の五葉松を取つて、寺西に種ゑ、今に至つて、尙ほ存す、と。舊誌又言ふ、寺に朗公橋、杯渡擔ふるところの頻伽寫一雙あり、皆晉宋の遺跡、又木米鹽醬等の池あり、言ふ、寺を翔むる時、諸物皆これより出づと云ふ。舊額に云ふ、江東第二禪林」とある。それから、繁昌縣は、南唐の時南陵を析つて分置したので、唐時に在つては、なほ南陵に屬して居た。そこで、この詩は、通禪師が南陵縣の隱靜寺に歸るを送つて作つたのである。

【詩意】わが聞くとところに據れば、隱靜寺は、名だたる大伽藍だけに、珍らしい勝蹟が殊に多く、朗

公橋は巖間に種ゑられ、そして、門を深く立ちこめて、杯渡松といふのが繁茂して居る。禪師は、道を得た人であるから、その法力は、猛虎を伏すに足るべく、そして、錫杖を振り立てて、孤峰の頂たる庵へ歸つて行かれる。他日われ若し南陵縣に出かけたならば、谷口に於て、相逢ふ様に致したい。【餘論】前半四句は、隱靜寺の勝概を敘して、一氣呵成に出來て居る。五六は、禪師の高徳を寫し、七八は、他日の再逢を期したので、極めて、餘情がある。

送友人

友人を送る

青山橫北郭。白水遶東城。青山、北郭に横はり、白水、東城を遶る。

此地一爲別。孤蓬萬里征。此地、一たび別を爲せば、孤蓬、萬里に征く。

浮雲游子意。落日故人情。浮雲、游子の意、落日、故人の情。

揮手自茲去。蕭蕭班馬鳴。手を揮つて、茲より去る、蕭蕭として、班馬鳴く。

【字解】【一】北郭。郭は人民の聚居するところで、先づ市と見れば善い、北郭は郭北に同じ。【二】白水。地名だともいふが、青山白水といふ熟字もあるから、ただ川と見て善からう。【三】東城。城東に同じ。【四】孤蓬。處定めず飄泊することは、孤蓬の風に隨つて飄轉するが如き故に云ふ。曹植の詩に、轉蓬離本根、飄飄隨長風、類此客游子、捐軀從遠戍といひ、鮑照の蕪城賦に孤蓬自振、驚沙坐飛とあるに本づく。【五】蕭蕭班馬鳴。詩經の蕭蕭馬鳴に本づく、蕭蕭は開眼の貌、班馬の班は別。

【題義】これは、友人の遠きに往くを送る爲に作つたので、即ち送別の詩である。

【詩意】青山は郭北に横はり、白水は城東を繞る。この地に於て、一たび別を爲せば、さながら、孤蓬の空に飄るが如く、やがて、萬里の遠きに征遊するのである。浮雲は、もとより定まるなく、遊子の意、亦た此の如く、落日は將に沈まむとし、故人戀戀の情、如何に忍ぶべきか。然るに、君は意を決して、これより立ち去らうといふので、蕭蕭として馬が嘶くが、君は乃ち其馬に乗つて行くのである。

【餘論】起首二句は送別の地、ここに對聯を爲したから、三四兩句は、別れむとすることを述べ、わざと流走して之を成し、對せずして、しかも、なほ對して居る。五六は、主として、送者の情、七八は、直に別るるの景、しかも、語盡きて意なほ盡きざる趣がある。嚴滄浪は「五六、澹蕩淒遠、多多的評に勝れり」といひ、王翼雲は「前解は送別の地を敘し、後解は友を送るの情を言ふ」といひ、沈確士は「蘇李の贈言、唏噓の語多くして、蹶蹙の聲なし。古人の意、不盡に在るを知る、太白猶ほ斯旨を失はず」といひ、乾隆御批に「首聯は整齊、承は流走して下り、頸聯は勁健、結、蕭散の致あり、大匠、斤を運せば、自ら規矩を成す」といひ、ともに肯綮に中つて居る。

送別

送別

斗酒渭城邊。壚頭醉不眠。

斗酒渭城の邊、壚頭酔うて眠らず。

梨花千樹雪。楊葉萬條煙。

梨花千樹の雪、楊葉萬條の煙。

惜別傾壺醕。臨分贈馬鞭。

別を惜んで、壺醕を傾け、分るるに臨んで、馬鞭を贈る。

看君頽上去。新月到應圓。

看る君が頽上に去るを、新月到らば應に圓なるべし。

【字解】一渭城 水經註に「長安は故の咸陽なり。漢の高帝、名を新城と更む。武帝の元鼎三年、別に渭城を爲る、長安の西北、渭水の陽に在り」とある。史記正義に「括地志に云ふ、咸陽の故城、また渭城と名づく、雍州の北五里に在り、今の咸陽縣東十五里」とあり、太平寰宇記に「故の渭城は、今の縣の東北二十二里、渭水の北に在り、即ち秦の杜郵、その城、周八里、秦は孝公より始皇に至るまで、皆ここに都す。武帝の元鼎三年、名を渭城と更む。後漢には省く、地を併せて長安に入る、故に此城存す」とある。二壚頭 史記集解に「韋昭曰く、壚は酒肆なり、土を以て墮と爲し、邊高くして壚に似たり」とあり、漢書の註に、「如淳曰く、酒家、肆を開いて客を待ち、酒壚を設く、故に壚を以て肆に名づく。臣瓚曰く、壚は酒瓮なり。師古曰く、二説、皆非なり。壚は賣酒の區なり、その一邊高く、形、鍛家の壚の如きを以て、故に名を取るのみ、即ち火爐及び酒瓮を謂ふに非ざるなり」とある。三壺醕 初學記「醕は首酒なり」玉篇「醕は美酒なり」正字通「俗、醕と呼んで尾酒となし、醕を頭酒となす」とある。四頽 縣名、河南道潁川汝陰郡に在る、太平寰宇記に「潁上縣は、地、潁水の上游に枕むを以て名と爲す」とある。

【題義】送別とは、別に際して友人を送つたので、前首と同義である。

【詩意】渭城の邊なる旗亭に於て、別の酒を酌み、やがて、一斗の多きに及び、壚頭に酔つたが、しかし、離愁に堪へかねて、遂に眠らない。時しも春の最中、梨花は、千樹に綻びて、さながら、雪

と見まがふばかり、柳は葉を抜き出し、萬條の枝の裊裊と靡く様は、煙に似て居る。そこで、別を惜んで、壺中の美酒を傾け、さて愈よ手を分つといふ時には、餓として、馬鞭を贈つた。今しも、細い新月がほのめいて見えるが、これから、君が潁川の岸上に往き著く頃には、すでに、十數日を経過し、この月も、きつと圓くなるであらう。旅は、兎に角難儀なもので、従つて、手間が取れ易いから、精氣を付けて行くが善い。

【餘論】 滄浪詩話に「太白の詩、斗酒渭城邊、壚頭醉不眠は、乃ち岑參の詩、誤つて編入す」とある、王琦は之を承けて「按ずるに、文苑英華、亦た此詩を以て岑參の作となし、題を送楊子といひ、岑集、亦た之を載す」といつて居る。して見れば、最早、疑を挾む餘地も無いので、無論、岑參の詩である。しかし、二人は、同時代の人で、その風調も、時に相近いものがあるから、かくの如く誤られるのであらう。それから、又嚴滄浪は前聯を評して「今人これを爲さば、即ち村學究の課聯と成らむ」といつたが、これは尤も至極と思はれる。

江上送女道士褚三清遊南嶽

江上にて女道士褚三清の南嶽に遊ぶを送る

吳江女道士。頭戴蓮花巾。

吳江の女道士、頭に蓮花巾を戴く。

霓衣不濕雨。特異陽臺神。
霓衣、雨に濕はず、特に陽臺の神に異なり。
足下遠遊履。凌波生素塵。
足下遠遊の履、波を凌いで、素塵を生ず。
尋仙向南嶽。應見魏夫人。
仙を尋ねて南嶽に向ふ、應に見ゆべし魏夫人。

【字解】 一 蓮花巾 太平御覽に引ける登真隱訣に「太元上丹靈玉女は、紫華芙蓉巾を戴く」とある。二 陽臺神 巫山の神女が旦に朝雲となり、暮に行雨となり、朝朝暮暮、陽臺の下といへること、すでに前に見ゆ。三 遠遊履 洛神賦に踐遠遊之文履、曳露綰之輕裾、凌波微步、羅襪生塵とあつて、呂向の註に「遠遊は履の名、水波の上に歩す、塵を生ずるが如きなり」とある。四 魏夫人 南岳魏夫人傳に「魏夫人は、晉の司徒劇陽文康公舒の女、名は華存、字は賢安、幼にして道を好み、靜默恭謹、志、神仙を慕ひ、眞を味ひ、玄に耽り、冲舉を求めむと欲し、氣液を吐納し、攝生夷靜、世に住すること八十三年、晉の成帝咸和九年、歲甲午に在るを以て、太乙元仙、騰車を遣して來り迎ふ。夫人、乃ち劍に託し、形を化して去る。位、紫虛元君領上眞司命南岳夫人たり、秩を仙公に比し、天台大霍山を治めしめ、洞壺中、下訓を主り、道を奉じて教授す」とある。それから、當に仙となるべきもの、男を眞人、女を元君といふことである。

【題義】 女道士褚三清は、如何なる人か分らぬ。唐代に於ては、老子を以て其祖となし、厚く之を尊崇し、且つ道教を保護した爲に、道觀が非常に殖え、そして、女道士も随分多かつた。南嶽は即ち衡山、今の湖廣衡州府衡山縣の西北三十里に在つて、衡陽縣及び長沙府の界に接して居る。この詩は、揚子江上に於て、女道士の褚三清といふものが、衡山に遊ぶのを送つて作つたのである。

【詩意】 吳江の女道士褚三清は、頭に蓮花巾を戴き、虹の如き衣裳は、雨に遇つても濡れず、古しへ

陽臺の雲を起した巫山の神女とは、甚だ異なつた趣がある。それから、足下には遠遊の文履を踐み、波を凌いで歩すれば、素塵を生ずるが如く見える。何は兎もあれ、道を得た人であるから、尋常の女性とは、全然違つて居る。今次、仙を尋ねて、南、はるかに衡山に向ふさうであるが、彼の地に至らば、必ず魏夫人に遇ひ、愈よ其道に就いて、一段の進境を見ることであらう。

【餘論】前半四句は、女道士の風貌、後半四句は、遠遊に及び、結末には、南嶽を點出して、題意を全うしたのである。

送友人入蜀

友人の蜀に入るを送る

見説蠶叢路。崎嶇不易行。

見るならく蠶叢の路、崎嶇として行き易からず。

山從人面起。雲傍馬頭生。

山は人面より起り、雲は馬頭に傍うて生ず。

芳樹籠秦棧。春流遶蜀城。

芳樹、秦棧を籠め、春流、蜀城を遶る。

升沈應已定。不必問君平。

升沈、應に已に定まるべし、必ずしも、君平に問はず。

【字解】【一】見説。見聞するといふことで、ここでは略ぼ開説と同じで、必ずしも李白が曩に經過したといふことではない。【二】蠶叢。古しへの蜀の君主の名、前に見ゆ。【三】崎嶇。凸凹甚だしきこと。【四】芳樹。春樹。【五】籠。掩蔽する。【六】

秦棧。蜀の棧道は、秦の時、はじめて開いたから、秦棧といふので、三才圖會に詳記して「蜀に入るものは、寶雞より始むべし。寶雞は、古しへの陳倉縣なり。縣の南門を出づれば、渭水を渡り、十五里にして、益州鎮に至り、又十里にして、山を登れば棧道に入る。水の絶ゆる處には、棧を崖壁の間に挿み、山に徧し、木を架し、下は白水江に臨み、又鳳嶺に上る、上下五十里、陳倉に抵る、路峻嶮、わづかに單人を容る、西行二百里、四十五里ばかりにして、その嶺に至り、復た下ること十里にして寺あり、樹石蒼翠錯落、棧中第一の絶勝なり」とある。【七】蜀城。即ち成都。【八】升沈。浮沈に同じ。【九】君平。漢の嚴遵、字は君平、屢ば前に見ゆ。

【題義】詩意を考ふるに、これは、友人が左遷されて、蜀地に往くのを送つて作つたのである。

【詩意】君は今左遷せられて、遠く蜀地に赴くさうで、人の語るを聞けば、かの蜀に通ずる路は、崎嶇高低、なかなか行き易くないといふことである。仰ぎ見れば、高山突兀として、直に行人の面前に聳え、俯して瞰れば、白雲濛濛として、乗つて居る馬の頭の邊から生ずる位。山は、あくまで高く、谷は、あくまで深く、君の道中も、随分難儀な事と思はれる。しかし、その間には、又觀るべき風景もあるのだ、芳樹鬱蒼として、秦時以來の棧道に掩翳し、春流潺湲として、成都を繞つて流れるから、これを見たらば、少しは、自ら慰むるに足るであらう。但し、一身上の升沈榮辱に至りては、前以て、天の數が、ちやんと定まつて居るから、かの有名なる易者の嚴君平に問ふにも及ばない。されば、君も、さばかり心を痛めずに、氣を大きくして、蜀中の風景でも見て、樂むのが第一であらう。

【餘論】見説の二字は、前六句を一貫し、結二句では、慰藉の意を述べ、それで、送別の正文を爲して居る。前聯は、至險至深の狀を極めた代りに、後聯は、穢穢工麗、それで兩兩相對して、愈よ面

白い、なほ前聯に就いて、王翼雲は「山從の二句、是れ上の崎嶇不易行の五字を承く、好景として會する勿れ」といひ、嚴滄浪は「領聯、意象偪反、乃ち高奇を見る」といひ、後聯に就いて、王翼雲は「前解、甚しく蜀道の崎嶇を言ふ、後解、友の蜀に入るを言ひ、亦た崎嶇すでに過ぐるより説く」といひ、結末七八兩句に就いて、王翼雲は「七八、升沈を借問して、結と爲す。升沈は、人の遇合に高低あり、行路に上下あるが如きなり。君平は、漢の嚴遵の字、嚴、トを以て成都の市に隠る、高士なり、今友人險を涉つて以て成都に至れば、崎嶇すでに經歷して過ぐ、すでに、升沈定まるあるを知らば、必ずしも更に君平に決せず」といつた。なほ全首の總評として、乾隆御批には「これ五律の正宗なり。李夢陽曰く、疊景は意必ず二、闊大は半ば必ず細、極めて詩家の微指を得たり。この詩、領聯は次句に承接し、語意奇險、五六は穠纖、領聯は蜀道の難を極言し、五六、又風景の樂むべく、以て征夫を慰むるを見る、これ兩意なり、一結翻案、更に勝致饒し」といつてある。

送趙雲卿

趙雲卿を送る

白玉一杯酒。綠楊三月時。春風餘幾日。兩鬢各成絲。

白玉一杯の酒、綠楊三月の時。春風、幾日を餘す、兩鬢各絲を成す。

秉燭唯須飲。投竿也未遲。

燭を秉つて、唯だ須らく飲むべく、竿を投ずる、また未だ

如逢渭川獵。猶可帝王師。

もし渭川の獵に逢ば、猶ほ帝王の師たるべし。遅からず。

【餘論】王琦の説に「この篇、十一卷内、贈錢徵君少陽の詩と一字の差異なし、蓋し編者重ねて入れて、未だ刪らず」とあるから、一切省略することにする。

送李青歸華陽川

李青の華陽川に歸るを送る

伯陽仙家子。容色如青春。

伯陽は仙家の子、容色、青春の如し。

日月祕靈洞。雲霞辭世人。

日月、靈洞に祕し、雲霞、世人に辭す。

化心養精魄。隱几窅天真。

心を化して、精魄を養ひ、几に隱つて、天真窅たり。

莫作千年別。歸來城郭新。

千年の別を作す莫れ、歸り來つて城郭新なり。

【字解】【一】伯陽 伯陽は即ち老子。列仙傳に「老子、姓は李、名は耳、字は伯陽、陳の人なり、殷の時に生まれ、周の柱下史となり、轉じて守藏史となり、八十餘年を積む」とあり、史記に「二百餘年、時に隱君子と稱す」とある。【二】精魄 江淹の詩に「隱淪駐精魄」とある。【三】隱几 莊子に「南郭子綦、几に隱つて坐す」とあつて、陸德明の音義に「隱は憑るなり」とある。【四】城郭新 丁令威の歌に、去家千年今始歸、城郭如故人民非とある。

【題義】李青は如何なる人か分らぬが、詩意を考ふると、いづれ道教を奉じて、神仙の術を學んで居る人に見える。胡三省の通鑑註に「華陽川は、饒州華陽山南に在り」といひ、雍勝略に「華陽水は、漢中府褒城縣西二十五里に在り、源は牛頭山に出で、南流して漢水と合す」とある。蕭本に、南葉陽川とあるは、斷じて誤である。この詩は、李青といふものが、華陽川に歸るを送つて作つたのである。

【詩意】老子に比すべき君は、矢張り、仙家の子であつて、その容貌顔色は、若若しくして、青春の壯年と同じである。日月は、靈洞の中に秘して、終歲かがやきわたり、雲霞は、世人に辭して、自然に別趣があるが、これは、君の様な人でなくては分らぬ。君は、平生修養の結果、凡心を化して精魄を養ひ、凡に憑つて沈思しつゝ、天真を蘊んで居る。むかし、丁令威は、千年の後、歸つて來て、城郭新にして、舊日に似ざるを嘆じたが、かくては、一別の後、再び逢はぬことに成るから、もつと早く歸つて來て、屹度再會を爲したいものである。

【餘論】伯陽は、同姓の故を以て比擬したので、例の筆法である。前聯は、外界の景況、後聯は内心の修養、結末に於ては、丁令威を借ひ來り、起首の伯陽と相對して、自然の好結構を成して居る。

送舍弟

舍弟を送る

吾家白額駒。遠別臨東道。吾が家の白額の駒、遠別、東道に臨む。

他日相思一夢君。

他日相思一たび君を夢む。

應得池塘生春草。

應に池塘、春草を生ずるを得べし。

【字解】【一】吾家白額駒。魏志に「曹休、同行して、北に歸り、太祖に見ゆ。太祖、左右に謂つて曰く、これ吾が家の千里の駒なり」とある。王琦の解に「吾が家の白額駒は、即ち吾が家の千里の駒の意、而して、改めて李氏の事を用ふるのみ」とある。晉書に「武昭王、諱は嵩、字は玄盛、姓は李氏、漢の前將軍廣の十六世の孫なり。かつて、太史令郭舉及び其同母弟宗繇と同宿す。舉、起つて繇に謂つて曰く、君、當に、位、人臣を極むべし、李君、國土の分あり、家に驕草馬あり、白額駒を生ず、これ其時なり」と。呂光の末、京兆の段業、自ら涼州の牧と稱し、熾煌の太守孟敏を以て沙州刺史となし、玄盛を效穀令に署す。敏、尋いで卒す。護軍郭謙等、玄盛、溫毅にして惠政あるを以て、推して熾煌太守となす。玄盛、初め之を難んず。宗繇、玄盛に言つて曰く、君、郭舉の言を忘れたるか、白額駒、今生ず、と。玄盛、乃ち之に従ふ」とある。【二】池塘生春草。謝靈運、夢に從弟惠連を見て、この五字を得た、すでに前に見ゆ。

【題義】舍弟とはあるが、即ち從弟であらう。その名は分らぬ。これは、從弟某の遠遊を送つて作つたのである。

【詩意】汝は、吾が家の白額駒と稱すべく、後年には、素晴らしく立身するに相違ない。そして、今、遠別せむとするに際し、東道に臨んで汝の行を送るのである。他日相思の極、一たび、汝を夢に見たならば、かの謝靈運が惠連を夢みて、同時に、池塘生春草の五字を得たと同じく、われも、屹度汝の御蔭で、名句を得るに相違ない。

【餘論】白額虎は、李嵩の故事で、例の如く、同姓人の典を用ひたのは、その巧處である。それから、池塘生春草は、族弟に關する故事で、これも用ひ得て極めて靈活である。要するに、この詩の妙は、この兩故事を巧に融合して運旋した處に在るので、寸鐵人を殺すが如きは、正に一奇格を推すべきものである。

送別得書字

送別書の字を得たり

水色南天遠。舟行若在虛。

水色、南天遠く、舟行、虛に在るが若し。

遷人發佳興。吾子訪閒居。

遷人、佳興を發し、吾子、閒居を訪ふ。

日落看歸鳥。潭澄羨躍魚。

日落ちて歸鳥を看、潭澄んで躍魚を羨む。

聖朝思賈誼。應降紫泥書。

聖朝、賈誼を思ふ、應に降すべし紫泥の書。

【字解】一 聖朝思賈誼。漢書に「賈誼、長沙王の太傅となる。後歲餘、帝、誼を思つて之を徵す」とある。二 紫泥書。紫泥は、璽書を封するに用ふるもので、これは詔書をいふ。その詳、前に見ゆ。

【題義】この詩は、人の遠行を送る時、何かの句を分つて韻をした處が、李白は書の字を取りあて、仍つて、之を作つたといふのである。

【詩意】遠く南天を望めば、水色渺渺として、舟の行くは、さながら太虚に在るが如く見える。君は不幸にして、遷客となつたが、この景色に對して、覺えず佳興を催し、そして、特に吾が閒居を訪はれたのは、まことに嬉しい。やがて、日落つれば、時を指して歸り行く鳥が見え、淵が澄んでは、そこに勢よく躍る魚が羨ましい。この鳥や魚などは、各、託するところがあつて、その栖に安んじて居るので、君は之を見ると、おのが一身、却つて之に及ばぬといつて、浩嘆するであらう。しかし、聰明の天子は、日ならずして、賈誼の如き逸才ある君の事を思ひ出され、紫泥の詔書を下して、屹度召し還されるであらうから、くよくよせずと、しばらく耐らへて、その時の來るのを待つて居るが善い。

【餘論】起二句は實景で、描寫極めて巧妙である。前聯、遷人吾子は、同じ人を指して、稍やくどいやうであるが、一氣呵成に出來て居て、別に一格を爲して居る。後聯は、魚鳥の其處を得たるに因つて、遷人の身の上に反襯し、そして、賈誼を倩ひ來つて收束し、亦た極めて切實である。

送麴十少府

麴十少府を送る

試發清秋興。因爲吳會吟。

試に清秋の興を發し、因つて、吳會の吟を爲す。

碧雲斂海色。流水折江心。

碧雲、海色を斂め、流水、江心を折く。

我有延陵劍。君無陸賈金。我延陵の劍あり、君に陸賈の金なし。
艱難此爲別。惆悵一何深。艱難、ここに別を爲す、惆悵、一に何ぞ深き。

【字解】一、吳會。會は會稽、前に數ば見ゆ。二、延陵劍。延陵の季子、將に、西、晉に聘せむとし、寶劍を帯びて、徐君を過ぎしこと、前に見ゆ。三、陸賈金。漢書に「陸賈、五男あり、越に使せしところの橐中の裝を出し、千金に賣つて其子に分ち、子ごとに二百金、生産を爲さしむ」とある。

【題義】麴十の名字、閔歴は分らぬ。この詩は、某縣の尉たる麴某を送つて作つたのである。

【詩意】時しも清秋の頃、詩興自ら勃如たるに因り、吳會に因める詩を作つて、君の此行を送らうと思ふ。折から、碧雲のび廣がりて、海色を斂め、流水は、秋漲の餘勢、すさまじく、江心から曲折して奔注する。この間を旅すると、さすがに、悽愴の想を爲すであらう。われには、心中君に贈るを許せし延陵の劍あれども、君は、猶ほ奔走に衣食して、子息等に分配する陸賈の金とてはない。されば、ここに別を爲すに際して、浮世の艱苦、自ら除き難く、惆悵の念愈よ深きに堪へぬ。

【餘論】碧雲流水の十字は、寫景明靚であつて、嚴滄浪は「頷聯、雲水卷舒の狀を寫し、必ず斂折の二字を須めて、方に合す。他字は、待つ能はざるなり。當に知るべし、句中自ら正法眼あり、只だ具足を求むるを。新を好み、怪を作す、皆野狐なり」とある。頸聯は、自他を分寫し、以下、この別の太だ苦なる所以を述べたので、讀者も亦た惆悵、自ら禁せざるの思がする。大體に於て、紆餘曲折、言盡きて意盡さざるの趣がある。

送張秀才謁高中丞并序 張秀才の高中丞に謁するを送る、并に序

余時繫尋陽獄中。正讀留侯傳。秀才張孟熊。蘊滅胡之策。將之廣陵。謁高中丞。余喜子房之風。感激于斯人。因作是詩以送之。

【訓讀】余、時に尋陽の獄中に繫がれ、正に留侯傳を讀む。秀才張孟熊、胡を滅するの策を蘊み、將に廣陵に之いて、高中丞に謁せむとす。余、子房の風を喜び、斯人に感激し、因つて、是詩を作り、以て之を送る。

秦帝淪玉鏡。留侯降氛氳。秦帝、玉鏡を淪め、留侯、氛氳を降す。

感激黃石老。經過滄海君。黃石老を感激し、滄海君を經過す。

壯士揮金槌。報讐六國聞。壯士、金槌を揮ひ、讐を報じて六國に聞こゆ。

智勇冠終古。蕭陳難與羣。智勇、終古に冠たり、蕭陳、與に羣し難し。

兩龍爭鬪時。天地動風雲。兩龍、争鬪の時、天地、風雲を動かす。

酒酣舞長劍。倉卒解漢紛。

酒酣にして、長劍を舞はしめ、倉卒、漢紛を解く。

宇宙初倒懸。鴻溝勢將分。

宇宙、初めて倒懸、鴻溝、勢、將に分れむとす。

英謀信奇絕。夫子揚清芬。

英謀、信に奇絶、夫子、清芬を揚ぐ。

胡月入紫微。三光亂天文。

胡月、紫微に入り、三光、天文を亂る。

高公鎮淮海。談笑却妖氛。

高公、淮海に鎮し、談笑、妖氛を却く。

採爾幕中畫。戡難光殊勳。

爾が幕中の畫を採り、難を戡して、殊勳を光かす。

我無燕霜感。玉石俱燒焚。

我に燕霜の感なく、玉石俱に燒焚。

但灑一行淚。臨歧竟何云。

但一行の涙を灑ぎ、歧に臨んで竟に何をか云はむ。

【字解】

【一】玉鏡 尙書帝命諭に「桀、玉鏡を失ひ、その噬虎を用ふ」とあつて、鄭玄の註に「玉鏡は、清明の道を謂ふ」とある。【二】留侯 張良、後、留に封ぜられし故に云ふ。【三】黃石老 張良、圯上の老人に遇うて、兵書を受けしこと、前に見ゆ、老人は即ち黃石公。【四】滄海君 留侯世家に「東、倉海君に見え、力士を得、鐵椎重さ百二十斤を爲る。秦皇帝東遊するや、良、客と秦皇帝を博浪沙中に狙撃し、誤つて副車に中つ」とある。【五】蕭陳 蕭何と陳平。【六】兩龍爭鬪時 鴻門の會を指す。【七】舞長劍 史記に「鴻門の會、范增出でて項莊を召し、謂つて曰く、若、入つて、前んで毒を爲し、毒畢らば、請うて劍を以て舞ひ、因つて、沛公を坐に撃つて之を殺せ」と。莊、入つて毒を爲し、毒畢つて曰く、軍中以て樂を爲すなし、請ふ劍を以て舞はむ。項王曰く、諾」と。項莊、劍を抜いて起つて舞ふ。項伯、亦た劍を抜いて起つて舞ひ、常に身を以て沛公を翼蔽す」とある。【八】鴻溝

勢將分 史記に「漢の四年、項王、漢と約し、天下を中分し、鴻溝以西を割いて漢となし、鴻溝よりして東を楚となす。項王、すでに約し、乃ち兵を引いて、解いて東歸す。漢、西に歸らむと欲す。張良陳平、説いて曰く、漢、天下の大半を有し、諸侯皆これに附く。楚、兵罷れ、食盡く、これ天、楚を亡ぼすの時なり。如かず、この飢に因つて、遂に之を取らむには。今釋つて撃たず、これ謂はゆる虎を養うて自ら患を遺すなり」と。漢王、これを聽るす」とある。【九】紫微 天宮。【一〇】三光 日月星辰。【一一】戡 勝つ、克つ。【一二】燕霜感 太平御覽に「鄒衍、燕の惠王に事へて患を盡す、左右、これを譖す、王、これを撃ぐ、天を仰いで哭す、夏五月、天これが爲に霜を降す」とある。【一三】玉石 書の胤征に「火、崑岡に炎ゆれば、玉石俱に焚く」とある。

【題義】

張秀才は、進士の張孟熊であるが、その字并に閱歴等は分らない、高中丞は、即ち高適。舊唐書に「高適は、渤海蓼の人なり。諫議大夫となり、氣を負うて敢言す。上皇、諸王を以て分鎮す。適、切諫すれども聽かれず。永王叛するに及び、肅宗、その論諫素あるを聞き、召して之を謀る。適、因つて、江東の利害を陳じ、永王必ず敗れむといふ。上、その對を奇とし、適を以て、御史大夫揚州大都督府長史淮南節度使を兼ねしめ、詔して、江東節度使來瑱と本部の兵を率ゐて、江淮の亂を平げしむ。安州に會す。師、將に渡らむとして、永王敗る。適、喜んで王霸の大略を言ひ、功名を務め、節義を尙び、時の多難に逢ひ、安危を以て己の任となす。然れども、言、その實に過ぎ、大臣に輕んせらる」とある。留侯傳は、史記世家第二十五で、本と留侯世家であるが、傳といつたのは、變稱である。題の意は、進士張某が御史中丞高適に謁せむが爲に、發程するに就いて、これを送るといふので、序は、稍や詳しく、その意を説明したのである。予は、今しも、尋陽の獄中に繋がれて居るが、

偶たま史記しきの留侯世家りうこうせいかを讀んで居た。ここに、秀才張孟熊しうさいちやうまうゆうといふもの、胡人こじんを滅すの策さくを胸中に抱き、仍よつて、廣陵くわうりやう、即ち揚州やうしやうに赴き、高中丞かうちゆうじやうに謁し、胸中きやうちゆうを吐露して、一奇いきを劃せむとして居る。予は、もとより張子房ちやうしはうの風ふうを喜ぶものであるから、この人の氣概きがいに感激かんげきし、因よつて、この詩しを作つて、その行かうを送つた。

【詩意】秦しんの始皇帝しきわうていは、天下てんかを治めること、兎角とかく暴虐ぼうぎやくであつて、清明せいめいの道みちを失つた。そこで、張良ちやうりやうは、世よに出で、これに對抗たいかうして、氛氳ふんこんの氣きを吐いた。かくて、張良ちやうりやうは、黃石公くわうせきこうを感動かんどうせしめ、仍よつて、兵へい書を授けられたこともあるし、その初はじめ、滄海さうかい君くんの處ところを經過けいこうして、そこに久しく滯留たいりゆうして居る内に、壯さう士しを得、百二十斤ひやくにじゅうにんの鐵槌てつちを揮つて、韓かんの仇あだを報ずる爲ために、始皇しきわうを博浪沙はくらうさ中に狙撃そげきし、その事は、六國りくごくの間に傳へられた。張良ちやうりやうの智勇ちゆうゆうは、終古しゆうこに冠くわんとして、他に比類ひるいなく、蕭何せうか・陳平ちんぺいなどいふ連中れんぢゆうは、到底だうていくらべ物ものにならない。そこで、秦しんの滅後めつご、楚漢そかん對立たいりつの世よとなり、項羽かうりやうと沛公はいこうとは、兩龍りやうりゆう互たがひに爭鬪さうたうして、天地てんちに風雲ふううんを動かすの趣おもひがあつた。かの鴻門かうもんの會かいに於て、酒酣しゆたかなるとき、項莊かうさうが劍舞けんぶし、隙間すきまがあらば、漢王かんわうを座上ざじやうに討ち取らうとした時とき、張良ちやうりやうありたればこそ、倉卒さうそつの間に於て、漢かんの爲ために、紛らん紜んを解とくことが出來た。それから、楚漢そかんの爭あらそひが久しく續つづき、九州きゆうしゆうの人民じんみんは、倒懸たうけんの苦くるしみに惱なやみ、やがて、鴻溝かうこうを境界きやうがいとして、天下てんかを中分ちゆうぶんした時とき、張良ちやうりやうは、この機會きかいに乗じて、是非ぜいひとも、楚そを亡ほろびして、天下てんかを統一いつしせねばならぬといひ、程ほどなく、その計畫けいかくが實現じつげんされたので、その英謀えいぼうは、まことに、奇絶きぜつと

稱しやうすべく、長とこしへに、清芬せいふんの名聲めいせいを揚あげて居る。今いましも、祿山ろくざんの亂らん、未だ平定へいていせず、胡天こてんの月つきは、天宮てんきゆうに進入しんにんし、三光さんかうは天文てんもんを亂みだし、まことに慘澹さんたんたる有様ありさま。ここに、高中丞かうちゆうじやうは、淮海わいはいに鎮撫ちんぶし、談笑だんせうして妖氛やうふんを却しりぞけむとして居るから、君きみが一たび往ゆいて、これに謁見えつけんすれば、きつと、幕賓まくひんとして、その謀はかりごとを用ひ、やがて、國難こくなんを治めて、殊勳しゆこんを天下てんか後世こうせいに耀かがやかすに相違さうゐない。われは、實際じつさい、罪つみを犯おかして、獄中ごくちゆうに繫つながれて居るので、かの鄒衍そうえんが燕地えんちに霜しもを降ふりしたなどいふ様な冤罪ゑんざいではなく、もとより、玉石ぎよくせきともに焚やくるを分ぶんとして居る。ここに、君きみの去さるに臨のぞみ、一行かうの涙なみだを灑そそいで、その行かうを送り、何も言いひ得えずして、悽愴せいさうの感かんに堪たへぬ次第しだいである。

【餘論】起首きしゆより、夫子揚ちやう清芬せいふんに至いたるまでは、張良ちやうりやうの事ことで、その人ひとは、李白りはくが追慕つゐぼして措おかざる人ひとであるから、その道みちふところも、極きはめて切實せつじつである。胡月入こげつにゅう紫微しせいの六句くくは、張秀才ちやうしゆうさいの前途ぜん途を祝福しゆくふくし、我無われな燕霜感えんそうかん以下いひかは、自己じこに引ひき當あて、併あせて離別りべつの情じやうを述べたので、即ち送別そうべつの正文せいぶんである。

尋陽送弟昌峒鄱陽司馬作 尋陽にて弟昌峒鄱陽の司馬を送つて作る

桑落洲渚連 滄江無雲煙 桑落洲渚連り、滄江に雲煙なし。

尋陽非剡水 忽見子猷船 尋陽、剡水に非ず、忽ち子猷の船を見る。

送 尋陽送弟昌峒鄱陽司馬作

飄然欲相近。來遲杳若仙。

飄然、相近づかむと欲す、來る遅く、杳として仙の若し。

人乘海上月。帆落湖中天。

人は海上の月に乘じ、帆は湖中の天に落つ。

一觀無二諾。朝歡更勝昨。

一觀、二諾なく、朝歡、更に昨に勝れり。

爾則吾惠連。吾非爾康樂。

爾は則ち吾が惠連、吾は爾の康樂に非ず。

朱紱白銀章。上官佐鄱陽。

朱紱白銀の章、上官は鄱陽に佐たり。

松門拂中道。石鏡廻清光。

松門、中道を拂ひ、石鏡、清光を廻らす。

搖扇及干越。水亭風氣涼。

扇を搖かして、干越に及び、水亭、風氣涼し。

與爾期此亭。期在秋月滿。

爾と此亭に期し、期は秋月の満つるに在り。

時過或未來。兩鄉心已斷。

時過ぎて、或は未だ來らず、兩郷、心すでに斷ゆ。

吳山對楚岸。彭蠡當中州。

吳山、楚岸に對し、彭蠡、中州に當る。

相思定如此。有窮盡年愁。

相思、定めて此の如く、盡年の愁を窮むるあり。

【字解】

【一】桑落洲 太平寰宇記に「桑落洲は、舒州宿松縣西南一百九十四里に在り。江水、はじめ、鄂陵より分派して九となり、ここに於て合流す、これを九江口といふ、この洲と江州尋陽縣と、中流を分つて界となす」とあり、一統志に「桑落洲は、九江

府城の東北に在り、江を過ぐる五十里、むかし、江水泛漲し、一桑を此に流す、因つて名づく」とある。【二】子猷船 王子猷、船に乗じて、剡溪に往き、戴安道を訪ひしこと、前に見ゆ。【三】無二諾 季布の事、前に見ゆ。【四】惠連 宋書に「謝惠連、幼にして才悟あり、しかも、輕薄、父方明に知られず。靈運、かつて、始寧より會稽に至り、方明に造り、惠連を過視し、大に相咨賞し、方明に謂つて曰く、阿連、才悟かくの如し、而して、尊、常見と作して之を遇す」とある。【五】朱紱 紱は綬、即ち印組。【六】白銀章 章は印章。【七】上官 凡そ官に除せられて任に到る、これを上官といふ。【八】佐 司馬は州の佐職、刺史の次席なるが故に云ふ。【九】松門 江西通志に「松門山は、南昌府城の西北二百十五里に在り、鄱湖の東に枕み、西岸悉く松を生じ、遙に望めば門の如し、故に名づく。上に石鏡あり、人を照らすべし。謝康樂の詩、攀崖照石鏡、牽葉入松門、是れなり」とある。【一〇】干越 太平寰宇記に「干越渡は餘干縣西南一百二十歩に在り、津吏を置いて主守し、四時絶えず。干越亭は餘干縣の東南三十歩に在り、屹然孤立、古今遊ぶもの留題章句多し」とあり、江西通志に「干越亭は、饒州府餘干縣羊角山に在り。文公談苑に云ふ、前に琵琶洲を

瞰、後に思禪寺に枕む、林麓森鬱、千峰秀を競ふ、唐初張彦俊建つ」とある。【一一】彭蠡 通鑑地理通釋に「彭蠡は江州尋陽縣に在り」といひ、括地志に「縣の東南五十里に在り」といひ、六典註に「一名宮亭湖、南康軍星子縣南、江州彭澤縣西に在り」といひ、地理志に「豫章郡彭澤縣西に在り」といひ、郡縣志に「都昌縣西六十里に在り、尋陽縣と湖を分つて界となす、禹貢に揚州彭蠡既豬、即ち江漢匯するところの澤、江西江東の諸水を合せ、豫章饒州南康軍三州の地に跨る」とある。

【題義】

鄱陽は、唐時の郡名、即ち饒州、江南西道に屬し、上州であつて、司馬一人、從五品である。この詩は、族弟昌峒といふものが、鄱陽郡の司馬となつて赴任するを送つて作つたのである。

【詩意】

桑落洲は、汀渚連互し、ここでは、九派の水が合流するから、滄江渺漫として、雲煙も起らず、一望ただ碧水のみである。尋陽は、剡溪に非ざれども、忽ち子猷の舟を浮べて來り訪ふものがあつた。かくて、飄然として、此方からも之を迎へ、やがて相近づかむとするも、その來ること遅くし

て、杳然たる様は、さながら神仙の如くである。すでにして、その人は海上の月に乗じて來り、帆影は湖中の天に映つて見え、漸く到着した。そこで、一たび相逢うて二諾なく、今日歡を爲せば、前日にも勝つて居るやうに思はれる。汝は、即ち吾が惠連であるが、吾が才、拙にして、汝の爲に康樂たること能はざることは、まことに遺憾である。今や、汝は朱綬銀印を佩び、新に司馬に任せられて、鄱陽の地に赴任することであるが、鄱陽は、風景の善い處で、松門山は、その中道に當り、そして、石鏡は皎皎として、清光を反映し、扇を搖かしつつ、干越渡に往けば、そこには、水亭があつて、風氣殊に涼しさを覺える。ここに、汝と約束して、干越亭に於て、再び相見やうと思ふので、その期は、秋月の満つる頃、即ち仲秋の十五夜にしたい。かくて、その時が過ぎても、ひよつと往かなかつたならば、何か事故の起つた爲で、汝と我と、兩郷に於て、互に斷腸の想を爲すであらう。ここより眺めやれば、此方の吳山は、遠く其方の楚岸に對し、その間には、彭蠡の湖水があつて、これを隔てて居る。されば、平生の相思は、定めて此の如く、終年の愁を窮めて、長しへに、情に堪へぬことである。

【餘論】起首八句は、弟の潯陽に來るまでの事を敘し、一觀無二一諾は、相逢うて歡を盡したることを述べ、朱綬白銀章の六句は、鄱陽の風土を思ひ、與爾期此亭以下は、他日その地に於て再會しやうといふ意を述べ、送別の正文としたのである。

餞校書叔雲

校書叔雲に餞す

少年費白日。歌笑矜朱顏。

少年、白日を費し、歌笑、朱顏を矜る。

不知忽已老。喜見春風還。

知らず忽ち己に老い、喜んで春風の還るを見る。

惜別且爲歡。徘徊桃李間。

別を惜んで、且つ歡を爲し、徘徊す、桃李の間。

看花飲美酒。聽鳥臨晴山。

花を見て美酒を飲み、鳥を聽いて晴山に臨む。

向晚竹林寂。無人空閉關。

晚に向つて、竹林寂たり、人なくして空しく關を閉づ。

【字解】【一】費白日。歲月を徒消すること。【二】竹林寂。晉書に「阮咸、任達にして拘はらず、叔父籍と竹林の游を爲す」とある。【三】閉關。門を閉づる、江淹の恨賦に閉關却掃、塞門不仕とある。

【題義】これは、校書郎の職に居る叔父の李雲といふものの遠行を餞して作つたのである。

【詩意】少年の頃には、無益に歲月を徒消し、日夕歌笑しつつ、紅顏の豔豔しく、わが年の尙ほ若いことを矜つて居た。かくて、忽然として、すでに老境に向ひしをも知らず、春風歸り來り、花の再び咲き出でたのを喜んで居た。ここに、君の行を送らむとし、別を惜むが爲に、しばらく、歡を爲し、折から、花正に酣なる桃李の間を徘徊し、やがて花を看つつ、美酒を飲み、のどけき鳥の聲を聞きつつ、晴れた山の景色を見下ろして樂んで居る。兎角する内に、日將に暮れなむとすれば、竹林も淋し

く、わが叔父は既に去つて仕舞ひ、あたりに人なく、仕方が無いから、むなしく門を閉ぢたので、まことに、岑寂の想に堪へぬ。

【餘論】 嚴滄浪は起四句を評して「今昔無限の情態、この四句に盡く」といひ、又結末を評して「結意最も幽、許多の情境を收め盡し、極めて矜束、極めて寛宕、すでに雅且つ異、餞遺の詩、これを第一と爲す」といひ、乾隆御批には、全篇を評して「落落として風致あり」といつた。

送王孝廉觀省

王孝廉の觀省するを送る

彭蠡將天合。姑蘇在日邊。

彭蠡、天と合し、姑蘇、日邊に在り。

寧親候海色。欲動孝廉船。

親を寧せむとして海色を候し、孝廉の船を動かさむと欲す。

窈窕晴江轉。參差遠岫連。

窈窕、晴江轉じ、參差、遠岫連る。

相思無晝夜。東注似長川。

相思、晝夜なく、東注、長川に似たり。

【字解】 一 彭蠡 江西志に「鄱陽湖は、南昌府城の東北一百五十里に在り、即ち禹貢の彭蠡なり、一名宮亭湖、一名揚湖、南昌饒州南康の三郡に跨り、上流諸水を合して入る、周圍數百里、闊さ四十里、長さ三百里、春夏の間ごとに、江漢水漲れば、彭蠡の水、鬱として流るるを得ずして、逆回倒積、遂に巨浸を成し、瀾渺數百餘里、復た畔岸なし。二水漸く消するに速べば、彭蠡の水、はじめて大江に出て、南岸に循つて行き、二水と頽頽して海に趨る」とある。 二 姑蘇 楊齊賢の解に「姑蘇は蘇州吳郡、その東

海、日出の地に近きを以て、故に日邊といふ」とある。 三 寧親 歸つて親を訪ふ。 四 孝廉船 世説に「張憑、孝廉に擧げらる、都を出でて、その才氣を負ひ、必ず時彦に參せむといひ、劉尹に詣らんと欲す。郷里及び同じく擧げられしもの、共に之を笑ふ。張、遂に劉に詣り、清言日を彌り、因つて留宿す。曉に至つて、劉曰く、卿、且つ去れ、正に卿を取つて共に撫軍に詣るべし」と。張、船に還る。同侶、何處に宿せしかを問ふ。張笑つて答へず。須臾にして、眞長、傳を遣し、張孝廉の船を覺めしむ、同侶愧愕す」とある。

【題義】 この詩は、孝廉王某の歸つて親に觀せむとするを送つたのである。王の名字等は不詳。それから、詩に因つて考へると、王孝廉は、今鄱陽に居り、そして、親は姑蘇に在るものと見える。

【詩意】 彭蠡の湖水は、渺漫天と合し、そして、姑蘇は遠く日出の邊に在つて、相去ること幾千里、これが即ち君の行く手の路である。君は、今親を省せむとして、海色の平穩ならむとするを候し、そして、孝廉の船を移して、愈よ出發せむとして居る。これから先の旅路に於て、窈窕たる晴江は、幾たびか轉折してうねり、參差たる遠岫は、一帯長く延いて連り、水國の景色は、あくまで、平遠である。かくて、君の去りし後、わが相思の念は、晝夜の別なく、絶えず、東に向つて、さながら長川と同じである。

【餘論】 これは五律であるが、頷聯は流水の對をなし、一氣に下つた處が面白い。頸聯は、なほ六朝の風味を存して居る。